武装守護霊

改樹考果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
武装守護霊

【Ｎコード】
Ｎ８３６４Ｓ

【作者名】
改樹考果

【あらすじ】
両親の仕事の都合で会った事もない叔母の下で暮らすことになった少年・黒樹夜衣斗が、叔母が住む町『星波町』で巻き込まれる謎の存在『武装守護霊』に関する事件に巻き込まれ、知る事が出来なかった自らの宿命と運命に邂逅し、世界に蔓延する『宿命の悪意』に立ち向かう物語。

プロローグ『選択の武霊使い』１（前書き）

この小説は武装守護霊（旧）と書いてある作品を基に新たに書き起こした新たな武装守護霊です。ですので、旧版と展開が同じ所が多々あると思いますが、旧版より面白く読み易く書く事を心掛けていますので、楽しく読んでいただけると幸いです。

プロローグ『選択の武霊使い』1

人工島に築かれた巨大な学園に、全てが黄金に輝く大樹が生えていた。
下から見上げても全体を全て見る事が出来ないほど巨大な樹。
直視すれば眩しいぐらいに輝いている黄金なのに、何故か周囲の夜の暗闇を邪魔せず、空にある星の光をかき消していなかった。
その樹を本土と人工島を繋ぐ大橋のほぼ中央で見ている一人の男性がいる。
電動車椅子に乗り、喉に酷い手術後がある四十代ぐらいのその男性は、待っていた。
視線の先にある黄金の大樹が果実を実らし、落ちるのを。
そして、
黄金の大樹に無数のつぼみが着き始めた時、彼の背後に一人の青年が現れる。
彼は振り返りもせずに電動車椅子に備え付けられているノートパソコンを操作。
「「やっぱり来たね」」
ノートパソコンから男性の人工音声が発せられた。
男性はこうして普段のコミュニケーションを取っており、初見の者は大体驚く。
だが、声を掛けられた青年は大して驚きもせず、黙っている。
つまり、少なくともこの青年は男性の知り合いである様だった。
「「きっと君なら、僕の所に来る『選択』を選ぶ……そう思っていたよ」」
男性のその言葉に、青年は何も言わず、代わりに溜め息を吐いた。
その溜め息に男性は苦笑し、
「「そうだね。君が僕を止めない様に諭しておきながら、僕は心の奥底で……君が来る事を望んでいた……正直、僕も迷っていると

言う事なのだろうね……」」

そこまで言わせて、男性は少し間を置く。

何かを思い起こしているかのように目を瞑り、次に目を開けた時には強い意志の光が宿っていた。

「「だが、それでも僕は止まるわけにはいかない」」

そう言わせて、電動車椅子を操作して、身体ごと振り返る男性。

「「さあ、始めようか、お互いに最後の戦いを」」

男性の視界が青年の顔を収めようとしたその瞬間、

彼の『意識が目覚めた』。

気が付くと、青空が見えた。

彼がそれまで見ていた不可思議な夜の光景とのあまりにものギャップに、目を覚ましても身体を動かす事が出来ない。

「大丈夫かい？」

不意に聞えた自分を心配する声に、彼ははっとし、上半身を起こす。

すると彼の視界に、白髪で立派な白髭を生やした老人と、その周囲に彼と同じ様に芝生の上に座っている六人の男女が入った。

一人の男性はメガネを掛けていたが、そのメガネを掛けるはずの『両耳の場所には耳がなく、酷い傷跡があるのみ』で、メガネはゴム紐で頭に固定されていた。

傷跡は、聴力が失われている事を連想させるのに十分な物だったが、不思議とそれを不便にしている様子はない。

耳の無い男性のその隣には、サングラスを掛けた女性がおり、隙間から見えるその下の『両目周辺には酷い傷跡があり、瞼は何とか残ってはいても、眼球は明らかに人工物』の様だった。

隣の男性同様に、視力の一切を失っているのは間違いなさそうだが、これも同様にそれを不便に感じている様子はない。

目の無い女性のその隣には、米国人らしき男性がおり、その『両

足が腰から義足になっており、足が無い』。
　足が無い男性のその隣には、中国人らしき女性がおり、『見た目上はどこも欠けていないが、服の至る所から大小様々なチューブが出ていて隣にあるいくつもの機械に繋がり、内臓が無い』。
　内臓が無い女性のその隣には、英国人らしき男性がおり、その『両腕が肩から義手になっており、腕が無い』。
　腕が無い男性のその隣には、露国人らしき女性がおり、その『鼻が義鼻になっており、鼻が無い』。
　身体のどこかが欠損しているこの場の者達の中で、唯一どこもの欠損していない老人は国籍不明だが、少なくともコーカソイドであるようなので、日本人ではないのは間違いない。
　彼らが何の為にここに集まり、何をしているのか、はたから見ただけでは誰も分からないだろうが、少なくとも身体のどこかが欠損した若者達が、老人に師事している事は間違いなさそうだった。
「「師匠……今見たのは一体なのだったのですか？」」
　意識がようやくはっきりしたのか、彼はこの場にいる老人以外全員が思っていた事を、膝に乗せていたノートパソコンに喋らせた。
　彼の『喉には酷い手術跡があり、それにより喋る事が出来ない』様だった。
　そして、彼の後ろには、車椅子があり、足はちゃんと在っても足として機能はしていない事を示唆している。
　まるで彼が先程まで見ていた不可思議な夜の光景に出てくる男性をそのまま若くしたような姿。
　それが意味するのは一つ。
　彼の問いに頷いた老人は、
「今回あなた達に体験させたのは、『予知夢』です」
　そう言って若者達を絶句させた。
　それはそれぞれが違う光景を見ており、そして、その光景が個人個人望まない光景であった為の絶句。
「それぞれが『宿命の悪意』に『負けた場合に迎えるであろう最

大の選択の時』……それを見せる様に設定しました」
老人は言葉に、何人かが顔を青ざめさせたが、何人かは特に反応らしい反応はしなかった。
見様によっては何かを抑えている様に見えるその無反応に、老人は特に気にせず、
「私が見せた未来からして、皆が同じ人物……つまり『主人公』を見たのでしょう」
主人公。
その老人の言葉に、全員が複雑な表情を見せ、主人公と言う言葉に『通常では使われない意味』がある事を示していた。
「これが意味するのは……宿命の悪意に君達が負ければ、君達は間違いなく『宿敵』となると言う事……それが君達の選択だと言うなら、私はそれを非難するつもりも、怒るつもりもありません……ですが、」
老人は空を見上げ、しばらく青空を眺める。
そして、ゆっくり顔を正面に戻し、
「この『シェルトン＝シルベリア』は願わずにはいられない」
自分の弟子達を見回しながら、
「願わくば、君達に与えた『運命を変える選択』が、あらゆる宿命の悪意に打ち勝つ事を……」
老人・シェルトン＝シルベリアの言葉に、七人の弟子達はそれぞれ違う表情を浮かべた。
決意を、
愉快を、
思考を、
逡巡を、
確信を、
無心を、
そして、彼は、茫然を浮かべ、
それぞれが見た『最悪の未来の先』を思い浮かべた。

選択する事を怖いと思った。
どんな時でも、
喜びを感じている時でも、
怒りを感じている時でも、
哀しみを関している時でも、
楽しみを感じている時でも、
選択する事は怖かった。
……だけど、選ばなくちゃいけない。
選ばなくてはいけない。
それが、俺の運命だから、
それが、俺の宿命だから、
それが、俺の選択だから、
選ぶ。
俺は選び、進み、また選択する。
俺が死ぬまで、
俺が存在しなくなるまで、
選択し続ける。

宿命に打ち勝ち、
運命を変える為に、
選択する。
例えそれが間違った事だったとしても、
例えそれが新たな運命を呼ぶとしても、
例えそれが逃れようのない宿命を早めるとしても、
俺は選択した。
その結果、俺は――

プロローグ『選択の武霊使い』

子供の頃……いや、今でも子供だから……正確には物心付く前から、俺は両親の仕事の都合で日本各地を転々としていた。
もっとも、小学生になる頃には転々と住む場所を変えるのが教育に悪いと思ったのか、両親は一戸建ての家を買い、定住し始めてはいた……だが、直ぐに両親は仕事の都合で家を空ける事が多くなり、最近では長く家を開ける事も多く……嫌な予感はあった。
両親が度々家を空ける事は、最初は寂しかったが、慣れた今ではある意味都合がよく、色々と自由に出来ていたんだが……困った事に、今度の両親の仕事は海外出張で、かつ、長期に渡ると言う事だった。
しかも、外国の幾つもの国を転々とするらしく、とても、英語す

らまともに喋れない俺が付いていける出張ではなく、かと言って長期間も俺を一人で家に居させるのも、俺自身も、両親も不安。

なので、両親は苦肉の策として今まで俺が会った事が無い母方の叔母の所に急遽俺を預ける事になり……そんなこんなで、今、俺は一人で叔母が住む町に向かって電車で移動している。

叔母の住む町の名は、『星波(ほしなみ)町』。

山と海に囲まれ、元空港建設予定地だった人工島に上に建てられた『星波学園』と言う小中高大一貫の学校がある町で……そこの学園に、俺はゴールデンウィークの休み明けから通う事になっていた。

叔母のいる町へと向かう電車に揺られながら、俺は大きくため息を吐いた。

正直、一度も会った事が無い……と言うか、親戚がいるなんて、今回の事があるまで知りもしなかった……なんでも、うちの両親は駆け落ち同然で結婚したらしく……それで今でも両家とは疎遠で、親戚付き合いと言う物をしなかったらしい……が、そう言う事は前もって教えて欲しい様な……まあ、あまり興味を覚えなかった俺もいけないんだろうが……いけないのか？　……ん～……とりあえず、今はどうでもいい話か……

って、両親は親類の中で唯一連絡を取り合っているのが、互いの弟・妹だけらしく、そのどちらかに預けるとなると、ド田舎に住んでいる父さんの弟より、町に住んでいる母さんの妹の方がいいだろうって話になったらしい。

ド田舎に住んでると言う父さんの弟にも興味はなくはないが……なんでも……俺自身は憶えがないが、幼い頃にそのド田舎に少しの間だけ住んだ事があるらしい……が……本当に憶えが無いんだよな……まあ、とにかく、今は叔母さんの事だよな……

母さんの話によると、叔母は少女漫画家をしているらしく……そのせいか、社会人としてちょっとだらしなく、駄目な部類に入るそうだ。

少し漫画家に対して偏見を感じなくもないが……まあ、実の姉が

そう言うのだから……警戒をしとくべきか？　……と言うか、そんな人の所にいきなり行かなくちゃいけないこの状況……憂鬱だ。

俺は思わず深い溜め息を吐き、外を見た。

流れる海岸の光景。

海沿いを走るこの電車は、次で降りる予定の星波駅に到着する。

だからか、

初めての一人での長旅？　遠出？　……まあ、どっちでもいいか……なのだから、少しぐらいは外の風景を楽しんでもいいか……

なんて事を……家を出てから初めて……色々な要素で余裕が全く無かったせいだろうけど……考え、何となしにぼ～と外の光景を見ると、視界の隅に何かがあるのに気付いた。

遠目からでも分かる巨大な橋。

その先にある学校らしき建物が無数に建つ人工島。

……あれが……これから俺が通う学校か……ネットで航空写真とか見てたから、ある程度予想はしていたが……実際に見るとやっぱりでかいな……

そんな事を思いながら、俺は視線を車内に戻した。

進行方向上にトンネルを確認したからで……まあ、何と言うか……窓に映る前髪で目を隠した自分の顔を見たくないからって言う理由が一番強いか……どんだけ自分が嫌いなんだか……

そんな自分に苦笑していると、ほどなくして電車はトンネルに入る。

このトンネルを抜ければ、星波町。

いよいよ全く知らない土地での生活が始まるのか……

そう思うと期待より不安が大きく、胃がきりきりし始め……再び溜め息が出て、何となしに何もない外を見てしまう。

窓に映る自分の姿を見ない様に、流れる壁を見る。

ん？

一瞬、その壁に『太い赤い線』が見えた様な気がした。

その次の瞬間、ぞわっと今まで感じた事がない違和感を感じ、急

に意識が薄れ出す。
　明らかに睡魔とは違う意識の薄れに、恐怖を感じて必死な抵抗をしようとするが……どうする事も出来ず――――

プロローグ『選択の武霊使い』2

気が付くと……見知らぬ公園に俺は居た。
「夜衣斗（やいと）」
不意に背後から名前を呼ばれ、驚いて振り返ると、そこには悲しげな表情で俺を見る見知らぬ女性がいて、
「やっぱり『こういう運命』になったね」
俺と目が会うとそんな事を言いながら、優しく微笑んだ。
俺の前に現れた女性は、周囲の公園には似つかわしくない、どこかの舞踏会で着られていそうな簡素な白いドレスを着ていた。
何が何だか……
意味が分からず、その女性を凝視していると、
「サヤ」
？
「忘れちゃった？　夜衣斗が付けてくれた私の名前だよ？」
はぁ？
俺がこの女性に名前を付けた？
全く覚えが無い、どう見ても年上の女性にそんな訳が分からない事を言われ、俺は困惑を通り越して混乱した。
もっとも、混乱したからと言って、この状況が分かるわけではないので……
腕を組み、片手で口を覆い、鼻だけでゆっくり深呼吸。
……まだ混乱はしているが、思考出来るぐらいまでは落ち着いた。
その仕草を見て、サヤと名乗った女性は、小さく笑い、
「ふふ。その癖を『直接』見るのは久し振りだわ。夜衣斗は身体が大きくなっても、そう言う所は子供の頃から変わらないよね」
！？
確かに今の癖は子供の頃からしている癖で、自分を落ち着かせる時や考える前によくしている。

今のでますます混乱したが……落ち着け、とにかく、
「……何者なんだ？　あ」
「サヤ」
あんたと言おうとした俺の言葉を遮って、ちょっと怒った感じで自分の名前を言うサヤ……さん？
「さん付けはいいよ。ただのサヤで」
ん？
……今の思考、口に出したか？
俺の疑念に、サヤさ
「だから、サヤでいいって、昔もそう呼んでくれたでしょ？」
昔って……憶えが……って、そんな事より！　まさか！？　本当に心が読めるのか！？
俺の心の問いに、サヤは頷き、
「ようやくサヤって思ってくれた」
微笑んだ。
超能力者か？
「違うよ」
じゃあ、魔法使い。
「それも違う」
それも違うって……本当に、何者なんだ？
「ん～……何者って言われても……」
俺の問いに、頬に人差し指を当てながら腕を組み、困った様な表情を見せ、
「私は『夜衣斗のサヤ』だもの」
と訳が分からない事を言う。
俺のサヤって……
「ふふん♪　ちょっと嬉しいくせにぃ」
……勝手に心を読むな……
からかう様に言うサヤに、俺は少しげんなりした。
……まあ、少なくとも俺に悪意あるわけじゃないようだが……一

体ここはどこなんだ？　俺はサヤに誘拐でもされたのか？　だとしたら、何の目的で？

その俺の矢継早な問いに、サヤはキョトンとした顔になり、少し間を空け、

「うふふ。確かに私が夜衣斗をここに連れてきたから、『ある意味』誘拐かな？」

ある意味？

「だって、ここは『夜衣斗の心の中』だもの」

……はあ？

「だから、夜衣斗の身体は何処にも行ってないの」

俺の心の中ぁ？

サヤの電波発言に、疑問より戸惑いを感じたが、

「電波は酷いって」

こう実際に心の中を読まれていると言う事は、ここが俺の心の中と言う裏付けになる……か？

……まあ……つまり、何か？　俺は夢を見ているって事か？

「うん」

事も無げに同意するサヤに、俺は何とも言えず黙るしかない。いや、元から喋ってないが……

「もちろん普通の夢じゃないよ。私が夜衣斗の意識をここに連れてきたからね」

連れてきたって……あの睡魔とは違う意識の薄れか？

「納得した？　理解した？」

……そんな事を言われてもな……夢と言う割にはあまりにもリアルな感じがするし、起きている時以上に意識がはっきりし過ぎている……ん～それに……

どうも釈然としないので、俺は周囲を見回す。

何度見ても、どう見ても、見覚えのない公園。

これが俺の心の中だと言うのなら、何かしらの見覚えがあってもいいはずだと思うんだが……

「仕方がないよ。だって、夜衣斗はまだ忘れているんだもの」
忘れている？　何を？
「色々。重要な事から、他愛のない事まで、何もかも……ついでに私の事もね」
……ちょっと待て！　そんな記憶の欠如があるのなら、いくらなんでも記憶の不自然さ気付くだろ！？
「忘れている事は、日常生活に関係ない事だから、忘れていても不自然にならなかったんだよ」
日常には関係ない？
「うん。『非日常』の記憶をね」
非日常……何を指して非日常とするか……
まず思い浮かべるのは、漫画やゲームなど非日常。
次に思い浮かべるのは、暴力や欲望が支配する非日常。
色々と考えはするが、俺の記憶の中にそれらと繋がり思い起こすものはなかった。
俺の今までの人生は、少なくとも非日常と呼べるものと関わりを持った事がない……良い人生を歩いているとは言えないが、『ある意味』普通の人生のはずなのだが……
「大丈夫。徐々に思い出すよ」
そう言ってサヤは俺の後ろを指差した。
「だって、『閉じられてたもの』が、開き始めているんだもの……だから、いずれ『思い出さざる得なくなる』」
閉じられていたもの？　思い出さざる得なくなる？
サヤの言葉に眉をひそめつつ、指差す方向を確かめる為に後ろを振り向くと……
「……なんだありゃ……」
思わずそうつぶやいてしまうほど異様な光景があった。
それは巨大な……円状に集まった宙に浮く黒い枝の塊。
見上げてもようやく全体像が見えるぐらい巨大なそれは、俺の見ている前でぽろぽろと枝を落としていた。

落としていると言っても、それらの音は聞こえない。
つまり、それだけ離れていると言う事であり、見えている以上にそれはでかいと言う事になる。
……まあ、俺の心の中だと言うここに、通常の物理法則が存在しているならの話だが……って言うか、ここが俺の心の中なら……あんなのがある心って……俺、大丈夫なのか？
そんな事を思っていると、更に変化が起きた。
枝が一つ一つ落ちる度に、枝が落ちた場所から水の様な物が噴き出す。
これが何を意味しているのか分からず、サヤの方を再び見ると、サヤは最初に見せた悲しそうな表情を浮かべていた。
「今の夜衣斗だと疑問は尽きないと思う……でも、全部思い出せば、その疑問も全部晴れるから……」
思い出せば……って言われてもな……
もう何が何だか訳が分からず、ひたすら困惑したその瞬間、背後で何かが弾けた様な強烈な音がした。
慌てて振り返ると、黒い枝の集まりのほんの一部が吹き飛んでいて、そこから大量の水が噴き出……？　……え!?

公園の中にあるブランコに、幼い頃の小さい俺が座っていた。
そして、その目の前に……サヤがいた。
「ねえ。名前を付けてよ」
そう言うサヤに、小さな俺は小首を傾げた。
「おねえさん、名前ないの？」
「そうだよ。理解した？　納得した？」
「う、うん？」
「だから、付けて」
「うん……わかった」
催促するサヤに、小さな俺は頷き、いつもの癖で腕を組んで手で

口を塞ぎ、一生懸命考え始める。
少しして、
「ん～……じゃあ……お姉さんは僕の　　なんだから…
…サヤ。サヤって名前はどう？」
小さな俺のその提案に、サヤは少し苦笑して、小さな俺の頭を撫でた。
「ありがとう。今日から私はサヤね。そして、夜衣斗。今日からよろしくね」
そう言って微笑んだサヤに、小さい俺は微笑み返した。

唐突に思い出した幼い頃の記憶。
一部欠けている部分があったみたいだが……あまりの唐突な思い出し振りに、それを気にしている余裕はなく、思わずサヤを見る。
「思い出した？」
そう言って微笑むサヤだが……そのサヤの姿は、『幼い頃に見たまま』だった。
どれくらい幼い頃の記憶なのか、前後の記憶があいまい過ぎて、定かじゃない。
だが、少なくとも視線の位置からしてその姿は間違いなく小さく、かなり幼い。
だとすると、十年以上前なのは間違いなく……つまり、普通の人間ならそれ相応の変化がないとおかしいのに、サヤにはその変化が一切見られなかった。
……まあ、そもそも、ここが実際に俺の心の中なら、生身の人間がいる方が不自然だよな……つまり、精神体……幽霊？　取り憑かれているのか？　十年前から？
サヤは何も言わない。
だが……当たらずも遠からずって感じ……なのか？
何故かサヤが幽霊と言う考えに、絶対的に違うと俺の心が否定し

ていた。
確証はない。
だが、確信がある。
そんな訳が分からない心の状態に戸惑っていると、
「夜衣斗」
真剣な面持ちで俺を真っ直ぐ見詰めるサヤに、俺は戸惑い、目線を反らしたいのに反らせなかった。
人の視線は苦手なんだが……
「夜衣斗には、これから『死の運命』が待っているわ」
……？　……死……はぁあ！？　なんだそりゃ？
「『今の』私にはどうする事も出来ないけれど……これだけは憶えていて」
サヤは胸に手を当て、
「私は、夜衣斗の『運命を変える選択』」
運命を変える選択？　俺の？
「夜衣斗が望むなら、死の運命だって『変えてみせる』」
変えて見せるって言われても……
「今は私の言葉を信じられなくてもいいわ」
……
「でも、もし、その時が来たら選んで、運命を『変えるか』、『変えないか』」
不意に視界がかすみ始め、
「……でも叶うなら、そんな時が来ない事を祈るわ」
その言葉と共に、俺の意識がブラックアウトし――

再び気が付いたら電車は星波駅に着いていた。
しかも、発車ベルが鳴り出したので、俺は大慌てで電車から降りる。
……何……今の？

一瞬、日頃からしている想像……妄想？　が悪化でもしたのかと思ったが……記憶に残る公園やサヤの存在感が、それを否定した。
あまりにも日常からかけ離れた出来事に、俺はしばらく呆然としていたが、不意に携帯電話がなったので、特に考えもなく出ると、
「……はい」
「「いや～ごめんね夜衣斗ちゃん。お姉さんすっかり忘れていたわ」」
つい数日前に聞いた事がある叔母の声だった。
どうやら、叔母からの電話だったようだが……
「……忘れてた？」
「「ここ最近、締め切りに追われててね。多分、それで忘れちゃったんだわ」」
「……」
「「しかも、今現在も追われている最中でね。お迎えに行けないのよ」」
「……はぁ？」
「「そんな訳だから、自力で家まで来てね。住所は知ってるでしょ？」」
「……はぁ……まあ」
「「あ！　来る途中でプリン買ってきてくれると嬉しいな。でっかい奴ね。お姉さんそれが大好物なの」」
「……まあ、美味しいですよね」
「「そうなのよ。あのプルプルが堪らなくって……うふ♪　とにかくそう言う事だから、それじゃあねぇー待ってるよぉー」」
……な……なんじゃそりゃ！！！！

プロローグ『選択の武霊使い』3

怒りより……疲れが出てきて、俺は深い溜め息を吐いた。
とりあえず、駅前のコンビニででっかいプリンを二つ買う。
駄目な部類だと聞いてはいたが……まあ、これぐらいは予想の範囲内だと言えなくないが……予測の範囲内でも疲れが出てくるのは抑えられない。
……初っ端からこんなんでやっていけるんだろうか？
もう一回、深い溜め息。
訳分からない目に遭ったばかりなの……これはない。
……とにかく、今は訳が分からない事を考えるより……とっとと叔母さんの家に着いて、落ち着きたいな……まあ、携帯とかで地図を見れば、何とかなるか？
そう思って俺は叔母の家に向かって歩き出した。
歩きつつ、これから住む町の様子を見る。
ん～……普通の町かな？　当たり前だが……
などと思っていると、奇妙な光景が視界に入り、思わず歩みを止めた。
スピーカーだ。
それも、電信柱に一本一本あると言っていいほどスピーカーがある。
……海の直ぐ傍にあるから、津波対策とかそんなんでか？　……それにしては過剰なほどある様な……あれか？　所謂、役所の無駄使いって奴か？
そんな事を考えていると……不意にスピーカーからけたたましいサイレン音が流れ出した。
何だ！　何だ！？　津波か！？
俺は驚いて携帯電話を取り出し、地震でもあったのかと確認するが……特に警報らしきものを受信していない。代わりに叔母からの

着信があり、サイレンが収まるのを見計らって、出る。
　すると、
「「いい！？　夜衣斗ちゃん！　今から流れる放送をちゃんと聞いて、その指示に絶対に従って！」」
　などと言ってきたので、俺は困惑するしかない。
　そして、更に困惑させたのが、
「「「自警団から緊急警報。海側『はぐれ』発生ポイントにて『はぐれ』発生。外に出ている住民の方は至急避難マニュアルに沿って避難を始めてください。また、この放送に戸惑っている方は住民の避難誘導に従ってください。なお、『昨日』発生しているので訓練だと思う方もいるとは思いますが、これは訓練ではありません。繰り返します。これは訓練ではありません――」」」
　この放送内容だった。
「……何です……これ？」
　そう俺が口にするが、周囲の無数のスピーカーから発せられる放送に俺の声がかき消されたのか、
「「とにかく、今は何も考えずに避難して！　訳は後で説明するから！」」
　そう言って通話が切られた。
　一体何だっていうんだ？
　さっぱり訳が分からず、携帯電話を暫く見続けるが……
（夜衣斗）
わ！　……え！？
　唐突に頭の中に響く様に聞こえてきた声に、俺は一瞬パニックになり掛けるが、
（何？　もう私の声を忘れちゃったの？）
サヤ！？　な！　あ！　って、心の中に住んでるんだったな……
（やっと私のいる所まで『繋がっちゃった』からね。今はこちらから声を掛ける事も出来るよ）
　そう言うサヤの声に……やっぱり夢じゃなかったのか……いや、

まあ、夢だったのだろうけど……

（現実逃避したいのは分かるけど、これは現実。理解した？　納得した？）

……まあ……な……

頭の中に響く様に聞えるサヤの声に、俺は言葉にもならない色んな感情がぐるぐる。

サヤの声が起きてから聞こえたと言う事は、まず間違いなくあれは夢であっても現実で起きた事と言う事になり……ちょっと完全な夢だったんじゃないかと思い始めていた矢先だったので、心境複雑と言うか……と言うか、それ以前に……声を掛けられて改めて気付いた事なんだが……十年も俺の心の中に住んでたと言う事は……

サーと自分の顔が青ざめて行くのが分かる。

俺も一端の男であり、それなりの目覚めをしちゃっているわけで……それ以外にも、色々と知られたくない事や、隠している事が全部……

（うん。私には全部筒抜け）

……

サヤの同意に、一瞬、思考が止まる。

（もう！　固まってる場合じゃないって夜衣斗！　さっき私は言ったよね。これから夜衣斗に死の運命が訪れるって！　もしかしたら、今起こっている事がそれ『かもしれない』のよ！　早く逃げなきゃ！）

……かもしれないんだろ？

（夜衣斗の叔母さんが真剣な声だったでしょ？　それに町のこの様子。そうだとしか思えないじゃない）

と言う事は、サヤ自身は俺に降り掛かると言う死の運命を具体的に知らないわけか……

（私が知っているのは、『夜衣斗が私に接触出来る様になったら、夜衣斗の身に死の運命が降り掛かり始める』って事だけ）

なんだそりゃ……って！　降り掛かり『始める』！？
俺がそう驚いた時、
ズッチャっと音を発てて目の前に何かが落ちてきた。
一瞬、『それ』が何なの俺は理解出来なかった。
「あおぉぉおおぉぉん」
それは歓喜だろうか？　俺を見て空気が震えるような遠吠えを『それ』がした。
それは『犬』だった。
ただし、『全身からまるで肉の代わりの様に炎を噴き出す骸骨の犬』。
あまりの出来事に、俺は身体のみならず、思考も止まってしまう。
ただ、
（夜衣斗！　逃げて！　早く）
そう叫ぶサヤの声だけが、頭の中を駆け巡った瞬間、骸骨犬が俺に飛び掛かってきた。
それは俺にしては上出来過ぎる反応だった。
俺は手に持ったコンビニ袋をそいつに向かって投げ付けた。
狙いも定めず、反射的な行動だったが、投げられたコンビニ袋は骸骨犬の顔面に当たり、それが横に避ける隙を作った。
自分のこの反応に軽く驚きつつ、俺は全速力で駆け出す。
駈け出したはいいが、どう考えても俺の走る速度じゃ、あっと言う間に追い付かれる。速度もそうだが、持久力も、全くと言っていいほど俺はないから……
骸骨犬を避けた時、感じた炎の熱は現実で……そうなると、あからさまに鋭い爪と牙は俺を簡単に引き裂くのは間違いない。
背後に明確な死の気配。
これが死の運命だと言うのなら……サヤ！
心の中で強く呼び掛けるが、何故かサヤは一言も発しなかった。
さっきは呼んでもいないのに喋り掛けてきたくせしてぇえええ！
思わず恨み事を心の中で絶叫しながら走り続けた。

とは言っても、俺にずっと全力疾走をし続けるほどの体力はないので、直ぐに息切れを起こし、苦しくなる。

だが、背後から振り向かなくても分かるぐらい骸骨犬の足音がはっきりと聞えてきた為、足を止めるわけには！

足音の距離と、自分の速力・体力から数秒後に追い付かれると判断した俺は、賭けに出る事にした。

さっきの放送の中に、住民の避難誘導って言葉が在った。

それはつまり、この『町の住民』なら何とか出来る。もしくは『何からの手段』を持っているって事。

そこまで考えた時、一際大きい足音がした。

飛び掛かってきやがった！

そう判断した次の瞬間には、俺は咄嗟に近くの家に飛び込んでいた。

玄関前に転がり込む様に入ると同時に、背後から熱気を感じ、着地音が聞こえる。

こけそうな体勢を無理矢理戻して玄関に飛び付き、ドアを叩こうとして……気付いてしまった。

玄関の郵便受けに溢れるほど手紙やら新聞やらが詰まっている事に……

そして、振り返ると……そこには当然、骸骨犬がいて飛び掛かるタイミングを計るかのようにうろうろしていて……とても逃げれる距離じゃなかった。

今までの人生の中で一度も経験した事がない状況に、俺の動悸は更に激しくなり、頭がくらくらし出す。

正直、現実感がない。だが、骸骨犬から発せられる炎の熱気、アスファルトが焦げる臭いが、否応無しに俺をこれが現実だと自覚させようとする。

吐き気がする。

死。

『久し振り』に実感したその言葉。

もっとも、『前は自ら望んで』だったが……今は……そんな気はさらさない！

……だが……骸骨犬の鋭い牙は勿論、その足先にある鋭そうな爪、全身から出ている炎、そのどれもが喰らえば大怪我……いや、絶対にそれだけでは済まない。殺され……きっと喰われる……

……そんなのは……絶対に……嫌だ！

だからこそ、俺は覚悟を決めた。

いや、ただの逆切れなのかもしれない。

理不尽で、唐突過ぎる死と言う現実。

それが『昔の記憶』と重なって、噴き出した過去と現在の怒りが混ざり合い、いつもの俺なら絶対にしない事を決意させた。

腕一本を犠牲にして、骸骨犬を壁に叩き付ける！

明らかにキレた思考を理性が抑えるより早く、骸骨犬が足に力を溜め……飛び掛かって来た！

狙いは明らかに俺の喉元。

だったら！

喉の前に左腕を出し、前に突き出そうとした次の瞬間。

地響きを立てて何かが俺と骸骨犬の間に着地した。

そして、

「やれ、剛鬼丸」

と頭上から聞こえると共に、目の前の何かが動き、再びの地響き。

……えっと……？

何が起ったか分からず、突き出した腕を唖然としながら俺は降ろした。

俺の前には、教科書とかで見る戦国武将が着ている様な鎧甲冑があった。

しかも、二メートル以上はあるとんでもない大きさので……腕を地面に突刺している様だった。

その周囲には、炎を纏った骨が散らばっていて……つまり……この鎧甲冑が骸骨犬を殴り潰してくれたって事か？

俺が唐突な出来事とその鎧甲冑に戸惑い始めると、鎧甲冑がゆっくり地面から腕を抜き、振り返った。
目に映ったその顔は、何処をどう見ても『鬼』の顔だった。

プロローグ『選択の武霊使い』４

あまりも鬼らしい鬼の顔に……思わず、
これって……助かったんだよな？
と思ってしまったが、振り返った視線の先は俺にではなく、俺の丁度真上、家の屋根の方だった。
「よくやった剛鬼丸」
再び声がすると同時に、屋根から誰かが降って来て、剛鬼丸と呼ばれている大鬼に一旦受け止められて着地した。
降って来たのは、短髪で、若干強面の成人男性。
その腕には、『星波町自警団』と書かれた腕章を付けていた。
……つまり、この人はさっきの放送をした自警団の団員？
「君、大丈夫かい？」
近付いて来た自警団員の人は、顔付きとは違い気さくに話し掛けてきてくれたので、
「……はい、大丈夫です」
頷いて、そう応えると、自警団員の人は困った様に笑って、
「放送、聞いてなかったのか？」
「……聞いてはいたんですけど……その、周りに住民の人がいなくて……戸惑っている内に襲われてしまって……」
俺の返事に何か納得した様に頷き、
「なるほど、君、この町初めてだね？」
？
「……ええ、今日、引っ越してきたばかりですけど……」
「今日!?　……それはまたツイてないな……何もこんなイレギュラーな日に……」
イレギュラーな日？　……そう言えば、『昨日』発生しているので、とか言ってたよな……と言うか発生？　……一体
「……一体――」

今のは、目の前のは、何なんですか？
そう言おうとした時、周囲に何かが着地する音が聞こえた。
それも複数。
反射的に視線を向けると、そこには倒された骸骨犬と全く同じ骸骨犬が何匹もいた。
「っち。他の連中は何やってんだ」
自警団員の人は俺を庇う様に動き、腰に付けていた伸縮式警防を構えた。
「蹴散らせ、剛鬼丸」
自警団員の人の命令に、剛鬼丸は最も近くにいる骸骨犬に突撃し、拳を振るう。
その素早い拳撃に、骸骨犬は避けられず、吹き飛び、たった一撃で全身が粉砕された。
それを見た他の骸骨犬は、ターゲットを剛鬼丸だけにしたのか、一斉に剛鬼丸に襲い掛かる。
剛鬼丸は、襲い掛かってくる骸骨犬に対して……何もしない！？
当然、骸骨犬の爪や牙が剛鬼丸の鎧に突き刺さる。
思わず自警団員の人を見るが……その表情は余裕だった。
その余裕さに疑問符を浮かべながら視線を剛鬼丸に戻すと、攻撃を全身に受けている剛鬼丸は平然としている。
それどころか、肩に牙を突き立てている一匹の頭部を無造作に掴み、握り潰す。それに危機を感じたのか、一斉に剛鬼丸から離れようとする骸骨犬だが、何故か剛鬼丸から離れる事が出来ない。よく見ると、爪や牙が突き刺っている鎧が急速に修復されて、まるで鎧に掴まれているか様な状態になっていた。
そして、剛鬼丸は逃げられない骸骨犬を一匹一匹確実に握り潰し……全滅させた。
随分あっけない……だけど……今度こそ、本当に助かったのか……
最後の一匹が握り潰された所で、俺はそう思い、ホッとしてしまう。

それで、張っていた緊張の糸がぷっつりと切れたのか、玄関にもたれかかる様に座ってしまった。
かなり情けない自分と安心感に、俺は思わず深い溜め息を吐き、項垂れてしまう。
その俺の様子に自警団員の人は、
「だらしないな。お前、それでもおと――」
不意な小さな爆発音。
その音を疑問に思うより早く、自警団員の人の言葉が不自然に途切れたので、反射的に顔を上げると……見て――
……最悪だ。
と思った。
何故なら、男性は驚愕に目を見開き、自分の『腹を貫通した骨』を凝視していたからだ。
自身の腹に刺さった自警団員の人を押さえ、少し振り返って後ろを見る。
それによって俺に自警団員の人の背が露わになり……炎が縄状になって繋がっている骨が突き刺さっているのが見えた。
炎の縄は剛鬼丸に最初に粉々にされた骸骨犬の頭部の方へと繋がっていて、同様の炎の縄がばらばらになった周囲の他の骨にも繋がっている様だった。
全身から出る炎を爆発させて、骨を撃ち出した？
そう理解した時、炎の縄が一気に収縮し、ばらばらになっていた骸骨犬の骨が一気に集まり、元の形に戻ってしまった。
条件反射的に、自警団の人を見ると、腹に刺さった骨が戻らない様に剛鬼丸に骨を掴ませていた。
医学とか詳しくないから分からないが、骨が引き抜かれたらどうなるかぐらい俺でも分かる。
大量の出血を起こし……死ぬ。
ぞっとした。
自分の死を覚悟した事はある。

既に死んでいる人を葬式などで見た事がある。
だが、死ぬかもしれない人を、目の前で、見た事など……
あまりの事に茫然としていると、炎の縄が他の粉々になっている骸骨犬達にも起こり始め……瞬く間に復活した骸骨犬達に囲まれてしまった。
何のタイミングの悪さか、
「「自警団本部から緊急連絡。今回のはぐれは擬死をし、全身の骨を炎で飛ばす事が出来る模様。現在交戦中の『武霊使い』は十分に注意してください」」
と言う町内放送が入ったが、その注意するべき人は、
「お、おせえよ」
既に脂汗を流し、身動き取れない状況になっていた。
背中から腹に貫通している骨を戻そうと、その骨の持ち主であろう肋骨が一本欠けた骸骨犬が飛び跳ねる様に繋がる炎の縄を引く。
剛鬼丸が掴んでいる為か、骨は一切動かない。
だが、
「っく！」
自警団員の人が苦悶の声を上げる。
同時に、肉の焼ける臭いがし始め……想像したくないが……多分、突き刺さっている骨の温度がどんどん上がって、自警団員の人を内部から焼き殺そうと……ちょっと待て！　このまま自警団員の人が死んだら……
剛鬼丸は、自警団員の人の命令で動いている様だった。
命令なしでも動くようだが、自警団員の人に骨が刺さった時、骸骨犬を攻撃するのではなく、骨を安定させる様に動いた。
と言う事は、剛鬼丸の行動原理は、自警団員の人を中心と言う事。
必ずしも俺を守る為に動くと言う訳でなく――
不意に、骸骨犬達が後足で立ち上がった。
肋骨をこっちに見せるその姿は、次に何が起こるか安易に想像させるものだった。

内部が焼かれる痛みと、巨体の剛鬼丸により視界が制限されている自警団員の人には骸骨犬達の行動は見えない。
かと言って、自警団員の人が剛鬼丸に俺や自身を守る様に命令したとしても、周囲を囲まれている状況では、明らかに防ぎ切れない。
ああ……これで俺は死ぬんだ。
思わずそう思ってしまうほど絶望的な状況に、それを更に確信させる小爆発が、骸骨犬達から一斉に起こった。

プロローグ『選択の武霊使い』5

「夜衣斗」

不意にサヤの声が背後から聞こえ、俺は反射的に振り返った。ん!?　振り返った!?

気が付くと俺はまたあの身に覚えのない公園に立っていた。

振り返った瞬間に心の中に引き摺り込まれたって事か？　……まあ、だから振り返れたんだろうが……

「これで少しだけ時間が出来たよ」

そう言って微笑む目の前にいたサヤ……夢の中の時間の流れを自由に出来るって事か……まあ、夢の中ならそれも可能だろうが……だが……何のつもりだ？　……さっきは呼び掛けても出て来なかったくせに……

俺の問い掛けに、サヤはちょっと困った顔になった。

「夜衣斗。私は言ったよね……夜衣斗が私に接触出来る様になったら、夜衣斗の身に死の運命が降り掛かり始める……って」

それは……聞いたが……

「どうしてそんな事になると思う？」

どうして？

急な問い掛けに、俺は戸惑うしかなかった。

問い掛け自体も戸惑いの原因の一つだが、更に戸惑わせているのはサヤの悲しくも辛い表情だった。

それは俺に対しても向けられている表情にも思えるし、自分に対しても向けられている表情にも見える。

だからなのか、ピンと来るものがあった。

……つまり、乗り越える為に……サヤは自分の事を『運命を変える選択』と言ったから、何かがあるのは間違いないだろうし……運命を変えられるほどの『何か』なら……『その力を借りれば、それが新たな原因になる』……そう言う事だろ？

俺の答えにサヤは……躊躇いながら頷いた。
「だから、まだ自力で助かる可能性がある内は……応えたくなかったの……でも、もう無理な状況だものね……」
そう言ってサヤは悲しげに微笑んだ。
俺は溜め息一つ吐く。
強い力には代償が付き物だとは聞いた事があるが、今の状況から逃れる為にはわざわざ新たな死の運命を呼ぶ力を借りなくてはいけない……か……どんな力か分からないが……サヤがあの状況を何とかしてくれるのか？
「私じゃないわ」
首を横に振り否定するサヤ。
「私はあくまで『運命を変える選択』で、ただの夜衣斗の『サヤ』だもの」
……それって、つまり……どう言う意味なんだ？
訳の分からない答えになってない答えに、俺は思わず聞き返すが、サヤは微笑むだけで、それ以上は答え様としなかった。
だが、代わりにサヤは両手をおわん状にして俺に差し出す。
条件反射的にその手を見ると……そこには……え？
「何とかするのは、この子」
そう言うサヤの両手には、いつの間にか……見覚えのある……いや、正確には、『いつも考えているもの』が在った。
俺は幼い頃からオリジナルの物語を作る事を趣味としていて、今まで拙い物から壮大な物まで、色々な物語を作っている。
その作った色々な物語の中で、最も古く、最も長い、今でも考え続けている物語。
それが『王継戦機』と名付けている物語。
ある理由で一度リセットされた地球を舞台に、リセットする前の地球で作られた騎士の様なロボット『守護機騎』の一機を主人公にした話。
そのロボットの名前は、『オウキ』。

創り出したいくつもの物語の中で、俺が最も気に入っているキャラクター。
それのミニチュアが、サヤの掌の上に在った。
鋭角的な騎士甲冑の様な全身白銀のその姿。
まさにずっと考え続けてきたオウキそのものの姿だった。
だが……どう言う事だ？　オウキはあくまで俺の空想の産物であって、実際に存在している訳じゃない。
それがあの状況を何とかする？
疑問と言うより、不信の目をサヤに向けると、
「夜衣斗。私は言ったよね」
微笑むサヤ。
「私は運命を変える選択だって」
ふと、骸骨犬と剛鬼丸を俺はイメージした。
そもそも、あんなもの、現実に存在している事はまずありえない。
あれが何なのか……骸骨犬の方は自警団の放送で『はぐれ』って単語が出て来た事考えて、はぐれと呼ばれている物なんだろう。
そして、同じく放送で『武霊使い』って単語が出てきた事を考えると、剛鬼丸は『武霊』と呼ばれている存在。
両者とも全く別の行動原理で動いている様だったが、どちらも近い、同じ様な存在に感じられた。
何故なら、どちらも『人の空想の産物』の様な……空想の産物？
……まさか！
行き着いた思考の結論に、俺は驚愕で目を見開き、サヤを見る。
「ええ、そのまさかよ」
頷くサヤは、更に言葉を続ける。
「この子は『武装守護霊』。夜衣斗の『想像で武装し、夜衣斗を守護する霊体』」
……想像で武装し、宿り主を守護する霊体……だから武装守護霊。
だから武霊……
信じられない話だが、現に俺は骸骨犬と剛鬼丸と言う存在を目の

前で体感してしまっている。
信じるしかない。
信じられない。
信じたい。
期待や願望や不安や疑惑などの様々が現れては消え、ぐるぐると頭の中を回り、心をこれ以上に無いってぐらい掻き乱す。
混乱した思考のまま、身体？……夢の中でも身体は身体か……は心の奥底にある願望を体現しようとした。
オウキを、幼い頃から空想の産物だと思いながら、何度も欲し、空想の産物だと思いながら、何度も助けられた存在が、現実として、実体を持って現れる可能性がある。そんな可能性があるのなら、俺は……手に入れたい！
そんな願望が、俺の手を自然とミニチュアオウキに触れさせようとした。
だが、その瞬間、
「待って！」
サヤに制止の言葉を掛けられ、俺は思わず手を止めた。
「この子を手に取ったら、夜衣斗はもう引き返せなくなる」
そう言うサヤに俺は眉を顰めた。
何故なら、引き返すも何も、俺に死ぬなんて言う選択肢はない。
俺は何度か自ら死を望んだ事がある。
理由は……まあ、ある意味ありがちな『いじめ』によるもの……今でもその時受けた心の傷は癒えてはいないし、もし、完全犯罪が出来るのならきっと俺は迷わず、俺をいじめた奴らを……『殺す』。考えられる限りの無残で残忍な方法でだ……それだけの事を俺はされ……追い込まれていた。
少し思い浮かべるだけで怒りと恐怖が入り混じって蘇り、思考を乱し……当時の思いを思い出す。
殺すと言う選択をした自分に絶望し、苦痛だけの世界に絶望し……死のうとした。

崖の上に立ち、落ちて死のうとした。
包丁を手首に突き付け、頸動脈を切って死のうとした。
首に電気コードを巻いて、首を吊って死のうとした。
風呂に水を溜め、ドライヤーを投げ込んで感電死しようといた。
その度に、死の恐怖に襲われ、哀しむ家族や親しい人の顔が浮かび……結局は……出来なかった。
運が悪いのか良いのか、俺は幼い頃から死に対して深く考え、死に対して恐怖心を強く抱いていた。
また、当時は家族や親しい人を大切に思う純朴な心が在って……だからこそ、俺は死ぬ事が出来なかった。
あの時は自分で死ねないほど弱い人間なのかとも思ったが……今は、死ななくて良かったと思っているし、自分で死ぬ人間ほど弱い者はないとも思ってて……死ぬ理由より生きる理由の方が今は多い。
だから、今は強く生きたいと思い、死にたくないと思う様になっている。
きっと、何度も本気で自殺しようとした事が大きく影響しているんだろうが……その過程と決着を十年以上も俺に憑いているサヤが知らないはずはないと思うが？
俺の問いにサヤは辛そうな顔になった。
「勿論知っているよ……あの時、私はどうしてここにしか居られないのかと……強く、強く思ったもの……でも、今はようやく夜衣斗の側に居られる。心の中じゃなくて」
片手でミニチュアオウキを持ち、そっと俺の頬に手を触れるサヤ。
「こうやって触れられる距離に私はいる」
……顔が赤くなっているのが分かるが、それを止められるほど俺は器用じゃない。
しばらく見詰め合った後、サヤは俺の頬から手を離し、ミニチュアオウキをぎゅっと胸に抱き寄せる。
「夜衣斗……人は死んだらどうなると思う？」
唐突な問いに、俺は再び眉を顰めた。

……『無』だろ？
それが、幼い頃から考え続け、導き出した答えだった。
死んだら何もない。
だからこそ、俺は死に対して強い恐怖を抱いている。
「それは確かに『ほとんど正解』」
ほとんど？
「うん。人はね……死んだら魂が世界から解放され、無に還る僅かな間だけ……自由になる」
それって……走馬灯？
首を横に振るサヤ。
「それは脳が起こす現象……私が言っているのは、無に還る僅かな間だけ、何でも出来るって事」
何でもって……
「現実で起こせる事全て、現実で起こせない事全て」
……それは凄いが……僅かな間しか続かないなら意味が無いだろ？　俺は刹那主義者じゃないし……それに、それだけ自由になるって事は、意識すら自由になるって事じゃないのか？　……そうなれば、いくら自由になるって言っても……縛られていない意識が、何かを持つなんて事はないよな？　結局意識は、何か、肉体や世界などに縛られ、抑え込まれているから生じるものだろうし……つまり、結局は何もできない。
「そうね……普通ならそう。それは霧散する過程の朧でしかない。自由があっても、自由を感じる自由が無く、自由にはなれない……でも……」
でも？
「今の夜衣斗には私がいる」
それは……つまり……
「……私なら自由になった魂を長時間維持出来るわ……」
……
「夜衣斗」

サヤが浮かべたその微笑みは、俺の人生の中でもっとも優しい微笑みだった。

「……一緒に死にましょ？」

プロローグ『選択の武霊使い』6

それは、ぞっとするほどの誘惑だった。
イマジネーションが自由であるのなら、魂だけの存在になり、物理の檻である世界から離れれば、無限の自由が得られる。
それは死を考えていた時に考えた一つの答え。
だが……魂が肉体により固着され、世界によって安定させられているのなら、魂だけの存在になった場合、魂は無に対して無防備になると言う事。
結局は個人と言うものがなくなり、無限の自由意味はあまりない。
……でも、もし仮に無防備になった魂を守る事が出来る技術があるなら……
そんな事も考えた事もあったが……どれも仮定の話であり……最終的には自分で自分を馬鹿にして考える事を止めたんだが……
思わず空を見上げるが……当然そこに何かがあるわけじゃない。
運命を変える選択。
……確かに……サヤが関われば死の運命は変わる。
死ぬ事を選べば、くだらなくてままならない世界から解放され……きっと、何にでもなれ、何でもできる様になるんだろう。
酷く魅力的な選択肢だが……
生きる事を選べば、オウキの姿になった武装守護霊が得られ……新たな死の運命を呼び込む。
酷く理不尽な選択肢だが……
どちらもサヤが一方的に言っている言葉に過ぎないが、現に武霊と言う非日常に触れ、それによって死にかけているのは……夢であるなら覚めて欲しいが……そうやって現実逃避出来るほど俺は器用じゃない。
……時間は、
「え？」

時間は後どれくらいあるんだ？

「夜衣斗が望むならいくらでも……」

そう言った後、力無く笑うサヤ。

「って言いたいけど……この状態はあまり長く維持出来ないわ」

……まあ、そりゃそうだろうな……今はまだ肉体を持っている身ならば、魂は肉体に準ずる……人が永遠と夢を見続けられない様に、いつかは目が覚めるのは当たり前だし……何より、今は起きている状態なわけだからな……どれだけの負担が肉体・精神に掛っているか……

溜め息一つ吐き、俺は空を見上げるのを止め、サヤを見た。

……サヤはどっちを選んで欲しんだ？

「私は……」

俺の、答えが分かり切った問いに口ごもるサヤ。

……まあ、一緒に死のうって言ったんだから……サヤの気持ちは明白だよな……

「もう」

じんわりと目じりに涙を浮かべるサヤ。

「もう夜衣斗には辛い思いをして欲しくないの……もう二度と夜衣斗に……あんな思いは……」

サヤはそう言って、涙を流し始める。

……ここが俺の心の中であるなら、いじめを受けていた時……死を望んだ時……ここにどんな変化があったんだろうか？　……いや、そうでなくても、ここで全てを見て、全てを感じていたみたいだし……

俺は何とも言えない感覚になった。

喜ぶべきか、恥ずかしがるべきか、怒るべきか、悲しむべきか……色んな感情がごちゃまぜになって自分を押し上げる。

……そんな……よく分からない自分の感情だけど……

ありがとう。

「え？」

俺の唐突な礼にキョトンとするサヤ。
……いや、そこまで俺の事を思ってくれる人？　は、サヤが初めてだからさ……
「……うふふ。何それ」
おかしそうに笑うサヤに、俺も釣られて笑みを浮かべる。
そんな俺に、サヤは再び優しい笑みを浮かべ、
「……ごめんね……夜衣斗を惑わす様な事を言って……
私は、夜衣斗が例えどっちを選んでも……夜衣斗の傍にいるからね。
夜衣斗と言う存在がこの世界から消えるその時まで」
……困るんだよな……そんな事を言われてしまうと……
死の自由の話と重なって……死に対する恐怖が薄まる……
……

生きていても喜びと呼べるもののほとんどがアニメや漫画・小説などの空想の産物でしかなく、現実は辛いことや煩わしい事ばかり。
それだけを考えれば、現実に何の価値も無い様に思える……いや、実際に価値はない。価値は個人個人が後天的に付ける物だから……今までの俺の人生の中で、現実に価値を付ける様な事柄を体験した事が無い。むしろ無価値・マイナス価値を付ける事が多かった。
両親の都合で幼い頃から引っ越しが多く、暗く引っ込み思案で恥ずかしがり屋な性格も災いして、引っ越す度に一人。
小学校に上がる前あたりで両親は一軒家に定住するが、仕事の都合でよく出張し、一人で過ごす事が年齢を重ねれば重ねるほど多くなり……別に両親が居ない事に寂しさはそれほど感じなかった。出張の度に母親から電話が掛って来ていたし……慣れていた……ただ、定住しても友達と呼べる者はなかなか出来ず、出来たとしても直前の引っ越し続きの生活と生来の性格が災いして、どう接すればいいか分からず、自然と自己中心的な行動ばかりしていたと思う。
そのせいか、小学校高学年になる頃には俺をからかいの対象にする事が増え……いじめとはいかないまでにも嫌な事ばかりされ、僅かに出来ていた友達はそれを遠目から見るだけだった。

そのくせ、それが終わると友達の様に接し……そんな行為が許せなかったが、それでも、その思いをぐっと堪えて、俺もそれを許容していた。

一人になる事が嫌だったんだと思う。

それは当時の俺には自覚の無い許容だったけど……今思えば、それは友達だったのか？　とも思う。友達の形は人それぞれだが、俺の思う友達像は……少なくとも、互いのどちらかが困っていれば困っていない方が助ける……そんな関係を望んでいた。つまり、親友が欲しかったんだと、今は理解できるが……結局は親友なんて出来た事はなかった。

きっと俺が友達の作り方・接し方が分からなかったせいで……中学に進学してからは、からかいから発展したいじめが自他共に関係をより隔絶させた。

いじめられ、誰にも助けられず、友達と思っていた連中も小学校の時と同様に助けてはくれず、いじめていた連中がいわゆる典型的な不良だった為、周囲は寄り付きもしなくなった。

追い詰められ、まともな精神状態を維持していたのか、今となっては疑問だが……結果、自殺を何度も試みてしまう。

最終的には、偶々遊びに来ていた……俺を兄と慕ってくれている両親の知り合いの娘さんが……いじめられている場面を目撃していたらしく、その子経由で大人にいじめが発覚し、大人達はいじめを何とかせざる得なくなり……いじめは終息した。

その後、いじめを受けていた時に一時的に不登校になっていた事が影響して、住んでいる場所から大分離れた県外の高校、しかも最低ランクの高校に進学せざる得なくなった。

最低ランクの高校なだけあって、大なり小なりほぼ不良か、いわゆる弱者しかおらず……また、いじめの影響で俺は他人に対して自然と距離を取る様になる。

薄く接し、関わってこなければこちらから関わらず……おかげで去年は何もない一年だったが……一切記憶に残らない、思い出して

も何をしていたか思い出せない一年になっていた。
……こうして改めて自分の人生を思い起こして見ても……やっぱり価値を見いだせず……死の自由が酷く魅力的に思えてしまう。
心の中で色々な思いがぐるぐると回る。
……だが、結局は昔と同じ、家族や親しい人の顔が浮かび……結局行き着いた思考は昔と変わらなかった。
俺の思考の、言葉にしていない部分も感じ取ったサヤは若干力無く微笑んだ。
「夜衣斗は……優しいね……」
俺が優しいね……
サヤの言葉に何とも言えない違和感を覚え、俺は苦笑した。
悪いなサヤ……こんなに心配してくれているのに、やっぱり俺にはどうしても死ぬ事は……もう二度と選べない。
そう心の中で決意を言葉にすると、
「うん……夜衣斗なら……きっとそう選ぶと思っていたわ」
悲しそうな笑顔を浮かべたサヤは、そう言ってミニチュアオウキを俺に差し出す。
「触って上げて」
サヤに促されて俺はオウキを……躊躇いがちに触った。
その次の瞬間、

小さな俺が誰かを見上げていた。
視界に入るその人の顔は、何故か霞みがかっていて顔が分からない。
憶えていないんじゃなくて、思い出していない。
何故かそう感じた。
「一度しか見せないから、よく憶えているのだよ」
その人はそう優しく俺に言って、数歩前に出た。
全体像と声からして、その人は男性。それもかなり高齢な人だと

分かるが……俺の知り合いに高齢男性がいた記憶がない。
その事実に戸惑いを感じていると、
「武装守護霊の基となったイメージを強く強くイメージして」
そう言った後、老人が呪文の様に言葉を紡ぎ出す。
「我が呼び声に応え、現れ、武装せよ　　。汝は
　　！武装守護霊　　！」
何故か所々が聞こえない。
これも憶えていないんじゃなくて、思い出していないと感じたが……
何故思い出せないのか、違和感を覚える忘却だが、どんなに思考を巡らせてもその部分は俺の中になかった。

不意に映像が途切れ、気が付くと、顔が見えない老人は同じ場所に立っていた。
何が変化していると言う訳ではないが……
「これが武装守護霊の正式な具現化の仕方・『具現化トリガー』だよ」
そう老人が言った事で、時間が飛んだのは分かったが……？　この記憶の不自然な欠如の仕方は……一体どう言う事なんだろうか？
疑問が疑問を呼ぶが、過去の記憶なので答えが返ってくるわけじゃなく、事は進行していく。
「これを君は、『君の言葉』で使いなさい」
俺の言葉で？

老人の言葉を思考するより早く、俺は記憶の世界から帰ってきた。
そして、気が付くと手に触れていたミニチュアオウキが無くなっていて、どこにやったのかサヤに聞こうとした時、ふと背後に気配を感じ、振り返る。

そこには実物大？　になったオウキは片膝を付き、まるで本物の騎士の様に頭を俺に対して垂れていた。
これが俺の武装守護霊……
片膝を付いているとは言え、俺より大きいオウキに俺は少し圧倒された。
「呼んであげて」
背後からサヤがそう促す。
呼ぶ？
「夜衣斗の言葉で」
……ああ……そうか……そうだったな……
さっき記憶の中で見た老人の言葉を思い出す。
所々欠けたその言葉が、何故か自分の中に、自分の言葉としてはっきりと在った。
その記憶の不自然さに強い違和感を覚えるが、
「大丈夫。それは夜衣斗が考えた自分の言葉だから」
そうサヤに言われると、自然と何故か納得出来た。
これが……俺の言葉……オウキの具現化トリガー……って、こんな長い言葉を言ってる暇ないぞ！？
「それも大丈夫。もう夜衣斗にはこの子の『守護』が付いているから」
その言葉と共に、

唐突に俺の意識は現実に戻された。
視界には、迫る無数の骨。
その光景に、俺は反射的に目を瞑ってしまい――

プロローグ『選択の武霊使い』7

「な！」

自警団員の人が驚きの声を上げた。

……痛くない……

恐る恐る目を開けると……同時に、地面に落ちる骸骨犬達の骨。

？

「ぼ、『防御具現』！？　ば、馬鹿な！　き、君！　さっき、この町に！」

ちょ！　何でそんな状態で驚愕しているんだこの人は！

「……初めてですけど……それがどうしたんですか？」

骸骨犬達の動きを警戒しながら、俺はとにかく自警団員の人を落ち着かせる為に、言葉を口にしたが、

「う、嘘だろ？」

？

「……そんな嘘を言う必要がどこにあるんです？」

骸骨犬達は、自分達の攻撃が防がれた事を警戒してか、慎重に発射した骨を引き戻し、周りをうろうろし始める。

「ば、馬鹿な……武霊は、通常、い、一ヵ月以上この町に、いないと、憑かない、はず」

一ヵ月以上町にいないと憑かない？　……なるほど、つまり、武霊は『星波町限定な存在』って事か？　……ん～もしそうなら、サヤが捕まえたって事か？　……何であれ、もし、本当に星波町限定なら、『何らかの理由』で『武霊に関する事が町の外に出ない』？

……じゃなきゃ、こんなのが出て来るのに、日本、いや、世界中が大騒ぎしないのはあまりにも不自然過ぎる……不自然過ぎるが……

今は情報が少な過ぎて、何の予想も出来ない『何らかの理由』に、俺は底知れぬ不安を感じた瞬間、自警団員の人がガクリと膝を付く。

同時に、何故か剛鬼丸の姿が霧散し、消え去ってしまった。

俺は慌てて自警団員の人を支えようとするが、自警団員の人は手でそれを制して、

「と、とにかく、い、今は、い、今の武霊を使って、逃げろ……で、出来るだけ、は、早く、と、遠くに」

そんな事を言いながら、ゆっくり地面に倒れた。

「うう！」

同時に、身体に突き刺さっていた骨が引き抜かれ、骸骨犬肋骨に戻ってしまう。

骨が引き抜かれた事により、大出血を想像したが……出血は一切なかった。

つまり、それだけ中が焼かれてしまったって事で……このままじゃまずい！　だ、だが、ど、どうすれば!?

目の前に迫る他人の死に、俺が動揺した瞬間、骸骨犬達が一斉に俺に向かって襲い掛かってくる!?

その瞬間、オウキの腕だけが具現化し、骸骨犬達を殴り飛ばして、霧散した剛鬼丸同様に霧散して消えた。

な!?　え!?

今起こった事と、どう見ても死に掛けている自警団の人にパニックになるが、

（夜衣斗、落ち着いて）

サヤ!?

（思い出して、オウキは何?）

オウキは?　……そうか！　オウキなら！

一瞬だけ具現化したオウキに吹き飛ばされた事により更に警戒した骸骨犬達は、一斉に遠吠えをし出す。

その意味を考えるより早く、俺は思い出した具現化トリガーを使う為、

（夜衣斗、強く、強くイメージしてあげて、オウキの姿を、機能を、その全てを!）

イメージするのは、白銀の鋭角的なフォルムの騎士甲冑！

人類を守護する為に造られた俺の物語『王継戦機』の主人公！
「我が呼び声に応え、現れ、武装せよ、今は名も無き守護霊！」
契約者の意志力をエネルギーやナノマシンに変える『ライオンハート機関』を持ち、そこから作られたナノマシンを血の様に体中に流し、機械でありながら生物の機能を持たせる『ナノマシンブラットシステム』で構築された躯体を駆り、
「汝は機械の王にして、全てを守る王の騎士！」
自身のナノマシンを消費して自身武器と従者を作り出す守護機騎シリーズのアーキタイプ！
「武装守護霊」
汎用防衛型守護機騎ナンバー０
「オウキぃいいぃい！」
その瞬間、俺の背後から飛び出し、俺を守る様に立つ巨人の背。
何度も、何度も思い浮かべ、想像してきた物語の主人公。
そして、何度も、何度も焦がれ、望み、心の支えにしてきた主人公。
度重なる引っ越しの時、両親の出張の時、いじめを受けて来た時、何も無くなった時、俺はオウキを主人公にした物語を考える事で何度も助けられた。
このオウキが、俺の思い描くオウキそのものではない事は……分かる。
別の何かが、オウキの姿になっているだけだと……だが、それでも……嬉しかった。
心の底から嬉しかった。
空想の存在が、現実に目の前にいる。
そっとその背中に手を置くと……当たり前だが、触れる事が出来た。
ひんやりとした金属の感覚ではなく、僅かな温かみを感じる優しい感覚。
オウキは設定上ナノマシンにより構成された金属細胞で出来てい

る。
だから、生きている反応がある程度あって……ここまで再現されている……何とも言えない感情が湧きだし、今、俺が置かれている立場を一瞬、忘れてしまった。
そんな俺の耳に、
「は、早くに、逃げろ……は、『はぐれ化』が、は、始まってしまう」
そううわごとの様に言う自警団員の人の声が入り、言葉の意味を理解しようとした瞬間、周囲に更に大量の骸骨犬達が降り立った。
っく！　こんなにいたんじゃ……
（夜衣斗！　まずはこいつらを何とかしましょう）
だが！
（大丈夫！　そう言う『設定』でしょ）
しかし！　……ああ！　もう！　ええい！　つまり、『そう言うのも完全に再現されている』んだよな！
（ええ、そうよ！）
なら！
「オウキ！　弾丸セレクト！　冷凍弾！　セレクト！　二丁拳銃！」
俺の命令に、両腕内側の装甲が開き、二丁拳銃がそこから飛び出し、オウキの両手に収まった。
オウキの両肩・両腰・両腕には『簡易格納庫』と名付けているものがあり、それを使う事でオウキは体内のナノマシンを新たな武器・兵器・兵装に構築して出す事が出来る。
そして、腕の簡易格納庫は主に武器・防具を出す場所で、今出したのはオウキ専用の拳銃。
更にマガジンの中には、
オウキが二丁拳銃を手に収めると同時に、連射!?
装填されていた冷凍弾が骸骨犬に当ると同時に、弾頭が弾け冷凍ガスが四散し、瞬く間に骸骨犬を吹き出している炎ごと凍らせる瞬

間を、俺自身の視界以外の視界で見た。
な！　なんだ今のビジョンは！？　ってか、俺、命令してないぞ！？　どう言う事だ！？
（夜衣斗。この子と夜衣斗はもう魂と魂が繋がっているの。だから、夜衣斗の思った事はこの子に伝わるし、逆にこの子が思っている事も夜衣斗に伝わるわ）
俺の疑問にサヤが答えてくれたが……なるほど、さっきの視点はオウキから送られてきたもので、俺が口にするより早く行動したのはそう言う理由か……便利だが……サヤ同様にプライバシーが全く無いな……
（うふふ。平気よ夜衣斗。夜衣斗がどんな趣味でも私達は受け入れているから）
……随分寛容的な事で……
一瞬、自分の趣味などを思い浮かべ引きつった笑みを浮かべてしまったが……今はそんな場合じゃないよな……その話は後で十分に話し合うぞサヤ。
（もう。気にしなくてもいいのに……）
俺が気にするんだ！　とにかく！
オウキが次々と骸骨犬を凍らせているのに、次々と新たな骸骨犬が現れて、オウキだけでは撃ち切れないと判断。
「セレクト！　ＰＳサーバント！」
俺の命令に、オウキの右肩装甲が開き、そこから小さな円盤が飛び出した。
両肩の簡易格納庫からは守護機騎シリーズ専用の半自立小型遠隔操作兵器『サーバント』を出す事が出来て、サーバントはその種類ごとに何らかの特化した機能・性能を持つ万能兵器。
そして、今出したＰＳサーバントは、『要人保護強化用サーバント』。
オウキから飛び出したＰＳサーバントは、そのまま俺の背中に移動し、くっ付いた。

くっ付くと同時に円盤の装甲が開き、そこから無痛針が付いたチューブが無数に現れ、俺の胸・首・手首・足首に刺さり、身体機能強化・機械同調用ナノマシンが注入される。チューブが出た場所とは違う場所から黒い液体の様なナノマシンが出て俺の身体を瞬時に覆い、着ている服を分解して、瞬く間に俺の格好を全てが黒いマントとタイツとスーツが一体になった様な姿に変化させた。

これは一種のパワードスーツ（パワードスーツ）で、ＰＳサーバントは内と外から装着者を強化し、オウキとオウキが出す機械と同調する事が出来る。

これを使って、俺はオウキと同調。

「ＰＳサーバント！　弾丸セレクト！　冷凍弾！　セレクト！　二丁拳銃！」

ＰＳサーバントの機能を使って、両腕のスーツの一部を変化させ、二丁拳銃にし、構え、思考制御で自動射撃モードを起動。

その瞬間、俺の視界にターゲットサイトが無数に現れ、オウキが狙ってない骸骨犬にロックオン。

同時に手足が勝手に動き、普段の自分では絶対に出来ない動きでオウキと背中合わせに、回転し、共に連射。

互いの位置が入れ替わると同時に、オウキの弾丸が切れる。

オウキは素早く弾倉を地面に落とし、腕の簡易格納庫から新たな弾倉を出し、両腕内側を合わせる様に平行移動させ、弾倉を交換。

再びオウキが射撃に加わると同時に、俺の方の弾丸が切れる。

俺の方は腰の部分のスーツを弾倉に変化させ、素早く交換。

……普段の俺ではまずありえないなめらかで素早い動きに、自分の身体なのに、自分の身体じゃない妙な感じになり、眉を顰める。

これだけ動いているのに、息一つ切れていないのにも、激しく違和感を覚えつつ……さっきまでは、ちょっと全速力で走っただけで息が上がってたのにな……

そんな事を思いながら、ＰＳサーバントとオウキの全身至る所に付いた極小カメラである『副眼カメラ』を思考制御で起動し、周囲を確認。

いきなり複数の視界が出来た事に、一瞬面食らうが、ＰＳサーバントを着ている影響か、特に違和感なく周囲を見れた。
ゴロゴロと転がる凍った骸骨犬達の上に、まだまだ途切れることなく骸骨犬達が降ってくるが、凍った骸骨犬達が邪魔で、新たに現れる骸骨犬達の動きが鈍くなっていた。
今がチャンス！
そう思った俺は急いで自警団員の人を確認。
弱弱しく息を吐いてはいるが、完全に意識を失っている様だった。
本当に大丈夫なんだろうか？
そんな不安を感じながら、俺はオウキに『自警団の人を助ける為の命令』を出そうとした。
だが、その時、不意にぞくっとした気配を感じ、その気配のした方向に反射的に顔を向けると……直前まで副眼カメラで確認していた自警団の人が倒れている場所だった。
そこでは、倒れている自警団の人の背中から半透明の剛鬼丸がゆっくり姿を現していて……
唐突にオウキが拳銃を勝手に収納し、素早く振り返り、俺を抱き抱えた！？
あまりの唐突振りに唖然としていると、オウキが膝を曲げ、ジャンプした。
しかも、家の屋根をあっさり越え、何倍以上の高さまで一気に上がる。
急激な上昇による強烈なＧで一瞬くらっとしたが……続け様にオウキが俺にある装備のイメージを送って来た。
意味が分からないが、流石にこのまま落ちるのは嫌だったので、
「セレクト！　ウィングブースター」
ウィングブースターは、オウキの背中に簡易格納庫と同じ仕組みで収納されている飛行兼潜航用ブースターで、羽毛の様に細かく細いブースターが本当の翼の様に付いているので、傍から見れば本当の翼がオウキから生えた様に見える。

ウィングブースターを展開したオウキは、上空に留まると同時に、足下で強烈な閃光が生じ、遅れて凄まじい爆発音と衝撃が生じた。
激しい衝撃と爆風をオウキが上手くいなし、爆風がある程度収まるのを見計らって足下を確認すると……え？
足下に見えた光景に俺は絶句した。

プロローグ『選択の武霊使い』8

先程まで民家が立ち並んでいたはずの場所に、巨大なクレーターが出来ていた。

……その中心に主人を踏み付けている剛鬼丸がいて……どうなってるんだ!?　剛鬼丸は自警団の人の武霊じゃないのか？

素直に自警団の人の命令に従っていた剛鬼丸と、今の自警団の人を踏み付けている剛鬼丸の、あまりにも差があり過ぎる光景に俺が激しく動揺したが――

ふと自警団員の人が倒れる前にうわごとの様に言った『はぐれ化』と言う言葉を思い出した。

もし、仮に、はぐれと呼ばれているあの骸骨犬が、オウキと同様に武装守護霊だったとするなら、その違いは、『人に憑いていない』事。

人に憑いていないから、人に憑く事が出来なかったから、人にはぐれてしまったから……はぐれ？

そう考えると、目の前で起こった剛鬼丸の姿と対応がしっくりくる。それに……

サヤ。

（何？）

武霊は何を糧に存在しているんだ？

（意志力じゃない？）

……意志力ね……要するに、人が何かを成そう・しようとする思いか？

（うん。多分、そんな感じ）

……何だか随分曖昧な感じだな……

（私は夜衣斗の運命を変える選択だけど、全部が全部知ってるわけじゃないし、言えない事もあるのよ？）

言えない事？

（言ったでしょ？　私は運命を変える選択だから）
サヤの行動一つ一つが新たな運命を呼びかねない？
（そう言う事。理解した？　納得した？）
まあな……ん～だとすると、人から武霊が離れれば、あるいは人に憑いていなければ……当然、お腹減るよな？
（ええ、そうね）
じゃあ、骸骨犬達が襲い掛かってきたのは、俺を喰らって意志力を得る為？
（そうじゃない？）
……だよな……
サヤと心の中で会話中も、剛鬼丸はずっと主人である自警団の人を踏み付け……ゆっくり周りを見回していた。
じゃあ……
不意に、剛鬼丸がこっちを見上げた。
はぐれになったばかりの武霊は……
何だか剛鬼丸と目が合った気がした。
お腹が減ってるのか？
そう思うと同時に、盛大な嫌な予感に襲われた。
その瞬間、いきなりオウキが俺を空中に放り投げ、勝手に両腕の簡易格納庫から大きなレンズが付いた金属のリングを出し、リングは腕を回る様に出てきた腕の手首に装着。
装着と同時に、手首周辺に円形の僅かな空間の歪曲が発生し、両手首を自分の手前に合わせた。
その瞬間、空間の湾曲が一気にオウキを覆うほど広がり、瞬間、俺の視界からオウキが……へ？　……いなくなった!?
慌てて副眼カメラを起動させ、全方位を見ると、クレーターの中央には自警団員の人しかいなくなっており、剛鬼丸はいつの間にか俺より上空にいて、自然落下していた。
そして、オウキは俺から大分離れた場所で飛んでいたが……アームシールドが壊れてる!?

オウキの両腕に装着されたリングは、『アームシールド』と名付けられたリングに付いたレンズから不可視の力場を発生させる事が出来る防具で、二つを合わせる事でより強力なシールドを張る事が出来るはずだったんだが……両方のアームシールドのレンズが粉々に砕け、空間の湾曲が無くなっていた。

な、何をされたんだ!?

あまりにも一瞬な事に、俺が驚愕していると、オウキの視点から見た剛鬼丸の行動が送られてきた。

魂？　経由ではなく、ＰＳサーバント経由での映像だったので、俺は咄嗟にＰＳサーバントのクイックアップ機能を起動。

これにより、脳内に入ったナノマシンが一定時間思考速度を上げ、周囲の光景がスローモーションになった。

よし、この機能もちゃんと再現されてる……これで余裕を持って何が起きたか見る事が出来るが……

送られてきた映像を、副眼カメラとは違うＰＳサーバントの電脳空間を見せる『脳内ディスプレイ』で再生しようとしたが、何故か脳内ディスプレイの中が文字化けで一杯になっていた。

これでは脳内ディスプレイでＰＳサーバントの機能を細かく操作する為のアバターを、どこに動かせばいいかさっぱり分からない。

音声操作で操作し様にも、あくまで思考速度を上げているだけなので、喋る事が出来るわけなく……ど、どうしよう……と言うか、俺、こんな風に脳内ディスプレイが成っているなんて想像してないぞ？　どう言う事だ？

（多分だけど）

うわ！　何で思考加速している状態で話し掛けられる!?

（何でって……私は夜衣斗の中にいるのよ？　夜衣斗の思考が加速すれば、私だって一緒に加速するのは当たり前じゃない）

……そういうものか？

（そういうものよ。理解した？　納得した？）

まあ……多分……っで？　何が多分なんだ？

（うん。多分だけど……『あの子』、コミュニケーション能力に『制限』が掛けられているんじゃあない？）

制限!?　何で？　誰に!?

（さあ？）

さあ？　って……

（言ったでしょ？　全部が全部知ってるわけじゃないって……でも、少なくとも『この町では』武霊はコミュニケーション能力に制限を掛けられてしまっているのは間違いないんじゃない？　『あの子』、さっきから一言も喋ってないでしょ？）

そう言われてみれば……俺の作った物語の中ではオウキはちゃんと喋っているはずだしな……剛鬼丸だって喋れそうな人形なのに、自警団員の人の呼び掛けを動作で応えていたな……って、そんな事を冷静に分析している場合じゃない！　どうするんだ!?　何されたか分からなくっちゃ、いや、それ以上に、『脳内ディスプレイがまともに使えないとなると、オウキの機能をフルに使えない』！

（うん。それだったら大丈夫）

は？

不意に、脳内ディスプレイ内にサヤが現れ、何が書かれているか分からないボードを指差す。

（これが映像再生のボタンよ）

……本当に？

（私が夜衣斗に嘘を言ってどうするのよ？）

……まあ……確かに……

俺が分からないのに、サヤが何で分かるのか疑問に思いながら、思考制御で脳内ディスプレイ内のアバターを動かし、サヤが指し示すボードを押す。

すると、正しく映像再生ボタンだったのか、オウキから送られた映像が脳内ディスプレイ内に流れ出す。

（ほらね）

んー……何やら納得いかないものが多々あるが……とにかく、あ

りがとうサヤ。
（どういたしまして）
思考が加速している影響か、それともオウキが気を利かせたのか、オウキから送られてきた映像はスローモーション映像で……うわ…マジかよ……

プロローグ『選択の武霊使い』9

俺をオウキが投げられた瞬間、剛鬼丸の背中の鎧が唐突に開き、ゆっくりと後ろに倒れる。

剛鬼丸の角度が丁度オウキを正面に捉えた瞬間、閃光が生じた。

そして、とてつもない速さで剛鬼丸がオウキへと突撃。

ギリギリ展開し終えていたアームシールドと衝突。

ウィングブースターの出力を一瞬の内に越え、弾き飛ばされるオウキ。

何とか体勢を立て直せたが、超高速での突撃はあっさりアームシールドの防御力を越えたのか、直後にシールド発生装置であるレンズが両腕とも壊れた。

俺は思わず眉を顰めようとして、中々動かせない事に気付き、止め、思考の中で深いため息を吐いた。

何かの本で、宇宙船の推進力として光を使おうとしている研究がされているって読んだ事がある。

つまり、剛鬼丸の超高速突撃をする前に起きた閃光や、大きなクレーターを作った強烈な閃光は、剛鬼丸が鎧の下から発した『レーザー光線に近い光』って事なんだろう。

俺は副眼カメラをもう一度使って、自然落下中の剛鬼丸を見る。

丁度こっちに背を向けている体勢だったので、容易に開いた鎧の下を見る事が出来た。

鎧の下を確認して、俺はまた顰められない眉を顰めようとして、代わりに再び思考でため息。

剛鬼丸の背には、ちょっとグロテスクな目が在ったからだ。

それだけ見ると、軽いホラーだが……その目から閃光が発せられるのだろう。

そして、直ぐに再生する鎧は、その目の瞼の役割をしているって事か……何だか、目からビームを出すアメリカンヒーローを思い出

すな……って！　そんな悠長な事を考えている場合じゃないだろう！　相手が高速、いや、光速の速度で突撃してくる上に、オウキのシールドをあっさり破られるなんて――

（あ！　その事なんだけど）

……今度はなんだ？

（あの子が出したアームシールドって、あの子が勝手に出したじゃない？）

は？　……まあ、確かにそうだったが……

（だから、具現化率が低かったんじゃないかな？）

具現化率？　……つまり、俺がイメージしないでオウキ自身が具現化させたから、意志力が足りなくて完全に『俺のイメージ通りに具現化出来なかった』って事か？

（うん。その通り。どう？　理解した？　納得した？）

つまり……だ。

不意にクイックアップ機能が停止し、周囲の光景が元の速度で動き出す。

クイックアップ機能は使用者の脳に大きな負担を掛ける為、一定時間が過ぎると勝手に止まる様になるって設定だったが……まだ思考がまとまってない！

反射的に剛鬼丸の方を見ると、背中の鎧を閉じ。落下中でありながら器用に体勢をこっちの方に変え様としていた。

っげ！　今度の狙いは俺！？　っく……させるかって！

「セレクト！　シールドサーバント八機！」

落下しながら出した俺の命令に、俺の下へ駆け付けようとしていたオウキの両肩が開き、そこからシンプルな円盤の形をした防御型サーバント『シールドサーバント』が八機飛び出し、剛鬼丸を囲む。

「キューブゲージ！」

俺の命令により、剛鬼丸を取り囲んだシールドサーバントの装甲が開き、そこから巨大なレンズが露わになり、オウキ専用シールドと同じ性質だが遥に威力が高く、範囲が広い力場のシールドが展開

される。
そして、シールドとシールドが重なり合い、剛鬼丸を中心にした力場の檻が完成した。
瞬間、剛鬼丸から閃光が生じ、こちら側のシールドにひびの様な物が入り、中で反射しているのか、次々と別々の方向にひびが入る。
って！　サヤの言う様に大丈夫だったけど、それでも駄目じゃん！
（なら夜衣斗！）
分かってる！
「シールドモード変更！　固体から気体に」
シールドの力場には三つのモードを設定していて、それぞれに液体・固体・気体とその特性を象徴した名前を付けている。
液体が、流動的に力場が展開されていて、力場が常に流れている。その為、柔軟性があっても脆い。だが、直に修復出来る特性があるので人を受け止めたり、柔らかい・脆い物を受け止めるのに適している。
固体が、展開されている力場が固定されていて、柔軟性は全くない。が、その分液体より硬く、対象を拘束するのに向いている特性がある。力場が固定されているので、破壊されるとガラスが砕けた様にひびが入ったりする。つまり、今使っている相手を取り囲むフォーメーション・キューブゲージで使われるのはこれ。
気体は、力場が常に放出され続けていて、最も強固な上に、攻撃されて力場が相殺されても、次々と新たな力場が展開されるので、よほど強力な攻撃でない限り、消える事はない特性を持っている。ただし、常に放出されている為、力場に触れると弾かれ、破壊されるので守る事にはあまり向いていない。
まあ、何と言うか……これを考えたのが、幼い頃だったので……色々と足りない・デタラメな部分がある様な気がするが……それすら具現化してるんだよな……凄いと言うか、でたらめと言うか……
キューブゲージのひびが一気に消え、弾かれるスピードが落ち、剛鬼丸の姿が視認出来る様になると……剛鬼丸はシールドに弾かれ

る度に鎧にひびが入り、砕け、その下の目が無数に生えている肉体が露わになり始めていた。
よし、これで少しは時間を稼げるはず……
「ＰＳサーバント！　セレクト！　ウィングブースター！」
俺の命令に、ＰＳサーバントのマントがオウキと同じ、ただしこっちは黒色のウィングブースターになり、俺の自然落下を止め、自分の目で自警団員の人の姿を探し、剛鬼丸が突撃した時の閃光で元いた場所からクレーターに落ちていた姿にぞっとした。
（夜衣斗！　早く！）
分かってる！　頼む！　間に合ってくれよ！
「オウキ！　セレクト！　ヒーラーサーバント！」

プロローグ『選択の武霊使い』１０

俺の命令に、オウキの両肩からシールドサーバントより少しごてごてした感じの円盤・治療用サーバント『ヒーラーサーバント』が一対現れる。

治療用の名の通り、怪我人だけでなく、脳が壊れていない限り『死んだ直後の死人』も蘇らせる事が出来るんだが……

本当に治す事が出来るのか不安に思いながら、ヒーラーサーバントの動きを見守る。

自警団員の人の上に移動したヒーラーサーバントの片割れの装甲が開き、そこからシールドサーバントより小さなシールド発生装置であるレンズが現れると、自警団員の人の身体が浮き上がる。

浮き上がった事により開いた下に残った片割れが入ると、機体の各所から針が付いた細い管を大量に出し、自警団員の人の身体の各所に刺すと……頼む……あ！　……お！？

俺の見ている前で、自警団員の人の腹に開いた穴がどんどん塞がって行く。

更に止まっていた胸の上下もちゃんと動き出し……ほっとした。今までの人生で経験したことが無いほど、これでもかって感じでほっとした……これなら自警団員の人はた――

助かる。

そう思おうとした瞬間、強烈な閃光が上空で発生した。

っく！　最初に見せたクレーターを作った閃光！？

閃光が収まると同時に上空を見ると、全身の鎧を開いた剛鬼丸がこっちを見ていた。

その瞬間、ぞくっと、背筋が寒くなる。

「オ、オウキ！　セレクト！　ダブルアームシールド！」

俺の命令にオウキは壊れたアームシールドを投げ捨て、新たなアームシールドを両手に嵌め、俺と剛鬼丸の間に入った。

ほぼ同時に、剛鬼丸の鎧が閉じ、閃光!?
今度もオウキの姿が掻き消えるが、今回のアームシールドはサヤの言う様に壊れてはいなかった。
だが……
チラッと治療中の自警団員の人を見る。
腹に開いた穴はかなり塞がっていたが、まだまだ完治までには時間が掛かる様に見えた。
ここじゃまずい……いつ、剛鬼丸のターゲットが自警団員の人に向かうか分からない……いや、それ以上に、あの全方位閃光に巻き込まれる可能性だってある。
副眼カメラには、周囲の町並みが映し出されており……さっきの家は留守だったみたいだから被害者は出てないだろうが……
心臓の鼓動が不意に早くなる。
さっきまではオウキが現実に具現化した興奮と、剛鬼丸が襲い掛かってくる状況によって恐怖心を感じる暇はなかったが……これからの自分の行動に他人の命が関わってくる事に、それまで感じた事がない恐怖に近い感情が生じ……現実逃避したい。
(夜衣斗! しっかりして!)
分かってる! そんな事しない! ……ええい、これが俺に降り掛かる最初の死の運命なら!
思考制御でウィングブースターを操作し、フルパワー飛ばせる。
誰もいない海上へ!
自然落下中だった剛鬼丸は、その俺の行動に誘われ、慌てて閃光。
方向がこっちに向き切っていなかった為、方向は合っているが、大分離れた方へ閃光が走り、それがジグザクになって段々こっちに近付いてくる。
どうやら後ろの閃光で前に進み、前の閃光で急ブレーキを掛ける、を繰り返して空を飛んでいる様だった。
オウキへの突撃と言い……こんなでたらめな空の飛び方といい……とんでもない丈夫さだな……普通、あんな速度で動けば、五体が

バラバラにならないか？　……まあ、何であれ……このまま追って来い！

「オウキ！　セレクト！　シールドサーバントご！？」

剛鬼丸の誘導と邪魔の為にシールドサーバントを五十機出させようとした時、不意に意識の薄れを感じた。

原因が分からず一瞬困惑したが、

「五十機！」

強引に命令を口にし、五十機のシールドサーバントを、俺を守る様に追って来てくれているオウキから出させた。

シールドサーバント達が俺と剛鬼丸との間を邪魔する様に飛ぶ中、俺は必死に失いそうになる意識の薄れと闘い……何とか意識を正常に戻した。

……つまり、何かを具現化する度に意志力が消費されるわけか……それが例え、設定上備わっている装備とかでも……これは……かなりまずいな……だが、そうなると、逆に光明が見えたな……剛鬼丸がオウキと同じ武装守護霊なら、あの閃光もかなりの意志力を消費するはず……そうであるのなら、こっちが意志力を節約して逃げ切れば――

（ん～それは多分、無理）

サヤの否定の言葉に、俺は眉を顰める。

（あの剛鬼丸は、この子と『具現化の仕方が違う』もの）

……どう意味だ？

（あのね。『この子』の『本体』は、今、『夜衣斗の中にある』の）

はぁ？　何言ってんだ！　現にオウキは俺の後ろに……

副眼カメラで後ろを見ると、確かにオウキはそこに飛んでいる。

（うん。でも、そこにいる『その子』は、映写機によって映し出される映像みたいなものなの）

映写機によって映し出される映像？　……つまり、映写機がオウキの本体で、フィルムが俺で、スクリーンが現実で、映像が具

現化したオウキ？
（そうよ。理解した？　納得した？）
理解はしたが……直ぐに納得は難しそうな話だな……それで？
剛鬼丸の場合はどう違うんだ？
（剛鬼丸の場合は、もう完全に本体が外に、あの剛鬼丸の中にあるみたいね）
本体が？
（うん。だから、『この子』と違って、具現化率百パーセントな上に、意志力消費も『今のこの子』より圧倒的に良いと思うわ……まあ、そうは言っても、意志力の供給源である武霊使いから完全に離れちゃってるから、その内霧散しちゃうのは間違ってないけどね）
それでもこっちの意志力が尽きる方が早い可能性が高いわけか……間接と直接の違いによって生じる差か？　……謎過ぎるな……って言うか、何でさっきからサヤはオウキの事をあの子だのその子だのこの子だの言ってるんだ？
（え？　だってそれは――）
サヤが何かを言おうとした時、丁度砂浜が見える場所に来た。
そして、視界に入った光景に、俺は思わず絶句してしまった。

プロローグ『選択の武霊使い』１１

眼下に見える砂浜には『現実では絶対に存在していないもの達』が激しい戦闘を繰り広げていた。

戦っている一方は、はぐれと呼ばれているであろう骸骨犬達だったが、もう一方の方が……もう、訳が分からないぐらいぐっちゃぐっちゃ。

別に容姿の事を言っている訳ではなく、まるで統一性がないそれぞれがそれぞれ違った個体だったから思わずそう思ってしまったが……

様々な二次元作品に登場するキャラクターだったり、伝説とされる生物だったり、人より大きい動物だったり、何だか分からないものだったり……それらに命令しているぽい人達が浜辺の近くの道路にわんさかいるし……なんじゃこりゃ!?

（武霊と武霊使いでしょね……）

それは分かるが……多くね!?　百は軽く超えてるぞ!?

（自警団が結成されてるぐらいだから、町の規模から考えたらこれでも少ない方なんじゃない？）

そうか！　自警団の人が町に一か月以上とか言ってたもんな……って事は、学園の方もか!?

（そう考えるのが自然よね）

……つまり、ゴールデンウィークが明ければこれ以上いる可能性が高いわけか……

とんでもない現実と可能性に呆然としながら、

……にしても何だか全員妙に疲れている様に見えないか？

（さっきの放送で昨日発生したって言ってたよね？）

ああ、なるほど、つまり昨日も似た様な事が起きていて疲れている訳か……そんなんで大丈夫なのか？

（人の心配をしている場合じゃないと思うけど？）

まあ、そりゃそうだが……

そんな会話を心の中でしながら浜辺上空を通り過ぎると、もっとも近くを飛んでいた『赤いドラゴン』に乗っている俺と同年代ぐらいのショートカットの少女がこっちに気付いた。

ＰＳサーバントの視力調整機能を使っていなかったから顔は分からなかったが、どうやら驚いている様だった。

……そう言えば、自警団員の人も驚いていたな……

チラッと通り過ぎた浜辺の方を見ると、骸骨犬達が水蒸気を上げながら浜辺に上がる姿が見えた。

ここで戦っている人達は、海から来る骸骨犬達を迎え撃ってるのか……だとすると全員、自警団の人なのか？　……自警団って名乗るぐらいだから、町の武霊とその武霊使いを覚えているって事か？

（そうかもね……この子の『武装』は、とても目立つもの。知らなければ、当然気付くでしょね）

ん～……まあ、今はそんな事を気にしている場合じゃないよな……

浜辺と人工島の上にある学園から十分離れた場所まで来た俺は、その場に急停止し、反転。

俺の視界に、シールドサーバント達に翻弄されながらこっちに近付いてくる閃光が入った。

……どうやらちゃんと追ってきているみたいだな……浜辺の武霊使いの人達に反応したらどうしようかと思ってたが……杞憂だったか？

（そうかもしれないけど……夜衣斗、本番はこっからよ？　一体どうするつもり？）

どうするもこうするも……光の速度……まあ、実際にそこまで出ているかは疑問だが、少なくとも音速以上だよな……ふと思ったが、あの突撃、突風とか起こらないよな？

（何らかの力でキャンセルしてるんじゃない？）

だよな……じゃないと空気摩擦でとんでもない事になるだろうし

……って事は、近くを通り過ぎても何ともない訳か……突撃を直接喰らわない限り……なるほど……

俺は、空中に留まりながら、腕を組み、片手で口を覆い、鼻だけでゆっくり深呼吸すると同時に、再びクイックアップ機能を使用。

周囲がスローモーションになる中、剛鬼丸を倒す方法を考える。

オウキのシールドにぶつかっても、周りの鎧は壊れても、その下の肉体は傷付いている様子はなかった。

それはつまり、鎧の下の肉体はとんでもない硬さを持っているって事だ。

そんな硬い肉体を通す事が出来るオウキの武装なんてあったか？

……いくつか思い付くが、どれも動作が重い……あんなスピードで突撃してくる相手にどうやってそれを使う？　それに、さっき意志力切れ？　を起こしそうになった事を考えると、そうポンポン武装を出せる訳じゃない……だとすると、最小限の具現化で奴を倒さなくちゃいけない……考えろ、考えろ俺！　こういう非日常の出来事を空想であろうと幾度となく考え、答えを作り出してきただろう？　……俺なら、いや、オウキなら、きっと――

クイックアップ機能をフルに使い、俺は一気に剛鬼丸を倒す方法を考え付いた。

周囲の光景が元の速さに戻ると、

（夜衣斗……本気でそれをやる気？）

俺の思い付いた方法に、サヤは心配そうな声を上げるが……自分の身体が自然に震える事に、俺は苦笑し、

やりたかないが、今の俺にはこんな方法しか思い付かないんでな……

（夜衣斗……まだ、選択の途中だわ……だから……）

躊躇うサヤが何を言わんとしようとしているか分かった俺は、

サヤ、悪いが、それはない。

（夜衣斗……）

生きられる可能性があるのなら、俺はそれに縋り付きたい。

こんな訳の分からない理不尽な非日常に襲われて、いきなり死ぬなんて冗談じゃない！

俺は、俺として、日常の中で、寿命を全うするって決めたんだ。

まあ、そう決めた時は、色々な事への反発心とか、明確な理由はなかったが……いや、今も無いか……だが、それでも……

「生きたい！」

心の底から湧き上がる言葉を、中々震えが収まらない自分を奮い立たせる為に叫ぶ。

「ゴールデンウィーク明けに発売される雑誌を読みたい！」

「撮り溜めているアニメを見たい！」

「積まれているライトノベルを読みたい！」

「この間買った新作ゲームの続きをしたい！」

（夜衣斗？）

自分の中にある我欲を思い付く限り叫び、自分の気持ちを無理矢理上げる。

「なにより！　こうして目の前で現実として具現化した……俺のオウキの活躍を！」

小さく息を吸い、

「見たいんだぁあああああああ！」

私欲我欲、見っともないっちゃありゃしないが、今、俺に降り掛かっている死の運命は、俺だけに向けられたもの。

自分を奮い立たせる理由に、自分以外を使うには向かないと思ったんだが……そんな叫びを口にしながら、本当に心に浮かぶのは、家族や親しい人々。

死ぬわけにはいかない！

死んでしまいたいなんて思えない！

怖くても！

辛くても！

逃げ出したくても！

それでも！

戦え！
生きる事を！
『選択』しろ！
黒樹夜衣斗！
自分の心の中で自分の名前を叫んだ瞬間、ようやく覚悟が決まったのか、身体の震えが止まった。
（ごめんなさい夜衣斗。こんな時に惑わすような事を言ってしまって）
いいさ、結果、ようやく覚悟が決まった。
そう思いながら、唐突に自分の視界に目を隠している前髪が入る事にイラッと来た。
俺は思わず前髪を掻き上げ、ＰＳサーバントの頭部を守っているナノマシンで固定する様に思考制御。
クリアになった視界に、剛鬼丸が終に展開していたシールドサーバント達を抜けた瞬間が入り、
（もう私は何も言わない。ただ、これだけは言わせて……頑張って夜衣斗！）
「ああ！　頑張る！」
自然落下しながら剛鬼丸がこっちに身体を向けた。

プロローグ『選択の武霊使い』１２

剛鬼丸は飢えていた。

宿っていた主が死を迎えようとした為、糧となる意志力が途切れてしまった事により、恐慌状態になった剛鬼丸は、主の中から出てしまい……そして、主の死の原因となったはぐれ達が周囲に沢山いる事に気付いた。

自分の主を死へと追い込んだはぐれ達を見た剛鬼丸は、武霊が武霊として持っていた本能が間違った形で爆発し、意志力を多大に消費する必殺の全方位閃光を使ってしまった。

その瞬間、消費された意志力は一気に剛鬼丸の存在を維持する事が困難になるほど消費される。

これによって、剛鬼丸の武霊としてのまともな思考は壊れ、ただただ自らの存在を維持しようとする壊れた本能に支配され……剛鬼丸は『はぐれてしまった』。

不幸なのか幸運なのか、剛鬼丸は自身が霧散する前に、全方位閃光で倒した大量のはぐれ達の意志力を喰らう事が出来た。

それによって存在が安定したが、壊れた思考は、壊れた本能からもたらされる『飢え』を満たそうと剛鬼丸を突き動かす。

意志力を多く喰らおうと、周囲を見回し……気付いた。

とてつもなく強大な、『意志力とは異質だが近い何か』を。

その『何かの気配』を感じるのは、空に二つ。

間を置かず片方に向かって本能的に突撃するが、防がれる。

閉じ込められ、防がれ、逃げられ、邪魔され、邪魔され、邪魔され――

もはや剛鬼丸の意識は、異質な何かの二つの気配しか追っておらず、そして、それは『他のはぐれ』も同様だった。

剛鬼丸が突撃するより早くに、唐突に下の方から爆発音が聞こえた。

それも複数!?　しかも、途切れる事なく連続に!?

条件反射的に下を見ると、目の前に大きなあぎとを開けた骸骨犬が!?

だあぁあああ!?

咄嗟にウィングブースターの出力方向を変え、横に吹き飛ぶ様に飛び、回避。

だが、下から更に別の骸骨犬が迫っている事をオウキから送られてきたイメージで確認し、副眼カメラを使用し、思考制御でＰＳサーバントの自動回避モードを起動。

副眼カメラに映る下の光景に、海が殆ど見えないほど飛んでくる骸骨犬達!?

ほとんどウィングブースターに振り回される様に避け続けるが、あまりの数に、自動回避モードにより回避し切れない骸骨犬が出てきて……その個体に警報のマーカーが付く。

俺は更に両手にずっと持っていた二丁拳銃を構え、自動射撃モードを起動させ、マーカーをターゲットサイトに変えてロックオン。

連射して、冷凍弾で撃ち落とすが、副眼カメラで避けた骸骨犬達がこっちに向かって落ちて……じゃない!?　全身から吹き出す炎でこっちに向かって飛んできている!?

気が付くと、下の海から次々と爆発する様に飛び出してくる骸骨犬と、上の空から炎で飛んでくる骸骨犬達に周囲を埋め尽くされていた。

そうなるともはや自動回避モードでもほとんど回避出来ない個体ばかりが出てきて、俺の腕がとんでもない速度で射撃・弾倉の入れ替えをし始める。

あまりの動きに、両腕に痛みを感じ始めた瞬間、閃光が走った。

同時にオウキが剛鬼丸の光速突撃を防いだ事をイメージで教えてくれたが……しゃべれぇえええ!　いや!　無理なのは分かって

るけど！　とにかく！　骸骨犬達はとんでもなく予定外だけど！
作戦通りに！
「セレクト！　ジャミングスモーク！」
俺の命令に、剛鬼丸の閃光突撃で錐もみ状態で吹き飛ばされていたオウキの肩・腰・腕の全ての簡易格納庫が開き、白い煙が吹き出し、一気に周囲を白一色の世界にした。
ジャミングスモークは、攪乱や妨害の為に使用するそれ専用のナノマシンが含んだ煙で、この煙の中ではオウキに敵対している対象はあらゆる感覚・機能を阻害され、守護機騎やその守護機騎が守る対象の位置が分からなくなる。
そう言う設定だから……頼むから効いていてくれよ……
そう祈る様に思いつつ、俺は次の行動に移った。

再びオウキにより突撃が防がれた事により、剛鬼丸は夜衣斗達から少し離れた上空で止まる事になった。
その為、オウキのジャミングスモークに巻き込まれる事はなかったが、それによって夜衣斗とオウキの位置を見失ってしまう。
一人と一体から発せられた『何か』の気配すら消えた。
それに一瞬動きを止めた剛鬼丸だが、すぐさまジャミングスモークの中に突撃。
全ての感覚が狂う事を感じながら、剛鬼丸はそれを特に気にせず、全方位閃光を放った。
強烈な閃光により、ジャミングスモークごと中にいた骸骨犬達も消滅。
ジャミングスモークが無くなった事により、感覚が正常に戻ると共に、前と後に『何か』の気配。
これによりどっちを狙うべきか一瞬の迷いで、動きを止めた剛鬼丸。
その隙を突いた前の夜衣斗と後のオウキが、一斉に二丁拳銃を撃

つ。
　撃ち込まれた弾丸は、狙い違わず閉まろうとしていた鎧の隙間を抜け、剛鬼丸の肉体に着弾。
　だが、着弾した弾丸は、剛鬼丸の強靭な肉体に一切傷を付けず、ただ砕け、弾頭の『中身』を四散させるだけだった。
　剛鬼丸は特にその事を気にせず、鎧を完全に閉め、狙いを前に居る夜衣斗に定め、突撃しようとした。
　その瞬間、剛鬼丸は自身の鎧が開かない事に気付く。
　剛鬼丸に打ち込まれた弾丸は、弾頭に強力な粘着性を出す液体が入っている『粘着弾』。
　これが剛鬼丸の肉体と鎧の間に入り、ピッタリと動けなくさせていた。

　鎧が開けなくなった剛鬼丸はもはや自然落下するしかなく、真っ逆様に落ちる。
　骸骨犬と言うイレギュラーがあったが、結果は作戦通り上手く行った。
　剛鬼丸の光速突撃をオウキが防ぎ、ジャミングスモークで位置を分からなくさせれば、きっとジャミングスモークごと全方位閃光を放つ。そして、それによって開いた穴に粘着弾を打ち込めば、閃光を防ぐ事が出来、それによって『あの強固な肉体を通る攻撃』を使う事が出来た。
　ちょっと上手く行き過ぎな感じがしなくもないが、これで！
　俺が次の攻撃の為に行動に移ろうとした次の瞬間、
　剛鬼丸が開かなくなった両腕の鎧を両手で握り砕き、掻き毟り、無数の目が付いた肉体を露わにさせた。
　そして、両腕を広げ、閃光！？
　瞬時に光の駒の様になった剛鬼丸が俺に向かってくる。
　光による飛行ではなく、光によって回る自身の身体から生じる風

力で飛んでいる様だったが……っく！　早い！
俺が逃げる様にウィングブースターを操作するより早く、剛鬼丸が眼前に迫る。
ほぼ同時にオウキが俺を助ける為に剛鬼丸の上に移動し、回転が最も弱い頭部へ拳を振るう。
拳が頭部に当ろうとした瞬間、剛鬼丸が回転を止めた！？
これによって剛鬼丸の位置が僅かにずれ、オウキの拳が空を切り、その勢いを殺せず、剛鬼丸の前に背中を向けて急降下。
オウキが自身の前を通り過ぎるのを剛鬼丸がただ黙って見ている訳なく、四肢を使ってオウキに抱き着く剛鬼丸。
閃光突撃に耐えられる身体から出される力は強烈で、瞬く間にオウキの装甲にひびが入る。
剛鬼丸はこれを狙い、俺に突撃してきたのだろう。
何度もオウキに閃光突撃を邪魔され、全方位閃光を使えなくさせられたのだから、後はシールドが使えない接近戦しかない。
閃光独楽と言うべき回転には面を喰らったが、そっちの思惑通りに行ったのと一緒で、考えていた過程とは違うが、『結果は思惑通り』なんだよ！

オウキに抱き着いた剛鬼丸は、自身の剛力でオウキを抱き砕こうとした。
剛鬼丸の力は、岩を簡単に砕き、鉄すら引き千切るほど強力なもの。
そんな剛力に晒されれば、オウキの装甲はあっさりひびが入り、折れ曲がる。
剛鬼丸は勝利を確信した。
オウキを倒す事によって、剛鬼丸は意志力とは違う『何か』を喰らう事が出来る。
その『何か』は、喰らった剛鬼丸の力を更に向上させる。

そう剛鬼丸は『武霊としてのまだ壊れていない部分の本能』で感じていた。

力が向上すれば、例え夜衣斗がオウキを『再具現化』しても、もはや剛鬼丸の敵ではない。

はずだった。

剛鬼丸は止めとばかりに、上体を反らし、折れ曲がったオウキの身体を引き千切ろうとした。

その瞬間、剛鬼丸の腹に何かが巻き付き、固定される。

剛鬼丸が自身の腹を確認するより早く、オウキと夜衣斗が唐突に『爆発した』。

至近距離からの二つの強烈な爆発に、何の抵抗も出来ず吹き飛ばされる剛鬼丸。

滅茶苦茶に身体が回りながら、剛鬼丸は自身の腹に巻き付いた物を確認する。

それはアームの付いた小型円盤で、剛鬼丸が見ている前で、その後ろに棒を形成し出す。

何をするつもりなのか剛鬼丸には分からなかったが、それに激しい危機感を覚え、腕から出力の小さい閃光を出し、体勢を整えると共に、取り憑いた小型円盤を引き千切ろうと両手を伸ばした。

だが、その手が小型円盤に届くより早く、剛鬼丸は背中に衝撃を感じた。

振り返って確認すると、湾曲した光景と直前まで剛鬼丸の行く手を邪魔していた小型円盤達。

シールドサーバント達によって多重に張られて造られたシールドの台。

そこに剛鬼丸は乗っていた。

更に横から他のシールドサーバント達が現れ、剛鬼丸の四肢を押さえ付ける様に多重シールドを発生させる。

これにより腹に付いている小型円盤に手を伸ばせなくなるが、剛鬼丸はそれでもいいと思った。

何故なら、剛鬼丸を身動きさせなくしている多重シールドは、触れているだけで剛鬼丸の鎧を削っている。
それはつまり、封じられた腕以外の個所の閃光が使える様になると言う事。
なら、わざわざ抵抗する必要はない。
待てば、こんな奴らなんて一瞬で一掃出来る。
それが、剛鬼丸が剛鬼丸として培われてきた経験による、『油断』だった。
剛鬼丸の拘束が完了すると同時に、腹に取り付いた小型円盤も棒の形成が完了し、その瞬間、強烈な爆発が起きた。

プロローグ『選択の武霊使い』１３

剛鬼丸が自身の鎧が開かなくなれば、きっと自ら鎧を壊すと思っていた。

何故なら、剛鬼丸の鎧は超速再生が可能な鎧で、それは骸骨犬に襲われた時に確認出来ていたからだ。

なら、鎧を壊す事に躊躇いがあるわけがない。

だが、剛鬼丸が完全に鎧を元通りにするまでには時間が掛かる。

その間に、剛鬼丸は海に落ちるだろうし、そこに『ドッペルゲンガーサーバント』により作り出したオウキの『偽物』を差し向ける。はずだったんだが……

ドッペルゲンガーサーバントはその名の通り、ドッペルゲンガーの様に指定した対象に化ける事が出来るサーバントで、化ける方法は主に二つ。一つは直ぐに化けられるが実体が無い立体映像。もう一つは、若干時間は掛るが実体もあるナノマシン。そして、今回はその二つを併用して使い、腹部のみを立体映像にし、そこにもう一つのサーバントを潜ませていた。

もう一つのサーバントの名前は『ＣＡ（クラッシャーアーム）サーバント』。

その名の通り、対象に取り付き対象を破壊するサーバントで、円盤にクワガタの角の様なアームがあり、それで対象に取り付いた後、強力な推進力機関が付いた杭を生成し、爆発する様に取り付いた対象に杭を打ち込む。

その二つのサーバントは思惑通りの結果になったが、いきなり空中で自身の腕の鎧だけを取り、独楽みたいに回ってくるとは流石に思い付いてなくて……慌てた『ステルスサーバント』で姿を消していた本物のオウキが俺の基に駆け付けようとした為、俺も慌てて偽物を差し向ける様に思考で命令。

ステルスサーバントはその名の通り隠密専用のサーバントで、自身だけでなく周囲の物体も任意にその姿を消す事が出来る機能を持

っていて、不意打ちを成功させる為に本物を隠していたのに、いくら事前に考えた作戦違う事になったからと言って、本物が現れたら全てが駄目になる。

その意図が通じたのか、オウキは駆け付ける事をぐっと堪えた……武霊の感情も武霊使いに伝わってくる事にちょっと面食らいながら、俺は剛鬼丸に気付かれない様に素早く『自分の偽物』から離れた。

ジャミングスモークを使って隠れると同時に、俺はオウキにＣＡサーバントと『二機』のドッペルゲンガーサーバントを出させ、それぞれの偽物の後ろから接着弾を撃っていた。

俺の偽物はほぼ念の為で、オウキの偽物だって、ただ単に気付かれないタイミングで偽物を作ったに過ぎなかった。

まあ、結果、俺の下に本物のオウキが駆け付けなかった理由が出来……それがなかったら駆け付けていた感じだったな……何か俺の考えていたオウキと『性格が違う』感じだ。物語の方のオウキはどんな時でも冷戦沈着な性格だったはずなんだが……やっぱり中身は別物って事か？　……まあ、とにかく、オウキの偽物による不意打ちは成功。

更に、自爆機能があるドッペルゲンガーサーバント二機の自爆で剛鬼丸を吹き飛ばし、作り始めていたシールドサーバント達の多重シールド拘束台の上に上手く落とす事が出来た。

そして、拘束台が完成すると共に、ＣＡサーバントの杭が爆発する様に推進力機関を起動。

杭が一気に剛鬼丸の腹に打ち込まれるが、杭が半ばまで喰い込んだ所で……推進力機関が唐突に停止。

燃料が切れた!?

俺がそう思った瞬間、剛鬼丸は腕の閃光を放ち、拘束していたシールドを吹き飛ばし、両腕を自由にする。

そして、腹に巻き付いているＣＡサーバントに拳を放ち、壊すが、杭は既に半ばまで喰い込んでおり、剛鬼丸が引き抜こうとしてもビ

クともしない。
だが、剛鬼丸の剛力から考えて、そのまま放置すれば、いずれは抜ける。
なら！　更に喰い込ませるだけだ！
「オウキ！」
俺の呼び掛けに応え、オウキが既に両腰出していた巨大なハンマー『ブーストハンマー』を振り上げ、剛鬼丸に向かって急降下。
落下とウィングブースターの推進力が加わった打撃が、狙い違わず剛鬼丸に打ち込まれた杭に当る。
初めて聞く剛鬼丸の苦悶の叫びに……少々面食らいつつ、
「ブーストハンマー！　最大ブースト！」
俺の言葉に反応したブーストハンマーが、打撃面の逆に付いた推進力機関を爆発させる様に起動させる。
そのあまりの威力に、剛鬼丸の身体が沈む！？
拘束台を作り出しているシールドサーバント達が、新たに加わった負荷に耐えられず、次々と霧散化し、終には全てのシールドが消滅し、剛鬼丸は海へと叩き付けられた。
……これじゃあ、どこまで杭が喰い込んだかわかんねぇじゃん…
…もう少しシールドサーバントを増やすべきだったか？
そんな事を思った時、不意に意識の薄れを感じた。
しかも、シールドサーバントを大量に出した時の比ではないほどの薄れで……その影響か、唐突にオウキの姿が霧散する。
まずい！　今、具現化が解ければ！？
そうは思っても、意識の薄れはどうしようもなく、終にはＰＳサーバントまで霧散化し、元の格好に戻ってしまう。
当然、真っ逆様に落下し始める。
しかも、タイミング悪く、
真下の海で、丁度剛鬼丸が落ちた場所で、強力な閃光が生じた！？

ブーストハンマーにより海に叩き起こされた剛鬼丸は、海水で幾分か速度が落ちはしたが、そのまま海底に叩き付けられる。
腹部には全て内部に喰い込んだＣＡサーバントの杭。
もっとも、喰い込んではいても、剛鬼丸の身体にそれほど支障はなく、直ぐに体勢を立て直し、海底に立った。
そして、閃光を全て使える様にする為に全身を叩き始める。
ほどなくして、全ての鎧にひびが入り、後は掻き取るだけの状態になった時、不意に剛鬼丸の周囲に黒い球体が次々と発生した。
発生した黒い球体は直ぐに消滅したが、その後には、骨だけの骸骨犬。
はぐれが発生した瞬間だった。
つまり、夜衣斗はわざわざ『はぐれが生じるポイント』の上空に来てしまっていたと言う事。
それによって、夜衣斗は生じたばかりの骸骨犬達に襲撃される事になったのだが、今生じたばかりの骸骨犬達は、何故か夜衣斗ではなく、剛鬼丸に襲い掛かる。
牙が、爪が、骨が、剛鬼丸のひび割れた鎧に突き刺さるが、当然、その肉体には一切の傷を付けない。
はぐれ化を起こす前の剛鬼丸がした様に、はぐれ剛鬼丸も一体一体握り砕こうとした。
だが、星波海岸の方から、町に向かっていた骸骨犬達が現れ、更に剛鬼丸に襲い掛かってきた事により、そのあまり数の多さと密度で、身動きが取れなくなる。
夜衣斗とオウキから発せられる意志力とは違うが近い『何か』気配に、剛鬼丸同様に誘われ、ここまで戻ってきたのだが、その直前で、オウキは霧散化し、夜衣斗から『何か』の気配消えてしまった。
これにより、剛鬼丸同様に飢えている骸骨犬達は、手近な意志力の塊である剛鬼丸に襲い掛かる。
まるで骨の団子の様になった剛鬼丸は、その状況から抜け出す為に、全方位閃光を放った。

これにより『今日発生した全ての骸骨犬』は消滅するが、その代償として、剛鬼丸の全身は焼け爛れ、全ての目が潰れてしまう。
剛鬼丸の鎧は、防具として存在している訳でなく、その下の目から生じる閃光を制御する為に在った。
その為、鎧の内側は剛鬼丸の閃光を弾く様になっており、例えひび割れていたとしても、その機能が失われる事無く、結果、放った閃光の半分以上が自身に返って来ていた。
ぼろぼろになった剛鬼丸は探す。
全方位閃光によって倒した骸骨犬達の意志力を喰らったが、それによって身体を回復させられるほどの意志力は得られず、これまで以上に、まるで渇くほどに飢えた。
閃光により消滅した部分を補う為に周囲から海水が迫る中、渇くほど飢えた事により鋭敏になった感覚が、自分の方に向かって落下してくる夜衣斗の存在を気付かせる。
僅かしか感じられない意志力だが、そんな事は今の剛鬼丸には関係ない。
ただ、飢えを満たす為に、早く飢えを満たす為に、足に力を込め、飛び上がる。
夜衣斗を殺す為に。

閃光が消えた真下の海は、閃光によって海水が蒸発したのか、海底がむき出しの状態になっていた。
露わになった海底に、剛鬼丸が立っていたが、その姿は鎧の全てを無くし、爛れた全身を見せている。
その姿から、もう閃光は使えないだろうが……そんな状態になっても、身体活動に一切の影響がないらしく……落下する俺を見上げ、足を屈めて、飛び掛かってきた。
オウキも、ＰＳサーバントも霧散化した俺に、それに抵抗出来る手段は無かった。

サヤの話が本当なら、オウキを再具現化させる事は出来るはずだが……もう……オウキを具現化させるほど……意識を集中させるほど意志力が……ない。

絶望的な状況。

それを覆す新たな手段もない。

閃光を出す目が潰れていても、あの剛腕ならたった一振りの拳で俺は死ぬだろう。だが、

夜衣斗に迫る剛鬼丸が、

そんな状況なのに、

拳を、

俺は、

振り被り、

勝利を確信していた！

放った。

「ＣＡサーバント！　ブレイク！」

プロローグ『選択の武霊使い』１４

夜衣斗が叫んだ瞬間、剛鬼丸の腹部に『霧散せずに残っていたＣＡサーバントの杭』が爆発した。

ＣＡサーバントの杭には撃ち込まれた対象内部で爆発し、ダイナマイトで岩石を爆破して砕く様に、名の通り対象を破壊する杭だった。

更に剛鬼丸の身体は、確かに肉体は硬かったが、内部は通常の生物同様に柔らかい内臓が再現されて具現化しており、杭の爆発によって一瞬の内にして剛鬼丸の内部は掻き乱され、硬い肉体によって圧力が高められた爆発は、剛鬼丸の身体を瞬く間に四散させ、飛び散った肉体は霧散。

剛鬼丸は確かに夜衣斗の作戦通り倒す事が出来た。

だが、それによって生じた爆発は、至近距離まで迫っていた夜衣斗を木の葉の様に吹き飛ばしてしまう。

残った意志力を全てＣＡサーバントの杭に注ぎ込んだ俺は、杭の爆発で生じた爆風で吹き飛ばされても、勢いを失い自然落下し始めても、一切の抵抗する気力を失っていた。

抵抗したからと言って、もはやオウキをイメージする事すら出来なくなっていた俺に、もはやどうする事も出来ない。

確かに剛鬼丸には勝利した。

そして、死ななかった。

つまり、死の運命を乗り越える事が出来た。

出来たが……っは……

力なく俺は笑う。

このままでは結局、海に叩き付けられて……死ぬ。

それほどの高さから俺は落ちていた。

剛鬼丸が関わる死の運命は退けたが、それによって別の死の運命が生じたって事か？

早過ぎだろ……退けて即って……

薄れつつある意識で、そんな事を考えている俺の目に、海面が入り、迫るか――

軽い衝撃。

明らかに海面にぶつかった衝撃ではなく、目の前には、高速で動く海面？

ぐるっと回る感覚と共に、その慣性を利用して、抱き直される感覚？

「大丈夫ですか？」

掛けられた声に、俺は反応する事は出来なかった。

もう、意識が、身体を動かせるほど……ハッキリして……なく……

無反応な俺に、声の主が顔を覗き込んだ。

薄れゆく意識の中で、はっきり鼓動が高鳴ったのを感じ……見るからに活発そうで可愛らしい顔付きの……弩スト――

自分の腕の中で意識を失ってしまった自分と同年代ぐらいの少年に、赤いドラゴンの武霊使いは困った顔になった。

「えっと……どうしよう？」

自分がその背に乗っている赤いドラゴンの武霊にそう声を掛けるが、赤いドラゴンは困惑のイメージを送ってくるだけだった。

「ん～……それにしても、こんな凄い武霊使い、町にも、学園にもいなかったよね……今日覚醒した？　……でも、それにしてはとても覚醒したてとは思えない動きだったような……」

そんな事を呟きながら、少女はまじまじと少年の顔を見た。

そして、

「あ！　この人もしかして……黒樹（くろき）……や……夜衣斗さん！？」

少年の名前を口にした。

プロローグ『選択の武霊使い』終了

剛鬼丸と死闘を演じた夜衣斗とオウキの戦い。
その様子を星波町に隣接して存在する星降り山中腹に建てられている廃校屋上で見ていた少年少女がいた。
「あは♪　とぉ～ても凄い武霊が現れたね♪」
「うん……でも、お姉ちゃんが欲しがってた武霊が……」
「いいのいいの。代わりにあんな凄い武霊が現れたんだから……うふふ……ホント、優しい弟だよね」
そう言った姉と言われた少女は優しげに微笑み、弟と呼んだ少年の頬に手を当てた。
二人は姉弟と互いを呼びながら、全く似ていない。
異様なほど色白で、見惚れるほど綺麗な腰まである長い黒髪に、見る者に戦慄を感じさせるほど妖艶な容姿の姉。
線が細いが健康的な肌の色をした美少年の分類に入る弟。
少なくとも血の繋がりが無いと分からせるほどに十分な違いが二人にはあり、普通の姉弟のではない事をうかがわせるのに十分だった。
だからなのか、弟の頬に手を当てていた姉は、不意に笑みの質を変える。
「欲しいの。とても……とても渇くほど、欲しいの……」

それまで妖艶ではあっても幼げな雰囲気を出していたのに、笑みの質が変わった瞬間、成人の、しかもより妖艶な雰囲気になり、弟の唇を奪った。
されるがままの弟を姉はそのまま押し倒し、抑えられない『渇欲』を満たす為に――

激しい戦闘音が鳴り止むと同時に、男は数字を数え出した。
星波海岸に近い場所にある星波警察署。
その留置所に男はいた。
武霊封じの文字で埋め尽くされたその留置所で、男はただ数字を数え続ける。
ぼさぼさ頭の髪で顔の大半が隠されている為、その表情は伺いしれない。
だが、この場所にいる事と、暴力だけで発達したと連想させる細身だが凶暴な身体付きを見れば、十分危ない人種だと理解出来る。
男の口元は歪み、数える速度がどんどん速くなった。
まるで暴れ回る『本能』を、数字と言う理性で抑え込んでいるかのように――

星波海岸の星波山側にある廃工場地帯で、その男は鎖でつながれ、冷たいコンクリートの床に倒れ伏している少女を見てにやついていた。
二メートル以上ある筋骨隆々の男のその後ろには、男の手下らしき者達が大勢おり、男と同様ににやついている。
そんな男の所に、外にいた手下の一人がやってきて、ビデオカメラを渡した。
男は無言でそれを受け取り、撮られている映像を再生。
そこには剛鬼丸と死闘を演じている夜衣斗とオウキの姿が映し出

されていた。
「いいね……こういう強力な武霊が現れるのを待ってたんだよ」
男はそう言って、ビデオカメラを持ってきた手下に投げ返し、
「こいつを徹底的に調べとけ」
鎖に繋がれた少女に近付き、鎖を持って強引に少女を立ち上がらせた。
「なるべく早く調べ上げろよ。暇潰しのこいつが完全に壊れちまう前にな」
それまで、そして、これからも男達の『快楽』のはけ口にされるであろう少女は――

星波学園大学部校舎内の一室で、その男は思考に耽っていた。
異様に細い目に、常に微笑んでいるその男は、星波学園の生徒のみで構成されている学生自警組織『武装風紀委員会』・通称『武風』の委員長をしている男だった。
その男が思考に耽る少し前に、部下の武風委員が今回のはぐれ発生が終息した事を伝え、同時に新たな武霊使いが生まれた報告してきていた。
（二日連続でのはぐれ発生に加え、まるでそれに呼応したかの様に現れた強力な武霊使い……『いよいよ』と言う事か？　……だが、そうなると予想より少し早い……こちらの準備はまだ終わっていないと言うのに……）
そこまで考えて男は、部屋の窓を開け、そこから見える星波町を、いや、正確には山中にある廃校と、海岸にある廃工場を見た。
（不確定要素が強過ぎるが……この際、準備の足りない分を補う為に、利用出来るものは利用すべきだな……）
男はそう思い、先程の彼の部下から渡された新たな武霊とその武霊使い・オウキと夜衣斗の写真を見た。
写真を見る為に僅かに開かれたその目には、何ら感情が籠ってお

らず、それはまるで『支配』者の様な冷徹な目に見え――

星波学園小中高大統合部活同好会棟群の一つ、漫画同好部の部室で二人の少年が安堵のため息を吐いていた。

直前にはぐれの発生が完全に終息したと言う校内放送があった為だが、片目を髪で隠した少年が直ぐに表情を安堵から激怒の表情に変える。

「くそ！　俺も武霊を具現化出来たら！　俺がはぐれを全滅させていたのに！」

「……うん。そうだね……」

強い口調で激怒する少年に、もう一人の目の下に隈を作っている少年は若干上の空で相槌を打つ。

上の空の少年は、三階にある部室から、双眼鏡を使って見る事が出来た、見た事のない武霊の姿を思い浮かべていた。

「誰だか知らないが！　あの白騎士みたいな武霊の武霊使い！　ぜってぇ調子に乗ってんよ」

「……そうかな？」

嘲る少年に聞こえないぐらいの小声で否定の言葉を口にした少年は、その武霊の、やはり見た事がない武霊使いの必死な表情を思い浮かべ、

（あれだけ強くて見た事が無いって事は、今日初めて具現化出来たって事だよね……それなのにあんな強力なはぐれを倒しちゃうなんて……羨ましいけど……でも……）

比較的好意的な表情と感情を浮かべていた少年の顔と心に、僅かながらの『恐怖』が現れ――

星波町にあるマンション最上階の一室に、二人の男女がいた。

男は野性的な雰囲気を持つアイドル風で、女は凛々しいと言う言

葉を体現したかの様な容姿。
そんな二人の前には、いくつもの鏡が浮かんでおり、さきほどまでオウキと剛鬼丸との闘いを映していた。
「……よかったね。今回も幼なじみちゃんが無事で」
そう力無く笑う女の視線は、赤いドラゴンに乗り、夜衣斗が海に叩き付けられるのを防いだ少女に向けられていた。
男は手を振り、浮かんでいた全ての鏡を消すと、無言で女を抱き寄せる。
女は特に抵抗せずに男の肩に頭を乗せ、
「……どうするの？　……あの新しい武霊も？」
そう男に問うが、男は答えず、窓の外を見る。
その瞳は、決意に満ちており、大切なものを守ろう、何に変えても守ろうと、『守護』の決意に満ち溢れていた。
だが、その瞳の奥には――

星波駅近くにある第二地下避難シェルターから一人の少年が出てきた。
若干浅黒く、猫目な彼は、携帯電話で時間を確認し、
「やば！　バイトの時間に遅れちまう！　いそがねぇと！」
そう言って駆け出そうと携帯電話をポケットに仕舞おうとした時、携帯に着信が入った。
着信相手が誰か確認した瞬間、彼は電光石火の早さで出る。
「やあ。元気だったかい？」
少年がそう声を掛けると、通話相手は苦笑したようだった。
「え？　そりゃ、俺は元気一杯さ……ん？　こっちの様子？　……そうだな……相も変わらず騒がしいよ……そう言えば……」
少年は先ほど見ていた地下シェルターの外部モニターに映っていた同年代ぐらいの新たな武霊使いを思い出し、
「すげぇ奴が転校してくるみたいなんだよ……いや、学年はまだ

わかんねぇけど……ん？　いや、バイトは」
電話相手にバイトの時間を聞かれたらしく、少年は悩んだ。
相手に断ってバイトに行くか、それともバイトの事は無視してこのまま会話を続けるか、彼はどちらを『択一』しようか逡巡し――

次章

第一章『渇欲の武霊使い』

小さな公園。
その場所で、幼い頃の小さな俺はブランコに乗りながら……泣いていた。
泣いている理由は……思い出せない。
とにかく辛い事があったのか、涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながらブランコを小さく揺らし……終には揺らす事すら止めて俯き、地面に跡を作る。
どれだけ泣いた後か、ふと気が付くと、隣の空いていたブランコに誰かが乗っているのに気付く。
反射的に誰かを確認し様と顔を向けると、そこには某チキン屋の老人を彷彿させる白髪で立派な白髭を生やした老人がいた。
「何か悲しい事でもあったのかい？」

そう優しく語り掛けてくる老人。
普通なら警戒心を抱きそうな現れ方だったが、不思議と小さな俺は警戒心を抱かなかった。
幼かったせいか、それともその老人の優しげな雰囲気のせいか、とにかく俺はその老人に対して何があったか喋った……のだと思う。
上手く思い出せていないのか、小さい俺の言葉は聞えず、ただ、老人の相槌の為に頷く姿のみが見える。
「大変だったね。でも、それに耐えた君は偉いよ」
小さい俺の話を聞き終えた老人はそう微笑んで、小さい俺の頭を撫でた。
その瞬間、老人の目が驚愕で見開かれる。
「な！　……これは……そうか……君があの子達の……なのか……だとすると、この出会いは……」
茫然とつぶやく老人。
意味が分からずきょとんとする小さい俺に、老人は再び優しい笑みを浮かべ、何かを言おうとした瞬間、映像が消え、ただ、声だけが聞こえた。

願わくば
君に与えた運命を変える選択が
あらゆる宿命の悪意に打ち勝つ事を……

第一章『渇欲の武霊使い』1

そこは日本のとある港に寄港している外国籍の大型タンカーの船底。

名目上は日本に食料品などを輸入する為に寄港しているが、その実体は……

「……君の目が見えなくてよかったと思ったのは初めてだよ……」

そう高木弥恵に言ったのは、先日籍を入れたばかりの彼女の幼馴染・鋼（はがね）。

僅かにある光源で見る彼の視線の先には、裸にさせられ、鎖に繋がれ、虚ろな目で小さな鉄格子の檻に入れられている人種年代様々な男女。

その誰もが目を引く美男美女であり、鎖が繋がれた首輪には、まるで家畜の様に番号札が付けられている。

目が見えなくても、周囲の光景を視覚以外の感覚で感じ取れる弥恵は、湧き上がる感情を抑える為に、ぎゅっと自らが持つ盲目者用の杖を握り、

「……渇欲の悪意の果て……」

「え？」

弥恵の呟きに、鋼は聞き返す。

「師が言うには、ここは渇くほどに欲した者達によって利用された者達の果て……が集められる場所だって……」

「……これも『ヴァルキュリア計画』の一端だって言うのか？……こんな……非道が……」

呆然自失に近い呟きを口にしながら、鋼が一番近くの檻に近付いた時、その檻の少女が鋼を見た。

そして、鉄格子にぶつかる様な勢いで鋼に手を伸ばし……『聞くに堪えかねぬお願い』を鋼にする。

まるで獣の様に舌を出しながら、恥も外聞もなく、涎を垂らしな

がら、お願いする。
そしてそれは全ての檻に伝播し、ある者は犬の様に、ある者は豚の様に、ある者は、ある者は……そこに……人間はいなかった。
そうする様に調教された、人だった者達。
ここは、ヴァルキュリア計画と呼ばれる計画の為に誘拐され、『用済みとなった者達』を計画の資金などに変える為に用意された『移動式奴隷市場船』の船底。
あまりの光景に、意識がぐらつくようなショックを覚え、鋼は吐き気を必死に抑えた。
吐いている暇なんて鋼にはない。
これから、鋼は、いや、弥恵は彼らを救わなくてはいけない。
そのサポートをする為に、鋼はここにいる。
「弥恵……行こう……一刻も早くここを潰さないと……」
鋼は決意を込めて弥恵を呼ぶが、
「弥恵？」
弥恵は杖を自分の正面に持ち上げ、
「止せ！　弥恵！」
鋼の制止の声より早く、杖を『抜いた』。
神速と呼べるほどの仕込み杖の抜刀。
そして、鋼が気付いた時には、納刀され、同時に周囲が静かになっていた。
慌てて周りを見回すと、鋼の予想に反して、檻に入れられた者達は意識を失っているだけだった。
「私がこの人達を殺すと思った？」
弥恵の苦笑交じりの問いに、鋼はばつの悪そうな顔になって、
「何したんだ？」
問いに問い返した。
「彼らの身体にあった『誘拐されてからのあらゆる事象を斬った』のよ」
「……は？」

言われた意味を理解し切れなかった鋼に、弥恵は微笑んで、
「彼らが何事もなく日常生活に戻れるって事……まあ、誘拐されていた期間とその間の記憶の喪失は多少の障害になるでしょうけど……さっきの状態より遥かにましでしょう？」
「そりゃそうだが……そんな事」
鋼は改めて近くの少女を見る。
お願いをしてきた時、見えた無数の打撲痕や裂傷痕。
それらが消え、年相応の穏やかな寝顔を見せていた。
「……可能なのか？」
弥恵が言った通りなっていると確信しながら呆然と着てきた鋼に、弥恵はにっこりと笑って、
「普通の状態の人間では無理だけど、あそこまで自我が壊れていれば、『抵抗力』は皆無ですからね。こんな事も可能なの」
「いや、そんな事言われもな……」
説明になってない説明に、呆然から困惑へと様子を変えた鋼に、弥恵は苦笑して、
「言ったでしょ？　私は」
不意に眩しいぐらいの光が灯った。
思わず目を瞑る鋼の前に、光の影響を受けない弥恵が出て、仕込み杖を居合。
複数の金属音がし、光に慣れた目を鋼が向けると、地面にクナイがいくつも落ちていた。
「すまない弥恵」
「いいのよ……バックアップをお願いね」
「ああ」
そう短く言葉を交わし、弥恵が虚空に向けて居合いを放つと、刃の先が通った場所に裂け目が出来、そこからライフル銃が現れた。
ライフル銃を受け取った鋼は、近くの誰も入っていない檻を倒し、その陰に隠れ、構える。
構えた先には、この場の出入口らしきドアと、その前にいる忍者

姿の数人の男女。
「……どうやってこの場に入り込んだのかと思えば……」
現れた者達の中で唯一着物姿の女は、その手に持つキセルを吸い、煙を吐き出してため息を吐いた。
「『次元切断』なんて初めて見たよ……噂には聞いちゃいたが……あんた。シェルトン＝シルベリアの弟子か？」
女の問いに、弥恵は頷き、
「はい。私はシェルトン＝シルベリアが一番弟子。高木弥恵と申します。短い間でしょうが、お見知りおきを」
そう丁寧に挨拶され、キセルの女は驚きの表情を浮かべ、一服して天を仰いだ。
「よりによって『七猿』の『見えざる』が来るか……まあ、実戦データを取るには最適の相手か……」
七猿と呼ばれた事に弥恵は眉を顰める。
「七猿と言う呼び方は、あまり好きではありません」
「知ったこたぁないね」
煙草の煙を吐きながら、無数にある檻を見回す。
「……人の商品に何をした」
「なかった事にさせていただきました」
弥恵の言葉に、再び檻を、彼女の商品だった者に視線を向け、その身体に起きた変化を確認。
鋼と違いその言葉の意味を瞬時に理解した彼女は、深いため息を吐いた。
「まったく、今日が競日だって言うのに……あそこまで調教するのにどれだけ時間と労力を掛けたと思ってるんだい？」
キセルの女の言葉に、弥恵は再び眉を顰める。
今度はより深く。
「あなたは……何とも思わないのですか？　人が、あんな風になった姿を見て」
言っても意味がないと思っていながら、それで口に出さずにはい

られなかった弥恵の言葉を、キセルの女は鼻で笑う。
「生憎、あたいは物心ついた時からこっちの業界にいてね……あんたが言っている意味が分からないね……逆に聞くけど？　これがどうなったら何か思うんだい？」
そう本気で問い返して来るキセルの女のあまりにも違う『違い』に絶句する弥恵。
その弥恵の反応にキセルの女はつまらなそうに一服し、袖から拳銃を取り出し、
「こうなったら」
一番近くの檻にいる女性に銃口を向け、
「あたいでも何かを思うのかい？」
引き金を、
「止めなさい！」
あまりにも唐突な行動に弥恵の動きが鈍り、仕込み杖を抜刀するより早く、忍者達が弥恵に殺到した。
鋼はキセルの女の拳銃を撃ち落とそうとライフルを撃つが、忍者の一体によって身体で受け止められてしまう。
忍者が殺到した弥恵は、反射的に抜刀を放つが、普通なら視認出来ないほどの抜刀を忍者達は避ける。
もっとも完全には避け切れなかったのか、身に纏う忍び服が切れ、その身体が露わになり、
「冗談だろ？」
思わず鋼にそう言わせる『本物の獣』の身体が出てきた。
ある者は猿。ある者は犬。ある者は獅子と、人の形をしているのに獣の身体。
「ああ、言い忘れたが、こいつらはヴァルキュリア計画の過程で造られた『戦士の実験体』だそうだ」
そんな事を言いながら、キセルの女は、あっさり引き金を引いた。
特に抵抗らしい抵抗も、感情らしい感情も無く、まるで機械が引き金を引いたかのように。

生じた銃音に、
「人としての存在を奪った上に！　命まで奪うのか！」
鋼は怒りにまかせ、ライフル銃をキセルの女に向けて連射するが、全て忍者によって銃弾を受け止められる。
だが、弥恵の方は怒りを浮かべるより、疑問符を浮かべた。
何故なら、拳銃を撃ったキセルの女が撃ったまま動きを止め、撃った檻を見たまま絶句しているからだ。
「……な！　やめ」
不意に驚き制止の言葉を口にし終えるより早く、何かがキセルの女の顎をかち上げ、倒した。
それに反応した銃弾を受け止めていた忍者も、唐突に現れた『巨大な白い腕』に吹き飛ばされ、天井にぶつかり、檻の上に落ち、動かなくなる。
するすると小さくなる白い腕の先には、『眼鏡を掛けた白熊の人形』がいた。
もっとも、巨大な腕が小さくなっている事から分かる様に、それは人形ではない。
腕がその小さな身体に合う大きさになると、もう一方の腕を振るう。
すると弾丸が床に落ちた。
それにはっとした弥恵は、慌てて銃弾が撃ち込まれた檻の気配を確認すると、檻の中の女性は無事。
どうやら撃ち込まれた瞬間に眼鏡の白熊人形が間に割り込み、銃弾を受け止めた様だった。
「ありがとう」
ほっとした弥恵がそう眼鏡の白熊人形に言うと、眼鏡の白熊人形は照れたように頬を掻こうとして、
「って言いたいけど！　危ないから来ちゃダメって言ったでしょ！」
怒られ、委縮。

更に何かを弥恵が言おうとするより早く、忍者達が弥恵達に襲い掛かってくる。

「弥恵。来ちゃったものはしょうがないって！」

弥恵が抜刀し、それを避けた忍者に向かって弾丸を撃ち込みながら、鋼はそう言い、眼鏡の白熊人形は同意する様に頷く。

「……もう！　後で師に怒って貰うからね！　いい！」

弥恵の言葉に、眼鏡の白熊人形は激しく頷く。

「行くわよ二人とも！　さっさとここを潰して、全員を家に帰しに行きましょう！」

その日、日本のとある港で、外国籍の大型タンカーが一隻謎の沈没を遂げた。

もっともそれが世間を騒がせる事はなく、代わりに騒がれたのは、大量の失踪者が失踪していた間の記憶を失って、無事に家族の下に帰ってきた事だった。

武装守護霊

第一部『七人の宿悪の武霊使い』

欲しい。

欲しい。

全てが欲しい。
あれも欲しい。
これも欲しい。
それも欲しい。
あらゆるものが欲しい
……でも、何が欲しい？
欲しい欲しい欲しい

第一章『渇欲の武霊使い』2

武霊使いが意志力切れを起こし、意識を失うと星波町にある星波総合病院に運ばれる。

それは、その後の武霊使いの身に『起こる事』を考慮しての事であり、剛鬼丸に勝利する為に、限界まで意志力を消費した夜衣斗も当然星波総合病院に運ばれていた。

夜衣斗が寝かされている病室は大部屋。

そこには夜衣斗同様に意志力切れを起こした武霊使い達が眠らされ、その者達で大部屋のベッドは全て埋まっている。

そんな満室の大部屋に、電動車椅子に座った年頃四十代の男性が入ってきた。

喉に酷い手術後がある四十代ぐらいのその男性は、器用に電動車椅子を操作して、夜衣斗が眠るベッドの隣に移動する。

服装は入院患者ではないのか、カジュアルなスーツ。

そんな男性は、電動車椅子に備え付けられていたノートパソコンを何やら操作し、寝ている夜衣斗を凝視。

しばらくして、何かに気付いたのか、少し驚いて、癖なのか何なのか、男性は無意識の内にノートパソコンを打ち、

「「『彼女』から聞かされた時は、まさかとは思っていたが……」」

ノートパソコンから小声の人工音声を出させる。

「「これは『彼女』に何を言われるか分かってモノではないな……『師』は何故彼に白羽の矢を当てたのか……何であれ、このままでは『環境が不味過ぎる』な……これでは『なる前』に『別の死の運命』で死にかねない」

そこまでノートパソコンにつぶやかせた男性は、しばらく黙考した後、

「「……仕方がない……気が進まないが『彼女』に頼むしか

ないか……」」

そうつぶやかせるとほぼ同時に、隣で呟き過ぎたせいか、夜衣斗が起きる気配を見せる。

その気配に男性は特に焦る様子も見せず、ノートパソコンをしまい、悠然と病室から出て行った。

気が付くと、真っ白な天井があった。

えっと？　……夢オチ？

……そうだよな……あんなラノベみたいない展開、普通以下の俺に起こるはずないよな……あはは、馬鹿みたいだ。

そんな事を思いながら上半身を起こし、周りを見回すと……明らかに病院ぽい所だった。

……何で病院にいるんだ？

（意識を失ってたからに決まってるでしょ？）

そりゃそうだよな……って！？　サヤ！？

（ええ……夢だと思いたいのは分かるけど……）

……そっか……まあ、あれだけの事があって、夢オチにするのは……無理があるよな……

（夜衣斗……）

心配そうなサヤの声に、俺は苦笑した。

平気だよ。今は……まあ、まだ現実を把握していないってのもあるかもしれないが……俺にはオウキがいるんだろ？

そう思うと同時に背後に何かを感じ、振り返るとそこには半透明なオウキがいて、俺を見ていた。

……なるほど、これが具現化していない武霊の状態か……

これからどんな事態になって、どんな生活になるか一切分からなくって、考えれば不安になるが……オウキを見ると何とかなる様な気がしてきた。

……これからよろしくな……オウキ。

そう思うと、オウキが嬉しそうに頷き、俺の背中に消えた。
しばらくオウキが消えた場所を見た後、首が痛くなったので正面に首を戻すと、向かい側に自警団員の人がいる事に気付いた。
静かに寝息を立てているのを確認して、俺はほっと一息。
ヒーラーサーバントの治療が成功してた事にほっとしたのだが……ふと疑問に思った。
……なんで俺は助かってるんだ？
起きたばかりで記憶の混乱があるのか、気を失う前の事をとっさに思い出せず、そう疑問に思ったが……少し考えると徐々に思い出し始め、至近距離でＣＡサーバントの爆発を受けていたよな？　何で俺、無傷なんだ？
（治療して貰ったんじゃないの？　ここ病院みたいだから、治療系の武霊能力を持った武霊使いぐらいいると思うけど？）
それもそうだが……考えて見ると、爆発を受けた時に対して痛みを感じなかった様な……
（そう言えばそうだったわね……ん～……ん？　……ああそうなの）
は？
（あのね。爆発の時に、まだＰＳサーバントの具現化が完全に消えてなかったんだって）
だって？　サヤはオウキと喋れるのか？
（私の居る場所は精神世界だからね。コミュニケーションに言葉や文字は必要ないのよ。夜衣斗だって、もうこの子と魂で繋がってるから、やろうと思えば言葉なしでコミュニケーション取れると思うわよ？）
そう言うもんか？　いや、そう言うものか……まあ、その事に関しては後で色々と試すとして……具現化が解けてなかった？　霧散化して元の服に戻ったみたいに見えたんだが……
（確かに大部分の具現化は解けてたみたいだけど、着ていた服の分の具現化はまだ解けてなかったみたい）

？

（服を元に戻している最中だったって事）

服を？

（だって夜衣斗、ＰＳサーバントを着たまま具現化が完全に消えていたら……素っ裸になってたわよ？）

……あ～なるほど……確かに……オウキの配慮に感謝だな……

そんな事を思いながら、爆発の後の記憶を探り、誰かに海に叩き付けられる寸前で助けられた事を思い出し……ぼっと顔が赤くなったのが分かり――

「あ！　起きたんですね！？　よかった！」

そんな声が唐突に聞こえ、声のした方へ顔を向けると、病室の入り口に俺を助けてくれた同年代の少女がいて……大いに慌てた。

動き易い様に短く切れられたのであろうショートカット。活発さを絵に書いた様な元気な顔付き。スレンダーで均整の取れたバランスの良い身体付き……総じて美少女。それも、かなりタイプの……

（大慌てしている割にはよく見ているのね？）

う、うっさいわい！

俺の慌てる様子に不思議そうに小首を傾げる少女。

あかん……これは、あかん。

何故かエセ大阪弁を脳内で使って……ちょっと落ち着く。

その間に彼女は俺のベッドの隣に移動して、

「えっと……意識ははっきりしてます？」

？

躊躇いがちに聞いてきた問いに、いまいち意味が分からず首を傾げると、

「意志力切れで意識を失った人は、中々起きれない事が多くって……最悪、半年以上寝たままになる人もいるんです。夜衣斗さんみたいに一日で起きる意志力の回復が早い人もいるんですけど……それでもしばらく日常生活に影響があるぐらい意識がはっきりしない人もいたりするので……ちょっと心配になったんです」

なるほど……だから病院で寝かされていた訳か……万が一なかなか起きなかった場合は、病院の方が色々と都合が良い。

「……大丈夫です。意識はハッキリしています」

その俺の言葉に、彼女はほっとして……と言うか！？　彼女、何で俺の名前を知ってるんだ？

俺がその疑問を口にするより早く、

「今、春子さんを呼んで来ますね。ちょっと待っててください」

そう言って、俺が制止する暇もなく慌ただしく病室から出て行った。

……えっと……どうしたもんだろうな？

（とりあえずここで待つしかないんじゃない？　春子さんって、確かこれからお世話になる夜衣斗の叔母さんの名前でしょ？）

ああ……下の名前で呼ぶって事は、彼女、叔母さんと親しい仲って事なんだろうな……

そんな事を思いながら、俺はサヤの言葉通りベッドの上で待つ事にした。

病院に入院した経験が無いので、最初の内はベッドの上でキョロキョロしていたが、正面以外はカーテンで区切られていた為、直ぐに飽きた。

かと言って、ベッドから出て勝手に病室から出るのは……まずいよな？

（まずいんじゃない？）

だよな……

手持ち無沙汰になった俺は、どうしても思考を巡らしてしまう。

そして、当然。

……何で……

（え？）

何で俺なんだ？

（夜衣斗……）

俺の心の底からの力無い疑問に、

気が付くと、また心の中の公園に俺は居て、目の前でサヤは悲しげな表情を浮かべた。

第一章『渇欲の武霊使い』3

昨日に引き続き、俺を俺の心の中に連れて来たサヤは、少し間を開け、躊躇いながら口を開いた。

「……それは……それが『夜衣斗の宿命』だから……」

俺の宿命？　……運命の次は宿命かよ……

「夜衣斗の死の運命は、『世界の拒絶』」

はぁ？　……拒絶？　しかも世界の？　……ちょっと待て！？　そんなのから拒絶されているのなら……どう足掻いたって……

愕然とする俺に、サヤは首を横に振る。

「だから、夜衣斗が死の運命から逃れる為には、夜衣斗は『主人公』になる必要があるの」

はぁ？　主人公？

次々と出てくる普段聞けば中二病かと確実に引く言葉に、俺は状況が状況だけに戸惑うしかない。

まあ……額面通りの言葉の意味じゃないよな……この場合……

「ええ」

ならどんな意味が？

その問いにサヤは苦笑に近い微笑みを浮かべ、答えない。

……なるほど……その答えも知らないか・言えない訳か……主人公って言葉に、どれだけ重い別の意味があるんだか……ん～……まあ、とにかく、サヤから得られる情報は、俺が思い出すか、自分で調べるしかないわけか……

「いえ、調べるのは止めといた方がいいと思うわ」

？

「今の夜衣斗は、色々な他の運命を引き寄せやすいから」

それは……世界が……『俺を殺そうとしている』からか？

頷くサヤ。

ため息を吐く俺に、

「だから、どこに何があるか分からない今の状況で、夜衣斗が自分から何かをするのは止した方が良いと思う」

なるほど……つまり、サヤは『今の事』は何も知らないわけか……

「え？　ええ」

……まあ、十年ぐらい俺の中にいたわけだから、それは当然か…それにしても……そうなると、俺から何かをするのは、どんな事でも危険に繋がる可能性があるって事だよな……まあ、俺から何かをするのは、俺の性格からして想像しがたいが……それでいいんだろうか？　普通、物語の主人公は、何かしらの行動を起こすものだろうし……まあ、主人公の意味が通常の意味で使われる場合はだが……いや、そうじゃない巻き込まれ型もあるか？

「……夜衣斗」

考え込む俺の名を呼び、悲しく、それでいて優しく微笑みかけるサヤ。

「夜衣斗、まだ選択の途中だわ。だから……」

一緒に死にましょうってか？　昨日……昨日？　……彼女が一日って言ってたから、昨日なのは間違いないか……どれくらい寝てたんだか……とにかく、昨日も言ったが……その選択肢は、正直ない。

「夜衣斗……」

例え、魂の自由を謳歌出来ようと、その自由は全て『独り善がりな自由』だろ？　それはつまり、『自分に無いものを自由になんて出来ない』。そうだろ？

「……ええ」

俺の問いに、サヤは躊躇いがちに頷いた。

人は一人だけじゃ生きられないってよく言われるが……それはきっと物理的な意味合いだけじゃなくって、精神的な意味合い、文化文明、人が人として存在する為に必要なありとあらゆるものに言える事で……仮に魂の自由を得る事が出来たとしても……俺の自由はそう長くは続かないだろうな……俺の精神力が、俺の知識が、魂の自由……要するに俺だけの世界？　……に耐えられるとは思えない。

「……私じゃ不足？」
悲しそうに言うサヤに、俺は首を横に振った。
サヤがどんな存在なのか分からない時点で決めつけるのはなんだが……サヤが俺の中に十何年もいたわけだろ？
「ええ」
それってつまり、俺と同じ事を体験し、俺が知っている事以上の事をそう多くは知っていないって事でもあるんじゃないか？　なら、サヤが俺だけの世界に加わったとしても、そう多くは世界の広がりを持たせられないと思うんだが……
「そう……かもしれない……でも」
これから俺が待っている過酷な運命よりまし……か？
頷くサヤ。
だけどさ、その……主人公ってやつになれば、死の運命からは解放されるわけだろ？
その俺の問いに、サヤは困った表情になる。
「確かに、世界の拒絶『は』なくなると思う」
は？
意味深な言い回しに、俺は眉を顰める。
「でも、例え主人公になったとしても、死よりも過酷な運命に晒される可能性が高いわ」
……だから、主人公にどんな意味が？
「それもいずれ思い出すわ」
思い出すって言われもな……よく分からない事を判断材料には出来ないし……過酷と言われても……正直、いまいちピンとこない。
「きっと後悔する……そして、例え激しく後悔して……死を望んだとしても……『主人公になったら夜衣斗は死ねなくなる』」
死ねなく……なる？　……不老不死にでもなるのか？
「場合によってはそうなるかもしれない」
？
「不老不死に自らなった主人公もいるって話だから……それは夜

衣斗の選択次第」
その言い草だと主人公ってのは過去にも現在にも複数いるってみたいだな……まあ……とにかく……言葉振りからすると、主人公になると、『死んではいけない存在になる』って事か？
俺の問いに頷くサヤ。
「主人公は……『主人公としての役目』を終えるまで、死んではいけない、『そう言う存在』なの」
……死んではいけない存在……それはどう言う存在なんだろうか？　……思い付くのは、空想の物語ばかりだが……死にたくても死ねない。あるいは死んではいけない……か……
「……あるいは……主人公じゃなくて」
じゃなくて？
呟く様に言ったサヤの言葉に俺が反応すると、サヤははっとなって、慌てて首を横に振った。
「うんん！　何でもない！　気にしないで！」
妙に必死に否定するサヤ。
……滅茶苦茶気になる反応なんだが……
無言になるサヤ。
しばらくの沈黙の後、不意に――
「あれ？　夜衣斗さん！？」
と言う彼女の声が聞こえた。

第一章『渇欲の武霊使い』４

気が付くと病室に戻っていて……目の前に俺を助けてくれた彼女が居て、俺の顔を覗き込んでいた!?

思わずびくっとすると、彼女もびくっとした。

「だ、大丈夫ですか？　何だかぼーとしてたみたいですけど……」

「だ、大丈夫です……ちょっと考え事をしていたもので……」

「そ、そうなんですか……よかった……」

ほっとした様子の彼女に、咄嗟に嘘を吐いた事に少しだけ罪悪感を覚えた。

……まあ、いきなり自己精神世界で十年前から取り憑いている謎の女性と会話してたって言われても、困惑どころか、場所が場所だから医者を呼ばれかねないよな……

（当然そうなるでしょうね……ああ、勿論分かってると思うけど、私の事は）

言わない方が良いんだろ？　間接的なものでも警戒しなくちゃいけないのに、直接サヤの事なんて口にしたら……どうなるんだ？

（さあ？　流石にそこまでは……）

……何であれあやふやなで確定的な中途半端なやな話だ――

「もう！　心配したんだからね！」

不意にそう言って、誰かに抱き着かれ、匂いと胸に当る感触で女性だと分かり、思考も身体も固まる。

「ぎゃあ！　いきなり何してるんですか春子さん！」

「え？　何って感動の初対面の演出？」

「アホな事を言ってないで、早く離れてください！　夜衣斗さんが固まってます！」

慌てて俺から抱き着いている女性を離そうとする彼女だったが、その反応で何を思ったか、

「うふふ、それはそれでおも」

更に押し付けようとしてきた瞬間、ガンと音が鳴るほどの衝撃を俺は間接的に感じた。
それと共に、俺に抱き着いて来た女性が離れ、頭を押さえて背後を見る。
……
（お～い夜衣斗、戻ってきて）
……思春期の男にこれはちょっと……
（こんなの色んなので予行練習しているじゃない？）
それは架空。これは現実……あっさりキャパシティオーバーだって……
（そう言うもの？　……あ、確かに反応してないね）
どこの事を言ってる！？
（え？　言っていいの？）
言わんでいい！
なんてサヤと脳内会話をしている間、俺に抱き着いてきた……顔をちらっと確認したが、確かに写真で見た俺の叔母・『黒樹（くろき）　春子（はるこ）』だった……春子さんは、自分の頭を殴った女医に抗議の声を上げていた。
「いきなりタブレットＰＣで殴る事は無いじゃない！」
春子さんの言う様に、眼鏡を掛けた女医……？　……あれ、この人、どう見ても外国人、しかも、テレビとかで見た事があるドイツ人ぽい……少しきつめの美人……って、余計な事を考えたな……その美人ドイツ人女医は、タブレットＰＣを持っていた……精密機械を殴る為に使うか……普通。
「安心しなさい。ここは病院よ。今ので頭が悪くなっても治してあげるわ」
日本人と遜色ない日本語で、さらっととんでもない事言う。
「いや、現代医学でそんな事まで出来ないでしょうが！」
「大丈夫。叩けば直るわ」
「私は古い電化製品か！」

「丈夫さはそうね」
「きぃー！」
……なんなんだ……
自分の叔母とドイツ人女医のやり取りに、呆れ返っていると、彼女が俺の隣に来て、
「春子さんって、色んな人と仲が良いです。このやり取りだっていつもの事ですから、気にしないでくださいね」
……色んな人と仲が良いね……とても友達がいない俺と血が繋がってると思えない事実だな……と言うか……
「……あの」
「はい？」
俺の呼び掛けに、俺を真っ直ぐ見て微笑む彼女。
その微笑みに、俺は思わずドキリとしてしまい、反射的に目を反らしてしまう。
……うう、情けない……
（頑張って夜衣斗）
いや、そんな事を応援されても……とにかく、
一度反らした目を再び戻し、不思議そうにしている彼女の目を見て、
「……昨日は助けてくれてありがとうございます」
「え？　……ああ！　いえいえ、偶々美羽（みは）の所に飛んできたから助けられただけで、気にしないでください」
……偶々ね……と言うか、今、彼女、自分の事を美羽って言ったな……自分の名前か？　一人称を自分の名前で呼ぶ人なんて、テレビの中の人だけかと思ってたが……いる所にはいるんだな……まあ、
「……何であれ、俺を助けてくれた事は事実なんですから……このお礼はいつかさせてください」
「え？　いえ、そんな、悪いですよ」
「そうよ。いつかなんて言わず、今日、デートなりなんなりしてお礼しちゃいなさいな」

遠慮する彼女・美羽さんに、いつの間にか口論を止めて、俺達の事を見ていた叔母

「……今、失礼なこと考えたでしょ？　お・ね・え・さ・ん。だからね」

……勘の良い人だな……と言うか

「……デ、デート！？」

「あら？　何驚いているのよ？　男が女にお礼って言ったらデートでしょ？」

聞いた事が無い。と言うより、俺の世界にそんなルールは無い。

「……そんなに経験も無い癖に、なに偉そうにのたまわってるんだか……」

ぼそっと呟いたドイツ人女医の言葉に、おじろっと……春子さんに睨まれ、

「ちなみに！　私の事は叔母さんじゃなくて、春子さんって呼びなさい。年齢的には姉さんより、夜衣斗ちゃんの方が近いんだからね！」

その睨みをそのままドイツ人女医に向け、また言い争う。

……そう言えば、年の離れた妹だって言ってたっけ……まあ、確かに若く見える。少なくとも二十代後半か？……なんであれ、年相応の人物ではないのは間違いないな……本当にうちの母親の妹か？

母親とは全然違うんだが……まあ、そんな事を今言い出しても仕方がないが……容姿は似ていると言えば似てるし……にしても、何で分かるんだ？

（夜衣斗は分かり易いからね）

分かり易い？　……前髪で目を隠してても？

（雰囲気がね……）

……って事は、今まで関わってきた人も、俺が失礼な事を思うたんびに気付いてたのか？

（さあ？　……少なくとも、『勘のいい人』はまるわかりみたいだったわよ？）

……そう言えば、俺が誰にも言ってなかったいじめが発覚したのも、他人経由だったな……俺の醸し出している雰囲気で、何となく察していた訳か……だから、いじめられている場面を目撃した。

（夜衣斗……何も今のでそれを思い出さなくても……）

性分だから仕方ないだろ？

（もう……）

「とにかく！」

ドイツ人女医との言い争いを強引に切り上げ、美羽さんを見た春子さんは、

「町案内がてら、ちゃっちゃとデートしちゃって来なさいな。その間に夜衣斗ちゃんの歓迎会の準備を済ませておくから」

そう言って、美羽さんを苦笑させ、

「分かりました」

分かりました!?

「分かりましたけど……内緒のはずの歓迎会を今ここでばらします？」

「あ！」

美羽さんの言葉に、自分の失言に気付いた春子さんは、俺の方を見て、

「ごめん。今の忘れて！」

……忘れてって……

とにかく、俺は小さくため息を吐き、

「……何の事です？」

そう言うと、ドイツ人女医は、苦笑し、

「春子より甥っ子の方が随分大人ね」

余計なひと言を言って、春子さんを激怒させようとするが、その前に春子さんを押し退け、

「デートする、しないにしても、まずは検査を済ませてからにしましょう」

そう言って、俺を触診し始めた。

簡単な診察で何ともないと言われた俺は、直ぐに病院を出る事になった。

まあ、健康体の人間には病院は無用だよな……

俺の場合は意志力不足で意識を失った事もあり、念の為病室で寝かされただけだが……あのままずっと寝ていたら……点滴とか打たれてたんだろうか？

そんな事を考えながら春子さんと美羽さんの後を付いて病院を出た。

小高い丘の上に建てられているのか、外に出ると少しだけ町を見回す事出来……？　……何だあれ？

視界に屋根の上に乗る何かが複数入り、距離があった為、それが動いている事ぐらいしか分からず、首を傾げたが……って！

またはぐれ！？

昨日の骸骨犬を思い出し、慌ててそれが何か確認しようとオウキを具現化しようとしたが、

（待って！）

サヤに制止され、背中から出てきた半透明のオウキが引っ込む。

何で止める！？

（確認するだけなら、全部具現化しなくても良いと思うわ）

全部具現化しなくていい？

（うん。『部分具現』でサーバントだけ具現化しましょ）

部分具現？　言葉通りなら、オウキの一部だけを具現化するって事か？　……そう言えば、昨日、オウキが骸骨犬から俺を守る時に腕だけ具現化していたな……あれは、自警団員の人が言ってた防御具現って奴じゃないのか？

（防御具現の部分具現よ）

なるほど……じゃあ、具体的にどうするばいい？

（具現化したいサーバントだけを強くイメージして、具現化していないオウキからサーバントを出させて）

……そんなんで部分的に具現化出来るのか？
（うん、そう。理解した？　納得した？）
……まあ、やってみるだけやってみるか……
俺が急に立ち止まった事に、不思議そうな顔をしている春子さんと美羽さんの視線に、ちょっと抵抗を感じながら、
「……セレクト、スナイパーサーバント」
俺がそうつぶやくと共に、背後から半透明のオウキが出て、その肩から巨大なスコープと耳の様に付いた尖った突起アンテナを持った小型円盤が飛び出し、俺の目の前で具現化した。
「うそ！　部分具現！？」
美羽さんが俺の部分具現に驚き、春子さんは目を見開いて驚愕。
そのあまりの驚きっぷりに、俺は思わず目を瞬かせた。
「春子さん！　昨日も聞きましたけど！　本当に夜衣斗さんって昨日初めて町に来たんですか！？」
「ええ……そのはずよ……」
ん？
……何だか……美羽さんと春子さんのテンションが微妙に違う様な……二人とも驚いている事は間違いないが、美羽さんはありありと興奮しているが、春子さんは……呆然と？
何に対して呆然……いや、愕然と？……としているのかよく分からないが……
（とりあえず早く確認した方が良いんじゃない？）
ん？　ああ！　そうだったな……
俺はオウキにスナイパーサーバントのスコープを離れた屋根に乗って動いている何かに向けさせ、その映像を俺に見せる様に思った。
オウキは素直に従い、スナイパーサーバントを動かし、その映像を魂のリンク？　で見せてくれた。
……何だあれ……
オウキが見せてくれた映像には、『小っちゃい髭のおっさん』がいた。

第一章『渇欲の武霊使い』5

スナイパーサーバントのスコープが見る光景には、いかにも大工ですって感じのおっさんが、壊れた屋根の数だけ……無数にいた。

みんな同じ姿で……昨日見た骸骨犬と同じ感じだが、人を襲う感じはなく、それの代わりなのか、屋根に出来た壊れた個所に向かって自分の身体より大きいハンマーを振るう。

するとハンマーが当たった場所が光り……ハンマーが退くと……え!?　……屋根の焦げが無くなっていた。

……なにあれ？

俺が武霊を通して何かを見ている事に気付いた美羽さんが、背中から半透明の赤いドラゴン……昨日、浜辺を通り過ぎる際に見た赤いドラゴンに乗った武霊使いは、彼女だったのか……を出して、スナイパーサーバントと同じ方向を見させて、

「あ～ようやく出てきた」

のほほんとそんな事を言いながら、半透明の赤いドラゴンを具現化させず、背中に戻させた。

と言うか、何でそんなに呑気なんだ？

「……えっと、あれってはぐれじゃないんですか？」

その俺の問いに、美羽さんは少し驚いた顔をして、

「何ではぐれって言葉を知ってるんですか？」

何でって……

「……あれだけ大々的に放送してたら誰だって分かりますよ」

「そうですか？」

「……ええ」

「ん～」

いまいち釈然としてない感じの美羽さんは、

「とりあえず、『あれ』ですけど」

そう言って小っちゃい髭のおっさん達がいる方向を指差し、

「はぐれかもれませんし、そうじゃないかもしれません」
そんな曖昧な返答に俺は困惑するしかなく、その様子を見た美羽さんは慌てて、
「えっとですね。あれは『源さん』って呼ばれている武霊で、元々は星波町の大工さんの武霊だったんですけど……その人、『レベル2』のはぐれに食べられちゃって」
食べられちゃって!?　ってかレベル2!?
（『第二段階』の事を言ってるのかしら？）
第二段階!?
（まあ、呼び方なんて意味が合っていればどうでもいいとは思うけど……）
なんだそりゃ？
サヤが意味深な事を言ってる間も美羽さんの説明は続いていて、
「その食べられちゃった日から、ああやって武霊によって町が壊された次の日にわらわらと現れて、壊れた個所を直し回る様になっちゃったんです」
……なんだそりゃ……訳が分からん……
「直す以外の事は何もしない無害なはぐれ？　ですから、気にしなくていいですよ」
……なるほど……サヤはどう思う？
（何とも言えないけど、この子が今ここで嘘を言ってもしょうがないと思うけど？　それに昨日みたいなのだったら、今頃サイレンとか鳴って、町中大騒ぎじゃない？）
……まあ、そりゃそうだな……
俺はようやく納得してスナイパーサーバントをイメージする事を止めた。
すると、スナイパーサーバントが霧散化し、跡形もなく消え去った。
スナイパーサーバントはその名の通り、狙撃用のサーバントで、もし源さんって武霊が人を襲うはぐれだったら、円盤の下に長大な

銃身を生成し、狙撃しようかとも思ってたんだが……杞憂に終わってよかったと言うべきか……

そんな事を思っていると、ぽ～っと美羽さんが俺を見ている事に気付き、少し驚いた。

流石にその意味が分からず、

「……何か変な事でもしましたか？」

って、聞くと、首を横にぶんぶん振るって、

「いえ！　その！　凄いな！　って思って！」

ちょっと興奮気味に……今までの俺の人生の中で一度も聞いた事がない言葉を言われ……大いに戸惑ってしまう。

俺が戸惑っている間も、美羽さんは言葉を続けていて、

「普通、武霊使いになるには、この町に一ヵ月以上いないといけないのに、来て直ぐに武霊使いになった上に、自警団ナンバー２の武霊を、しかもはぐれ化した状態のを倒しちゃうし」

ナンバー２!？　昨日の武霊の事だよな……

（でしょうね）

だよな……そんな武霊に俺は襲われたんか……良く生きてたな……俺。

（武霊は、武霊使いがいないとその本来の力を発揮出来ないから、それで勝てたんだと思うよ？）

武装しているイメージの基が無いから？

（そう言う事。理解した？　納得した？）

……ん～……幸運何だか、不幸何だか……

「二日連続って今までにないはぐれ発生と、ゴールデンウィークで武霊使い不足で苦戦していたはぐれもまとめて倒しちゃうし」

？　……そんな事したか？

（襲い掛かってきたはぐれは撃退したと思うけど……）

だよな？

「武霊だって、武霊使いになって直ぐの人は、普通は直ぐには自由に具現化出来ないはずなのに、その上、武霊使いになってもう五

年以上経ってる美羽だってちょっと苦手な部分具現をこんなにあっさりしちゃうなんて……」

？　……そんなに難しいのか？　部分具現って？

（さあ？）

さあ？　って……

（武霊の事は知識として知っていても、実際に見たのは昨日が初めてだもの）

知識として？　……誰に教わったんだ？

（それは――）

サヤが何かを言おうとしたタイミングで、

「もう！　ほんとぉ～に凄過ぎです！」

興奮がマックスになったのか、美羽さんがそんな事を大声で言い、あまりの大声に俺は周囲を見回してしまった。

……一応人は周囲にいないが……

「凄いです！　凄過ぎなんです！」

と連呼する美羽さんに、ただただ困惑するしかない。

俺があまりにも困惑していたのか、

「美羽ちゃん。夜衣斗ちゃんが困惑してるわよ」

と春子さんが苦笑して助け船を出してくれた。

「え！？　あ！　す、すいません。美羽ったら、一人で興奮して……ごめんなさい」

「……いえ……」

……なんだかな……

「それにしても……」

不意に、暗いトーンで春子さんが、

「本当に武霊使いになっちゃったのね……」

そう言って、悲しそうな、辛そうな顔になった。

「ごめんね夜衣斗ちゃん。来て早々にあんな目に遭わせてしまって……こんしかなかったとは言え……こんなに早くこんな事になるなんて……」

ここしかなかったね……それは確かにそうだが……ニュアンスが何か、ちょっと違く感じないか？

（そうね……）

まあ……俺もいまいち現実感を感じてないしな……現実だとは分かっていても……

「春子さん。そんなに自分を責めないでください。どうしたって『忘却現象』の影響で、外の人にこの町の現状を伝える事が出来ないんですから……」

会って直ぐの妙なテンションとは明らかに違う、急に暗くなった春子さんをちょっと戸惑いながらフォローする美羽さん。

……って言うか、忘却現象？　……？　……サヤ？　……だんまりって事は知らない事か、言えない事か……まあ、何であれ、名前と話からして、武霊の事が世界中に伝わってない原因か？

そんな事を俺が思っている間に、フォローされてしまった春子さんは少し苦笑して、

「それもそうね……ところで美羽ちゃん、夜衣斗ちゃんにちゃんと自己紹介した？」

第一章『渇欲の武霊使い』6

春子さんの指摘に、一瞬、俺も疑問符を抱いたが、
「あ！」
と言う声に美羽さんの驚いた声に、俺は思わず苦笑した。
……そう言えば、俺も名乗ってないな……
「ご、ごめんなさい夜衣斗さん。バタバタしてて美羽の事を言うのを忘れてました！　って言うか、春子さんもでしょ！」
「え？　私は別にいいんじゃない？」
キョトンとする春子さんに、美羽さんはちょっと怒った顔になって、
「あのですね。自己紹介を忘れた美羽が言うのも何ですけど……これから少なくとも二年近く一緒に住むんですから、こういう初めの事は大事だと思います」
「そう？　数日前に電話でちょっとだけ話したし、お互いの顔だって写真で見てるわよ？　ねえ？」
不意に俺に話を振って来たので、俺は思わず頷いてしまう。
「駄目です！　とにかく自己紹介をしましょう！」
……ん～……今更って感じもしなくもないが……
ちらっと春子さんと前髪越しに目を合わし……どちらともなく、
「黒樹春子です。あなたのお母さんの妹で、黒薔薇春のペンネームで少女漫画を描いてます」
「……黒樹夜衣斗です。あなたの姉の息子で、高校二年になります。……これから二年間よろしくお願いします」
「はい、よろしくお願いします」
……なんだこれ？
「って、美羽は、春子さんの家の隣に住んでいる赤井家の一人娘。『赤井（あかい）　美羽（みは）』です」
そう名乗って、背後から再び半透明の赤いドラゴンを出し、

「この子は『コウリュウ』。美羽の武装守護霊です」
コウリュウ……そんまんまなネーミングだな……ん？　コウリュウ？
俺は改めてまじまじとコウリュウを見た。
二本の角を生やした、怖いと言うよりカッコいいイメージの頭部に、長い首と繋がる人の様な胴体。そして、前足……と言うより腕と、腕とは別に背中に翼。
一般的なドラゴンのイメージより人型に近い……ある作品で見た事があるドラゴンの姿だった……えっと、確かその作品の名前は……
「……もしかして、児童小説の『赤竜物語』に出てくるコウリュウ？」
思わず聞いてしまった俺の問いに、美羽さんは嬉しそうに頷き、
「はい！　美羽の武装守護霊はその赤竜物語の主人公ドラゴンが基になってます。私、昔っから赤竜物語が大好きで、そのせいか武装守護霊もコウリュウになっちゃったみたいなんです」
なるほど……武装守護霊は想像で武装する霊体ってサヤが言っていたな……俺の武霊も子供の頃から考え続けてきたオウキだし、昨日ちょっとだけ浜辺で見た武霊達の姿から考えると……その武霊使いの『人生の根幹となったイメージ』で武装するのか？
（うん。大体合ってるよ）
大体？
サヤが意味深な言い方をした事に、俺は疑問を抱くが、その問いを考えるより早く、美羽さんが気になる言葉を口にした。
「って、春子さんとは、春子さんが星波町にやってきてから十年近く家族ぐるみで『お世話しています』」
なるほど、お隣さんか……だから、俺の名前を春子さん経由で知っていた？　……ん？　……今、変な事を言わなかったか？
（言ったわね）
「み、美羽ちゃん」
何だかまずい事を言われたって感じで、春子さんが小さな抗議の

声を上げた。
「え？　何かいけなかったですか？」
抗議の意味が分かっていな感じの美羽さんは、春子さんに小首を傾げた。
……何か怪しいと思ってたが……
「だって春子さん。全然家事が出来ないじゃないですか」
家事が出来ない？
「……どう言う事です？」
俺の問いに、美羽さんは小首を傾げ、
「春子さんがこっちに引っ越してきた頃に、春子さんが借りた借家を、ちょっとしたゴミ屋敷きにしちゃったんです」
じろっと春子さんを見ると、春子さんは思いっきり目を、っと言うか顔を逸らした。
「軽い騒ぎになっちゃって、家主さんは怒るわ、春子さんは泣き出すわで、大変でしたよ」
……
「っで、あーだこーだしている内に、美羽のお母さんが春子さんのお世話をする事になって。そこから、もうなんだか、手のかかる妹が出来たみたいだってお母さん言ってました。美羽も、本当の姉みたいに接して貰ってますし……」
聞いてないな……そんな話……
「……母は、春子さんの事を社会人として駄目な分類に入るけど、自立した女性だからって言ってたんですけどね……」
そう言いながら、俺はズボンのポケットから携帯電話を取り出し、
「や、夜衣斗ちゃん？　どこに電話する気？」
「……母に」
「ぎゃー！　駄目！　駄目！」
母親の携帯にリダイヤルしようとして、物凄いスピードで春子さんに抱き付かれた。
女性の匂いはするわ、胸が当たってるわ、脳みそ大混乱。

「姉さんには報告しないでぇ～今の生活を知られたら、私、姉さんに殺されるぅ～」

……どんなイメージだ。そんな人じゃないぞ。うちの母親は……

……多分。

「別に大変じゃないですから、気にしなくていいですよ」

と苦笑しながらそう言う美羽さん。

そう言われてもな……これから、春子さんじゃなくて、お隣とは言え、赤の他人の美羽さんのご家族にお世話になる事になるって考えると……はあ、無茶苦茶気が重いし、恥ずかしい……

「とにかく！」

携帯電話を春子さんに奪われ、俺からダッシュで離れ、

「二人はこれからデート！　暫く帰ってくんな！」

と捨て台詞を吐いて、どこぞへと逃走。

……

「えっと……」

困った様に俺を見る美羽さん。

……まあ、とりあえず、

（デート？）

ちゃうわ！

何故かエセ大阪弁でサヤの言葉を返しながら、

「……星波町の案内をお願いできますか？」

「え？　あ！　はい」

第一章『渇欲の武霊使い』7

俺は過去に受けたいじめの影響で、他人に対して恐怖を感じている。

だから、なるべく目線を合わせない様に前髪を伸ばして目を隠し、基本的に必要と感じなければ口を開かない。

要するにつまらない男なわけだが……

「春子さんの甥っ子さんが来るって話は聞いてたんですよ。と言うか、聞いちゃって、本当はゴールデンウィークに旅行に行くはずだったんですけど、春子さんじゃ転居手続きとか転入手続きとか出来ませんから、お母さんが代わりにやらなくちゃいけなくって、引っ越しの手伝いも美羽達がしたんですよ？　ところで、夜衣斗さんの荷物って、いっぱいありましたけど、あれ、何が入ってるんです？」

こんな感じで病院を出てからずっと俺に話し掛けてきてくれている。

話し掛けられて、他人が苦手だからと無視が出来るほど神経が図太くないので、少し考えて、

「……俺の部屋に在った漫画とか小説とかです。急な引っ越しだったんで、選別する暇がなくって、面倒だからって母が全部送ってしまったんですが……ご迷惑を掛けてしまったようですね。すいません」

「いいえ、気にしないでください」

そうにっこり笑う美羽さんに、いちいちドキリとする。

こんな風に女の子と一緒に歩いた事も、話し掛けられた事も、喋った事も、こんな距離でこんなに長い間いた事が無い。

昨日感じたあらゆる緊張と全然別物の緊張感に、声が震えてないか、生唾を飲んでないか、変な所に目線を向けてないか、もう訳が分からないほどぐるぐる考える。

そんな俺に気付いているのかいないのか、
「あ！　言い忘れましたけど、美羽の事は美羽でいいですから」
……へ？　……いや、まあ、最初に名前を知ったから、心の中では既に名前で呼んでしまってるけど……
「……えっと……」
異性に対して名前で呼んだ事など……幼い頃は在ったかもしれないが……流石に戸惑うしかない。
俺の戸惑いに対して、美羽さんは微笑んで、
「これから家族ぐるみの付き合いになるんですから、名字だとおかしな事になると思いますよ？　それに、美羽だって、もう夜衣斗さんの事を夜衣斗さんって名前で呼んじゃってますし」
……それは確かにそうだが……本当に赤の他人の家族と付き合う事になるのか……
何とも言えない気分になりつつも、
「……分かりました」
とりあえず同意する事にした。
まあ、断る理由が無いからだが……どうなんだろうか？
そんなやり取りをしながら、俺は美羽さんの案内で町役場に辿り着いた。
美羽さんの話では、星波町案内をしてくれることになった武霊使いになった者は、まず最初に町役場で公式登録をしなくてはいけない事になっているらしい。
美羽さんの口ぶりからすると、星波町で武霊が発生する様になってから、少なくとも五年以上は経っているらしく、それぐらい前に武霊と色々な仕組みが出来るのは分かるが……どれくらい前に武霊は発生する様になったんだろうか？　……まあ、なんであれ。
公式登録は町が武霊使いの数や能力を把握する事で、色々なケースに対応しやすくする為だとか。
その事を聞いた俺は、ふと昨日見た浜辺の武霊使い達の事を思い出し、美羽さんにその事を聞いてみた。

すると、あの時見たほとんどが自警団ではなく、美羽さんを始めとする自警団が協力を要請した登録武霊使いだったらしい。
昨日浜辺で見た武霊使いの数は、ゴールデンウィーク中だって言うのに、多い様な気がしたんだよな……
もちろん、武霊使いの公式登録は、そう言う思惑以外にも、多分、武霊使いが犯罪を犯した時とか、その抑制も考えられているんだろう。
もっとも、そんな色々な思惑がある公式登録だからか、当然その事に抵抗感を覚える武霊使いも居る様で、それらをある程度軽減させる為に、町は公式武霊使いになった者には様々なメリットを与える様にし、その制度が取り入れられる様になってから公式武霊使いが急増したとかなんとか……
どんな環境でも人は現金と言うか何と言うか……と言うか、ふと気になったが、
「……ゴールデンウィーク中でも役所が開いてるんですね……」
そう疑問を口にすると、先を行っていた美羽さんは立ち止まって小首を傾げた。
まあ、これが彼女にとっては当たり前なんだろうが……
「……普通、役所が休みの日に開いている事なんてないでしょ？」
「そうなんですか？」
……まあ、俺もそんなに役所に用がある訳じゃないから、何とも言えないが……少なくとも、
「……テレビなどで見た限りじゃそうでしたが……まあ、武霊なんて言う特異過ぎる存在がいるのですから、休んでられないって言うのが実情かもしれませんね……」
そんな事を俺が行った時、町役場から一人の女性が杖を突いて出てきた。
大きめのサングラスを掛けた着物姿のその女性に、美羽さんは見覚えがあるのか、声を掛けようとする仕草をした時、
「あら美羽さん。こんな所で何をなさっているのですか？」

美羽さんより早くそう言って、こっちに近付いてきた。
「そう言う弥恵先生こそどうして役場に？」
先生？
「私は夫にお昼ご飯を届けに来たのですよ」
美羽さんの問いに、微笑みでそう答え、俺の方に顔を向け、
「転校生の方ですか？」
「え？　……ええ」
急にそんな事を問われ戸惑うしかない俺は、とりあえず頷く。
そんな俺に先生と呼ばれた女性は再び微笑んで、
「私は星波学園高等部教師・『高木（たかぎ）　弥恵（やえ）』と申します。こちらの赤井美羽さんが所属する部活の顧問をしているので、思わず声を掛けてしまいました」
そう丁寧に挨拶されれば、こちらも返さない訳にはいかないよな……
「……俺は黒樹……夜衣斗です。仰る通り今度星波学園に転校する事になってます」
「やっぱりそうですか。ゴールデンウィークに入る前に、急遽転校生が来るって話がありましたから、若い知らない気配にそうじゃないかと鎌を掛けてみました」

鎌を掛けてみましたって……ん？　と言うか、若い知らない気配？　何か言い方が変じゃね？　そもそも、

「まだクラスが決まってないようですが、私は二年のクラスも担任していますので、もしかしたら私のクラスになるかもしれませんね。そうじゃなくても、授業で会う事になるでしょうけど」

そう言ってにっこり笑う高木先生に、俺は考えるのを止めて頭を下げた。

「……よろしくお願いします」

「はい。これからよろしくね」

そう言って微笑む高木先生。

ふとその掛けているサングラスが気になった。

何故なら、そのサングラスは全く光を通しそうにないほど黒く……更にそのサングラスの横から僅かに見える傷跡が――

「気になりますか？」

不意に、そんな事を言われ、俺はドキリとした。

まるで俺の考えを読んだかの様なタイミングだったからだが……とにかく、失礼な事を俺はしたよな、

「……すいません」

「ふふ、慣れていますから構いませんよ」

謝る俺に高木先生は優しく微笑んで、

「私、幼少の頃に両目の視力を失うほどの事故に遭っていまして……この下にはとてもこの場では見せられない様な傷痕があるのですよ」

その説明に、俺は困惑するしかなかった。

何故なら、役場から出て来て、こっちに来るまで、杖を突いているとは言え、とても盲目の人間とは思えないほど自然な動きだったからだ。更に言えば、俺の事を知らない人物だと分かった事も疑問

に拍車を掛けているが……

その困惑も高木先生は慣れっこなのか、俺が疑問を口にするより早く、

「両目を失ったと言っても、私は特殊な訓練を積んでいますので、気配などで……視力以外の五感で人物を特定し、ある程度空間を把握することが出来るのですよ。ですからこんな風に、」

そう言って、俺の頬に触れるか触れないかの位置に手を移動させて、撫でる様に動かした。

「する事も出来るのですよ」

あまりにも不意にそんな事をされた為、思わず顔が赤くなる俺。

そんな俺の反応も感じ取る事が出来たのか、悪戯っぽく微笑んだ高木先生は、

「さきほど夫の休憩が終わった所ですから、武霊使い登録は直ぐに終わると思いますよ」

そう言って俺から離れ、

「それではお二人とも、休み明けに学園でお会いしましょう」

町役場から離れて行った。

その歩みは、やっぱりとても盲目だとは思えないな……まあ、あの場で嘘を吐いても何の得にもならないだろうから本当なんだろうが……だとすれば驚異的な事だよな……

（本当にそうね。まるで漫画みたい）

確かにな……現実にあんな人がいるなんて……世の中は広いって言うが、本当に広いんだな……まあ、武霊なんて存在を先に体感したせいか、驚きは少ないが……そう言えば、何で俺が武霊使い登録をしようとしてるって分かったんだ？

そんな疑問を思った時、美羽さんが高木先生の背中を見ながら、

「高木先生。学園の教師陣の中で最強の『装備型武霊使い』って言われている人なんですよ」

そんな事を言ったが……なるほど同じ武霊使いだから、俺が武霊使いになってるって分かったのか？　……まあ、確かにここに来る

までにすれ違った人と美羽さんや高木先生になんか今まで感じた事が無い違和感の様な物を感じた様な気が……と言うか、装備型？
……サヤ？
（さあ？）
さあ？　って……これも知らないか、言えない事か……
俺が困惑している事に気付いたのか、美羽さんが慌てて、
「えっと、装備型って言うのはですね。夜衣斗さんの武霊……そう言えば、なんて名前か聞いてませんね？」
そう言えば言ってなかったか……
「……オウキです」
「へぇ～オウキって言うんですか……騎士みたいでカッコいいですよね。アニメか何かのキャラなんですか？」
「……いいえ……その」
「はい？」
何か王継戦機の事を言うの恥ずかしいな……考えて見れば、人に王継戦機の事を話した事は僅かしかない様な……まあ、話さないと話が進まないよな……
「……俺が子供の頃から考えていた物語の主人公ロボットなんです」
俺の言葉に、美羽さんが目を見開いて驚く。
「じゃあ！　夜衣斗さんのオウキは『オリジナルタイプ』なんですね！　凄い！　やっぱり凄いです夜衣斗さん！」
す、凄い？
美羽さんが何を凄いと言っているか分からず、俺が激しく困惑していると、
「ほとんどの武霊使いは、美羽のコウリュウみたいに何かしらの基があるんです。小説だったり、アニメだったり、飼っていたペットだったり、それが普通なんです。でも、中には夜衣斗さんみたいに自分で作ったイメージが基になった武装守護霊も在って、そう言う武霊はどれも強力な武霊になるんです」

な、なるほど……考えて見れば、自分の人生の根幹になる様なイメージを自ら作る人間ってそうはいないよな……普通は、何かしらの既にある作品とか人物とかがそれになるだろうし……更に考えれば、それもない人もいない事は無いよな……

「えっと……それで装備型武霊ですけど、私達みたいな自分で動く事が出来る武霊と違って、武霊使いが身に付けたり、使用したりしないと使えない武霊の事をいいます」

……それってつまり、

「……道具の形をしているって事ですか？」

「はい。その通りです。もっとも、そんなに数がいない、オリジナルタイプほどじゃないですけど、珍しいタイプなんです」

なるほど……

「ちなみに弥恵先生の武霊は、弥恵先生が持っていた『仕込み杖』です」

仕込み杖！？

「……それって○頭市とかが持っている？」

「はい。それです」

……武霊だが、初めて生でそんな物を見たな……

「しかも、ただの仕込み杖じゃありませんよ」

ただの仕込み杖じゃない？

「空間を切り裂いて、遠くの場所に瞬時に移動したり、遠くにある物を呼び寄せたり、特定の事象？　を斬り取って、無かった事に出来たり、もう、とんでもない武霊能力を持ってるんです」

……なにその出鱈目な能力……

「更に弥恵先生自身も、居合の達人みたいで、仕込み杖を抜いたと思ったら、もう納刀してて、暴れ回っていた武霊使いの武霊を瞬時に霧散化させちゃったこともあるんですよ」

若干興奮気味にそう語る美羽さん。

……にわかに信じられない話だが……武霊なんてものが存在するんだ。盲目なのに自然に歩いていた事も重なって、その事を信じざ

る得ないが……何か、星波学園に通うのが嫌になって来たな……

（どうして？）

どうしてって……教師でさえそんな漫画みたいな人がいるんだ。

他にどんなのがいるかわかったもんじゃないだろ？

（それもそうね……でも、今の先生、いい先生ぽかったよ？）

……どうだろうな？　人は表面だけ見ただけじゃ分からない事が多いし、もしかしたら、どんでもない人かもしれないだろ？

（考え過ぎよ）

……まあ、そうだよな……

第一章『渇欲の武霊使い』9

町役場から少し離れた、夜衣斗達から見えなくなった所で、高木弥恵は不意に立ち止まり、近くにある誰もいないバス停に顔を向けた。

「……何をしているの？　そんな所で」

何もない空間に弥恵が声を掛けると、

「「かないませんね」」

何もないはずの空間から人工音声が発せられた。

「私に」

弥恵は自身が持つ杖を持ち、中に仕込まれている刀身を少しだけ見せた。

「その程度の隠形が意味のない事を分かってしているのでしょ？」

「「ええ」」

弥恵はため息一つ吐き、杖を戻し、

「何の用？　私達二人が『あいつ』がいない場所で会っていたなんて……気付かれたら、後が面倒よ？」

「「大丈夫です。気付かれない様に工作は重々していますから」」

「そう……あなたがそう言うのだから、本当に大丈夫なんでしょう……それで、何の用？　工作なんて手間を掛けたのだから、重要な事なのでしょ？」

「「実は……『我々に対応するかもしれない主人公候補』を見付けました」」

その言葉に、弥恵は一瞬驚き、直ぐに深いため息を吐いた。

「あなたの事だから、誰よりも早く見つけるとは思っていたけど……少し早すぎる気もするわね……誰なの？」

その問いに、人工音声は答えない。

不自然な沈黙に弥恵は眉を顰めたが、直ぐに何かに気付く。

「まさか！　彼が！？」

「「はい」」
と同意され、弥恵は眉を顰める。
「……この事をあなたの『お気に入りの主人公』は知っているの？」
「「まさか……伝えられるわけがないでしょ？」」
「知らないわよ？　後で激怒されても」
「「それは怖い」」
弥恵は再びため息を吐き、
「……中々私達に対応する主人公が現れないと思ったら……まさか『あなたが導く』為だったとはね」
「「いいえ」」
即座に否定された弥恵は、先程より強く眉を顰める。
「「僕に主人公を『創れる』ほどの力はありませんよ」」
「創れる？」
人工音声の意味深な言葉に、弥恵は少し考え、
「まさか！　『彼』は、『私達と同じ』……『運命選択付与者』！？」
ありえないと思いつつそう口にすると、
「「はい。何の選択を与えられたのかは分かりませんが、それは間違いないと思います」」
「そんな！　……だって、それを出来る師は……」
「「どういう経緯で、いつ付与されたのかは不明ですが……少なくとも『世界拒絶者』である事は間違いない様です」」
「『無の祝福』は？」
「「流石にそれはありませんでした」」
「そう……そうよね……でも、世界拒絶者なら……今の今まで『普通に生きていた』以上、もう間違いないわね……でも、どうするの？　世界拒絶者で運命選択付与者と言う事は、『私達より確率が低い』とは言え、『私達と同じ様に負ける』可能性もあるって事よ？　そうなったら……」

「「ええ、ですから……少し、無茶なお願いがあるのですが……」」

躊躇いがちな人工音声の提案に、弥恵は少し驚いた。

何故なら、人工音声を使っている相手が、弥恵に頼みをした事など、出会ってから二十数年一度もないからだ。

つまり、それほど無茶なお願いをしようとしている。

「言って御覧なさい」

弥恵は苦笑しながらそう促すと、人工音声を使っている相手は、意外な、だが、考えてみれば当然な願いをし、

「それは……なんの皮肉なのかしらね？」

そう自嘲めいた笑みを弥恵に浮かべさせた。

星波町の町役場は、それなりの大きさがあった。

今日はゴールデンウィークが残り二日である為か、人もそれなりに中におり、役場の人間がそこそこ忙しそうにしていた。

そんな中を、美羽さんは福祉課と書かれているカウンターの前に行くと、そこには一人の女性とその女性に対応している福祉課の人が居て、

「あ！」

と美羽さんが驚きの声を上げた。

その声に気付いた二人がこっちを見ると、女性は美羽さんを見て力なく微笑み、俺を見て少し驚いた様子を見せた。

「えっと……夜衣斗さん。この人は……昨日……」

何故か言いにくそうな美羽さんの隣に女性は移動して、真っ直ぐ俺を見て、

「私は田村遼の妻です」

そう言った。

田村遼？　誰だ？　……って、このタイミングから考えると、

「……剛鬼丸の武霊使いだった人の？」

そう聞くと、女性は少し不思議そうな顔をして頷き、美羽さんは驚いた顔になり、

「美羽、田村さんの名前を夜衣斗さんに教えましたっけ？」

小声で俺にそんな事を聞いてきたので、正直に、

「……消去法でそう思っただけです。この町で名乗られていない人は、あの人しかいませんから」

小声でそう答えると、美羽さんは感心した様子を見せたが、

（結婚してたのね、あの人）

意外と思うのは失礼な事だよな……

「今朝、夫のお見舞いに行った時には寝てらしたのに……もう回復なさったのね……少し驚いたけど、ある意味、丁度良かったかしら？」

言葉の最後は呟く様に言って、福祉課の人を見た。

福祉課の人は、携帯電話をパソコンに繋いで何やら操作している。

今気付いたが、胸に付けている名札に『高木（たかぎ）　鋼（はがね）』と書かれていた。

……なるほど、この人が高木先生の旦那さんか……なんだかほんわかした癒し系デ……ふくよかな容姿をしているな……

そんな事を思っていると、作業が終わったらしく、高木さんが俺を見る。

「君が黒樹夜衣斗君だね？」

そう問われたので、俺は頷くと、近くにいた他の職員が一斉に俺を見た。

な！　……何なんだ！？

俺が困惑していると、高木さんは苦笑して、

「昨日の今日だから自覚はないだろうけど、君はもう既にかなりの有名人だよ」

へ？　俺が？　ゆ、有名人！？

第一章『渇欲の武霊使い』１０

高木鋼の言葉に、夜衣斗は酷く困惑した事に、赤井美羽は少し困った。

実は、美羽が今朝起きた時には、公式武霊使いに渡される特殊な携帯電話『星電』で見る事が出来る動画サイト『星波動画』に昨日の夜衣斗の活躍がアップされていた。

その時は、それほど動画の数も、賢覧数も少なかったので、特に気にもしなかったのだが、鋼の言葉に改めて星波動画を確認すると、物凄い数の動画投稿数と賢覧数になっており、自分の考えの甘さに美羽は申し訳ない気分になった。

さきほど美羽自身が夜衣斗に言った通り、夜衣斗は凄い事を、これまでの星波町が経験則で積み重ねてきた常識を覆す事をした。

一ヵ月以上星波町にいるか通わないと、武霊が人に憑かず、武霊使いになれないとされていたのに、たった一日、詳しく調べれば、たった数時間で武霊が憑き、更に武霊まで具現化させた。

武霊使いになったばかりの武霊使いは、具現化したばかりの武霊を上手く操れないはずなのに、自在に操り、それどころか、はぐれ化したとはいえ、武霊使いとして猛者ばかりいる星波自警団のナンバー２の武霊使いの武霊を倒した。

更にそのタイミングが、『一週間以上間が空くはずのはぐれ発生』の二日目だった事が重なれば、否応なしに注目度は高まる。

そんな事になれば、見るからに注目される事になれていない夜衣斗はどうなるか、火を見るより明らかで、周囲の視線が自分に注がれている事に、完全に委縮しながら武霊使いの公式登録をする夜衣斗。

他の武霊使い（美羽）の証明から、登録用紙に必要な情報を書き、夜衣斗の顔写真を撮り、所有武霊を具現化させて写真撮り。

具現化したオウキに、周囲がどよめくと、その反応に動揺したの

か、一瞬、具現化が解け掛け、慌てて集中して具現化を維持。
美羽が昨日目撃した剛鬼丸と戦う夜衣斗の姿とは全く違うその、ある種微笑ましい夜衣斗の姿に、美羽は思わずクスリと笑ってしまう。
（凄い武霊使いだけど、案外可愛い人なのかも）
初めに受けた印象が高かった為か、そんな好印象を美羽が抱いた事を知らず、夜衣斗はただただ赤面した。

星電は正式名称『星波町限定携帯電話』と名付けられている『星波町内で全てが完結している携帯電話』らしく、登録武霊使いに町から貸し出されているものらしい。
具体的な説明は受けなかったが、どうやらと言うかやっぱりと言うか、さっき美羽さんがちらりと言った忘却現象のせいで、星波町から外に武霊に関する知識とか物証とか持ち出せないのだろう。じゃなきゃ、星波町内で全てを完結させる必要性なんて無い。
これを使って、町や自警団は、はぐれ発生とか武霊によって起きた町の状況の変化とかを武霊使いに知らせ、星電同士でも普通の携帯電話同様に通話可能で、その他にも町から出るはぐれを倒した武霊使いに支払われる報奨金などもその星電に振り込まれるとの事。
報奨金が出る事にはちょっと驚いたが、要するにこれが公式武霊使いになる事で生じるメリットの一つなんだろう。
人間、どんな時でも金は大事だし……まあ、ちょっと残念なのが、その『星電マネー』と呼ばれる電子マネーは、当然と言うか何というか、星波町内でしか使えない事だろうか……多分、それも武霊の事が星波町の外に出ない理由に関わってるんだろうが……誰も説明してくれないんだよな……忘却現象ってどんな現象なのさ……まあ、話を聞く限り、武霊使いになる人間は、そもそもそんな説明がいる人間じゃないはずだから、説明する事に慣れてないのだろうが……ん～……まあ、町の案内途中で説明してくれる事を期待するしかな

いな……流石にこんなに注目を集めている場所で質問する勇気は俺に無い。

それにしても……その星電で使える専用の動画サイト……星波動画？……は、プライバシーとかそう言うのが関係なく出回っちゃう代物なんだな……これ、絶対、色々と問題になってるだろうな……と言うか……

腕を組み、片手で口を覆い、鼻だけでゆっくり深呼吸をして、少し考え、

「……さっき見せてくれた動画、色々なアングルから撮られていますね……武霊使いって町全体にどれくらいの数がいるんですか？」

そう美羽さんに質問するが、美羽さんは、

「えっとぉ～」

と困った顔になり、それを見た再びパソコンを使って携帯電話ではなく、星電を操作していた高木先生の旦那さんは、

「大体千人ぐらいかな？　公式登録しているのは」

公式登録しているのは？　……確か、引っ越す前に事前に調べた情報では……

「……星波町の今の人口は約一万人ぐらいでしたよね？」

俺の言葉に、高木先生の旦那さんは少し驚く。

「よく知っているね」

「……引っ越す前に町のホームページを見ましたから……十分の一と言う割合は幾分少ない気がしないでもないですね……」

素直な俺の感想に、高木先生の旦那さんは苦笑して、

「まあ、確かに武霊使いになった人、全てが武霊使いになったと公言してくれるわけじゃないからね……人によってはもう千人ぐらいいるんじゃないか？　って言っている人もいるよ」

公式登録すると、色々と利便もあるが……星電マネーとか、その分、面倒な事もあるんだろう……全員が全員、望んで武霊使いになりたいわけでもないだろうし、なったらなったでなれなかった者達

からどんな事を思われるか分かったもんじゃない。
周囲から集まる視線が、好意的な物から否定的な物まで、良くも悪くも入り混じっている事ぐらい、人の視線を受け慣れていない俺でも、それぐらいは分かる。
思わずため息が出そうになる俺だったが、
「まあ、そうは言っても、武霊使いの数に関して言えば、星波学園の方が圧倒的に多いからね」
そう複雑そうな表情で美羽さんを見る高木先生の旦那さん。
視線を受けた美羽さんは、同じ様に複雑そうに頷いて、
「ええ、星波学園は教職員を併せて大体三千人ぐらいですけど、その内の半分が武霊使いですから……」
高木先生の旦那さんと美羽さんの町と学園を分けた説明に、俺はピンとくるものがあったので、
「……町と学園は対立関係にでもあるんですか？」
思った事を口にすると、美羽さんは慌てて、
「い、いえ、別に対立してるってほどの対立はないんですけど……公式登録だって、ちゃんと町が出張してやってますし……」
なるほど……
「……出張ですか……微妙な関係と言ったところですか……」
俺は思わずそうつぶやいて、大きなため息を吐いてしまった。
やっぱり学園に通いたくないな……
（夜衣斗なら、どんなトラブルが起きても大丈夫だって）
トラブルが起きるのはサヤの中では確定なわけね……
（言ったでしょ？　今の夜衣斗は色んな運命を引き寄せやすいって）
だったな……まあ、あんなに有名になって何のトラブルも引き寄せないって事は……無いよな……全くなんでこんな事になったんだか……数日前の俺からしたら絶対に妄想は出来ても、想像は出来ない状況だよな……

第一章『渇欲の武霊使い』１１

公式登録は思いの他早く終わり、最後に星電が俺に付与された。
「星電はその限定性から町の予算のみで完全に作らなくちゃいけないものでね。年々増加傾向にある武霊使いの数に常に在庫不足なんだよ」
そう言いながら、元田村さんの星電を俺に渡してくれた。
「だから、今回の様に武霊使いではなくなった人から返却の際は、返却者から新たな付与者を指名してもいいことになっていてね」
その高木先生の旦那さんの言葉に、田村さんの奥さんは微笑んで、
「あなたが武霊で治療してくれたから、夫が死なずに済んだわ。だから、あなたに夫の星電を受け取ってほしかったの……きっと、夫も目を覚ましたらそうしたと思うから……」
そう言っていた。
赤井さんが次に案内してくれると言う場所に向かいながら、俺は貸された星電をいじりつつ、田村さんの奥さんの言葉を少し考えていた。
で、
「……昨日のはぐれ……発生でしたっけ？」
「え？　あ！　はい！」
俺の唐突な言葉に、美羽さんは少しびっくりした様子を見せ……
そんなに驚かなくても……何か考え事でもしていたのだろうか？

夜衣斗の読み通り、美羽は考え事をしていた。
あれだけ有名になってしまった夜衣斗が、明日の学園でどういう扱いになるか、美羽は少し不安になっていた。
何故なら、学園には武霊使いの数が町よりも多いという事もあり、『学園独自のルール』が『学生主導』で存在しており、

（夜衣斗さんの場合って、『逆鬼ごっこ』はどうなるのかしら？）

特に武霊使いになったばかりの者に関わるルールの事を美羽は気にしていた。

（直ぐにやらきゃいけないルールだったけど、いくらなんでも転校してきた初日にはやらないでしょうし……でも、『あの女』ならやりかねない？　うんん。でも、）

そんな風にぐるぐると考えている時に、意図せずに不意打ちの様に夜衣斗が声を掛けてしまった為、若干間抜けな感じで返事をしてしまい、恥ずかしさを誤魔化す為に、美羽は素早く、

「ええ、はぐれ発生でいいんですよ。それがどうかしましたか？」

そう言うと、夜衣斗はやや面食らった様な雰囲気になり、少し長めに間を開け、

「……昨日、はぐれがイレギュラーで発生したって聞きましたが……もしかして、それで治療系の能力を持つ武霊使いが足りなくなってるんですか？」

その問いに、美羽は目を見開くほど驚いた。

何故なら夜衣斗が起きてから、一言も口にしてない『事実』を言い当てたからだ。

「ええ、確かに、医療系の武霊使いは足りてませんけど……」

美羽が夜衣斗の質問に戸惑っていると、

「……ゴールデンウィークで人が大分出ているみたいですからね……さっきの田村さんの奥さんが、夫が死なずに済んだって言った事を考えると、そう考えるのが自然だと思いまして……」

どうしてそう思ったのかを説明してくれたが、だからと言ってそう簡単に行き着く予想なのか、自分の事をそれほど頭のいい人間じゃないと思っている美羽には分からなかった。

「……田村さん以外の重症者は大丈夫だったんですか？」

「あ、はい。なんとか軽度な人や辞退した人以外は何とか足りたみたいです」

「……そうですか……」

美羽の返答に、どこか心配そうに押し黙る夜衣斗。
（もしかして、自分で治療しようとか考えてる？　ん～昨日今日で武霊使いになった夜衣斗さんにそんな無茶はされるわけには……意志力だってまだ完全に回復してないだろうし……）
そう思った美羽は、直ぐに
「えっと、多分ですけど、昨日治療できなかった人も、医療系武霊使いの意志力が回復次第治療されると思いますし、今日星波町に帰ってくる人だっていますから、夜衣斗さんはそんなに心配する必要はありませんよ」
そう言うと、
「……そうですか、それは良かった」
前髪で目を隠している為、美羽にはよく分からなかったが、少なくともほっとした雰囲気になったのは間違いなさそうだった。
（……それにしても、何で夜衣斗さんは前髪で目を隠しているんだろう？　……恥ずかしがり屋さん？）
そんな事を美羽が思っていると、視界に星波海岸から二番目にある星波大橋が現れる。
星波町の中央には星波川と言う名前の川が流れている。
そこには五本の橋が架けられており、最も山側にある小さな橋が『星波橋』。次に夜衣斗が乗ってきた星渡線の鉄橋。その次のにそこそこ大きいな『星降り橋』。その次の次がかなりの大きさを持つ『星波大橋』。最後に星波海岸沿いにある星波海道の『星波海岸大橋』。
もっとも、橋だけに限った話で言えば、星波学園と町を繋ぐ学園大橋もあるが、それはとりあえず説明を後回しにして、美羽は夜衣斗に橋の説明をしつつ、星波大橋のちょうど真ん中ぐらいで立ち止まる。
唐突に止まった事に不思議そうな顔になる夜衣斗に、
「この星波大橋って結構な大きさがあるでしょ？　だから、ここからなら町の主要施設の大体が見えるんです」

そう言って、美羽は主要な施設を指差して一気に説明し始める。
「進行方向上にある建物が町民センターで、その左側にあるのが保健センター。その手前の星波川沿いにあるのがスポーツ公園。保健センターより更に左側にある建物が福祉センター。そのもっと奥の方にある鉄塔が海側のはぐれ発生ポイントを監視する為のはぐれ監視塔。その更に奥にある建物がリサイクルセンター。向こうに見る線路を越えてもっと左側、星降り山の手前に焼却場。その更に奥の星降り山の中腹に廃校が見えますけど、ここに危険な人物が二人住み着いてますので、無暗に近付かないでくださいね。って、振り返って、後ろにさっき行った町役場に、左側に郵便局・手前の星波川近くに下水処理場。その左側に星波警察署。役所の右側に戻って、スタート地点の星波統合病院。そのさらに右側にそこそこの品揃えの星波デパート。そのちょっと右に星波駅。線路を越えた先に見えないけど、星波幼稚園とちょっと離れて星波保育園。星波駅のこっちから見たらちょっと奥に星波商店街。ここで大体の物は揃いますよ。その左側のちょっと行った先に星波神社。その更に左側に星電専用基地局。連絡の拠点ですから、はぐれとか戦う時にここを壊されてない様にしないといけないです。その更に左に星波公園。この公園より更に左に美羽と春子さんの家があって、その更に左側星波海道に面して消防署。その更に奥に昔自動車工場があった廃工場地帯と、星波海道を挟んで向かい側にその廃工場の倉庫と港。ここにはちょっとガラの悪い連中が溜まってますので、無暗に近付いちゃダメですよ。って、廃工場の右側ちょっと行った所に山側のはぐれ監視塔。その向こうに見える星波山には星波森林公園って言うのがあるけど、それは星波山にはぐれ発生ポイントがある事が発覚してから閉鎖されてて……あ、これは余計か……ん～ざっとこんなものかな？　ざっと説明しましたけど、よく行く利用する場所とかは後で詳しく案内しますから……？　……どうしました？」
気が付くと、夜衣斗はちょっと困った雰囲気になっていた。
「……いや……ちょっと情報量が多過ぎて……その、いっぺんに

喋って疲れませんでしたか？」
「いえ？」
「……そうですか……」
少し頬を引く付かせた夜衣斗に、美羽は小首を傾げつつも、
「じゃあ、次の所に行きましょうか？」
そう言って、歩き出す美羽に、夜衣斗は慌てて、
「……あ、あの、次はどこに行くんですか？」
そう言われ、自分がどこに行くか話してない事に気付き、ちょっと自分の頭を小突いて、
「えっと、夜衣斗さんにはとりあえず、星波町が抱えている『最大の問題』を体感して貰おうと思って、星取町側のトンネルにこれから向かおうと思ってます」
「……トンネル？」
予想もしていなかった場所だったのか、夜衣斗は少々困惑した雰囲気になった。

第一章『渇欲の武霊使い』１２

美羽さんが案内してくれたトンネルは、どっからどう見てもただのトンネルだった。

目の前にあるのは、隣町である星取町へと繋がる海岸沿いのトンネル。

ゴールデンウィークの旅行から帰っている人が多いのか、それなりの車がトンネルから出てくる以外、特に気になる所も無い。

美羽さんはこっちの戸惑いを気にせず、トンネルの中に入ってしまったので、慌てて後を追うと、美羽さんがトンネルの半ばで不意に立ち止まった。

「これを見てください」

そう言って美羽さんが指し示した先には……地面から天井にぐるりと描かれている太くて赤い線だった。

ん？　これって確か、昨日電車に乗っている時にも見たよな……

「これはここから先に進むと『忘却現象』が起きると言う目印です」

忘却現象……ようやくそれが何であるか説明されるのか……まあ、ある程度言葉から想像は出来るが……とりあえず説明しやすい様に、分かり切っている事を口にするか……

「……つまり、その忘却現象と言うのが、武霊に関する記憶とか、証拠を町の外に持ち出せないと言う原因ですか……」

「え!?」

え!?　……なんで驚くんだ？

驚きの意味が分からず、美羽さんを見ると、

「あれ？　美羽、夜衣斗さんにその事を言いましたっけ？」

言いましたっけ？　って……

「……武霊が星波町以外に居ない事や、その情報が町の外に一切出てない事、断片的に入ってきた情報などを纏めれば、自然とそう

言う結論に行き着くと思いますよ？」
「そうなんですか？」
いまいち納得いってない感じの美羽さん。
ん～……なんだかな……まあ、とにかく、
「……それで、忘却現象と言うのは、具体的にどんな現象なんですか？」
「あ！　はい。ちょっと待ってください」
俺の問いに、何故か美羽さんは服のポケットから小さなデジタルカメラを取り出した。
「おいでコウリュウ」
美羽さんの呼び掛けに応え、コウリュウが半透明な姿で背後に現れ、具現化させた。
具眼化させたと言っても、その姿は手乗りサイズで、
「これは具現化レベル０．５の『制御具現』って言います。通常具現を加減して、その大きさを通常の以下にする具現化で、部分具現が出来た夜衣斗さんなら直ぐに出来る具現化だと思いますよ？」
そんな事を言いつつ、美羽さんはコウリュウを目の前に移動させデジカメで撮る。
そして、その撮ったコウリュウの姿を俺に見せ、
「写ってますよね？」
確かにデジカメの画面にはコウリュウの姿が写っているが……
とりあえず頷くを俺を見て、美羽さんは慎重に赤い線に近付き、デジカメを持った片手だけを赤い線の上に移動させ、直ぐに戻して、デジカメを確認。
「美羽は何も弄ってませんでしたよね？」
そう言いながらデジカメの画面を再び俺に見せると……そこにはコウリュウの姿だけが綺麗に消えている写真画面があった。
目の前で美羽さんが見せてくれた実演に、俺は眉を顰めるしかない。
確かに美羽さんはデジカメを何の操作もせず、ただ赤い線の上に

通しただけだった。
ただそれだけの動作なのに、まるで綺麗に加工したように写真からコウリュウの姿が消えていた。
「……この現象は、どんな情報媒体でも起きるんですか？」
俺の問いに、美羽さんは頷く。
「動画でも、絵でも、文字でも、武霊に関する事なら全部同じです。ここを」
赤い線を指差す美羽さん。
「少しでも超えれば、全部消えてしまいます」
全部消える……ん？　それは……
「……それは人の記憶もですか？」
俺の当然の質問に、美羽さんは少し首を横に振った。
「少しだけ違います。人の場合は、いったん忘れるだけです。町に戻ってくれば、直ぐに思い出します」
「……なるほど、だから忘却現象ですか……原因は分かってないんですよね？」
「はい……武霊が発生する様になってからもう『十年以上』経ってるんですけど、一向に武霊も、この現象がどうして起こるのか、一切分かってないんです」
つまり、分かっているのは、経験則で導かれた物ばかりって事か……それにしても、十年もこの町は武霊と言う存在と付き合っているのか……ん？　十年？　……サヤが俺に取り憑いたのもそれくらいだよな？
（そうね大体それぐらいじゃないかしら？）
大体？
（だって、あの頃の夜衣斗、時間とか、何月とか、まったく気にしてなかったでしょ？）
まあ……確かに、時間とか気にし始めたのは、小学校高学年辺りからだもんな……まあ、とにかく、線路のトンネルで見かけた赤い線が同じ意味なら、俺が感じた違和感は、忘却現象の何かって

事だったんだろうか？

「ちなみに、この線は……コウリュウ」

美羽さんの指示で、小さなコウリュウがパタパタと赤い線を越えようとする。

その瞬間、コウリュウの姿が唐突に霧散し、美羽さんの背後に半透明のコウリュウが現れた。

「この線は武霊の『活動限界領域』も示しています」

活動限界領域？　……つまり……

「……武霊は人の記憶を基にその身体を構築しているのなら、武霊に関する記憶が忘却されてしまう忘却現象の影響で、その武霊を構築している記憶と武霊の繋がりが断たれてしまうんでしょうね……武霊が武霊を構築している記憶を使っていると言う記憶を……デジカメなどの電子情報も忘却してしまうなら、光伝達……こうして見ている光景も、武霊に関しては向こうからは見えていないと考えるのが妥当でしょうね……そうなると、武霊が起こしている現象は……その現象自体も武霊そのものと言えるでしょうから、それもここから先は霧散して消えてしまう……なら、間接的な現象はどうなんですか？」

……？

返答が無いので美羽さんを見ると、美羽さんは何故かぽか～んとしていた。

えっと……

「……美羽さん？」

「あ！　はい！　えっと……こっちに来てください」

そう言って美羽さんはトンネルの外に出て、海側の山の方を指差した。

「あそこの木、倒れている所、倒れていない所があるじゃないですか」

……確かに指差した所には、倒れている所と倒れていない所があるが……ふむ……つまりあれは……

「……昨日のですか？」
「はい。物凄い爆発が何度もありましたから、ああやって木が倒れちゃってるんですけど……どう言う訳か、武霊が起こした現象で起きる間接的な現象も領域の外に出る事がないんです」
なるほど……あれだけのエネルギーも武霊が関わっていれば外に出る事が出来ないのか……まるで町全体が夢の中にあるみたいな現象だな……ん？　待てよ？
「……そうなると、武霊によって治療した人はどうなるんですか？」
「えっと……確か、大丈夫なはずでしたよ？　美羽も何度か武霊に治療して貰ってますけど、この通り全く平気ですし、普通に町から出れます」
「……つまり、物理現象として定着した武霊現象は、武霊の力が・影響が加わってない限り、忘却現象の影響を受ける事がないわけですね……そうなると……武霊によって壊された物も同様って事ですよね？」
「え？　……ええ、そうです」
「……ただし、『何らかの武霊の力が働いている』と、いや、『働いている間は町を出ることが出来ない』。と言う事ですよね」
「は、はい」
何だか戸惑いながら頷く美羽さん。
その反応の意味がいまいち分からず、とりあえず、
「……武霊の力そのものは町から出る事は出来ないが、武霊で既に起こしたものは出る事が出来る。ただし、武霊の存在を示すものは、忘却されてしまうので、外から武霊の事を認識される事はなく、それを証明する事象も認識されてない……まとめるとそんな所でしょうか？」
「はい、それで間違ってないと思います」
ん～……それにしても……随分都合がいい現象だよな……まるで星波町と言うフラスコを誰かが振っている様にも感じられなくもな

いが……もし仮にこれが誰かの手によって振られている事なら、もっと星波町の外にそれらしき何かが起きている気がするな……『去年は結構な騒動が全国的に起きてはいた』が……仮にそれが武霊関連だった場合、昨日の実体験からしても、被害はあれだけじゃすまなかっただろうし……ん～……ふと思ったが……

「……もしかして、武霊が言葉や文字でコミュニケーションが出来ない様にせ」

（夜衣斗）

ん？　サヤ？

（私から得た情報はあまり公言しない方が良いわ）

ああ、そう言えば、サヤは運命を変える選択だったな……だとするとサヤから得た情報を軽々しく口にするのは危険か……

（そう言う事。理解した？　納得した？）

まあ……な……

途中で言葉を止めた俺を不思議そうに見る美羽さんに、少し咳払いをして見せて、

「武霊が直接的なコミュニケーションを取れない事も忘却現象に関係あります？」

武霊使いが自身の武霊に指示を出している姿を見たのは、今の所剛鬼丸とコウリュウしかないが、その二体とも武霊使いの呼び掛けに言葉で返していなかった。

そこから考えると、他の武霊使いも、制限が掛けられているかどうかは別にしても、少なくとも言葉は喋れないと言う事になり、サヤからの情報ではなくなる。

「え？　……えっと……さ、さあ？」

さあ？

「……武霊は喋れないですよね？」

「ええ。でも、それが忘却現象のせいかって言うと……」

なるほど。

「……分かってない事は大分多い様ですね……」

「えっと……すいません」
「いえ、謝る必要はありませんよ……武霊は根本的に存在の仕方が違うようですから……今現在人類が持っているアプローチ方法では、武霊の全てを理解するのは簡単ではないでしょうね……」
武霊に制限が掛けられているのなら、何によって制限が掛けられているかによって……色々と問題の質と深刻さが変わるんだがな……待てよ？　考えてみれば、俺のオウキはサヤから渡されて発現したよな……これはどう考えてもイレギュラーな感じだし、……他の武霊使いはどうやって発言しているんだ？
「……ところで、美羽さんのコウリュウはどんな形で発現したんですか？」
俺の唐突な質問に目をパチクリさせた美羽さんは、ちょっと考えて、
「……夜衣斗さんと同じですよ。はぐれに襲われた時に、いきなり具現化したんです」
「……他の人もですか？」
「え？　……ええ、大体そうみたいですよ？」
……なるほど……いきなりね……俺みたいにサヤに渡されたのはやっぱりイレギュラーなわけだ……だとすると、もしかして……俺の武装守護霊は根本的に何かが違うのか？　どうなんだサヤ？
（さあ？　他の武装守護霊をここからじゃよく見えないから何とも言えないわ）
そっか……サヤは俺の中から出てこれないんだよな……ん？　出てこれないのか？
（出ようと思えば出れるけど）
出れるのか！？
（そりゃ、十年前？　に、夜衣斗の中に入ったんだから、入れたら出れるでしょ？　普通）
いや、そもそも、心の中に入ること自体が普通じゃないんだが……
（とにかく、出れる事は出れると思うけど、それで夜衣斗にどん

な影響があるか分からないわよ？　それでもいいの？）

よくはないよな……

（でしょ？　理解した？　納得した？）

……まあ、それは仕方ないとして……何にせよ確かな情報が少なすぎるな……まったく、これは本当に迂闊な事は言えない……とにかく、

「……武霊の活動限界領域はどこからどこまでと言うのは分かってるんですか？」

「え？　あ、はい、領域の詳しい情報は、星電で見る事が出来ますから、後でゆっくり見ておいてくださいね」

第一章『渇欲の武霊使い』１３

星降り山の中腹には、町に最も近い武霊活動限界領域があり、その近くには元町立星波高校の廃校があった。

星波高校が廃校になった理由は、町の主要産業であった工場の閉鎖に伴い、人口が急激に減った事による町の財政悪化と生徒数の減少。

元々高度経済成長期に大規模工場の建設に伴って、工場従業員の子供達の為に町が優遇して立てた学校である為、生徒の親のほとんどはその時期に町の外からやってきた者達ばかりであり、多くが故郷を別にしていた。

その為、不景気になり、工場が閉鎖すれば、必然的に何の地域産業もない星波町に留まる理由は彼らにはなく、職を求めて故郷へ帰る者達が続出し、そうなれば子供達も必然的に転校せざる得なくなった。

小学校・中学校、そして、高校と次々と廃校が決まり、生徒数の減少が著しかった町中にあった小学校・中学校の校舎は早々に取り壊され、生徒は近隣の小学校・中学校に移り、いよいよ高校も廃校になると決まった頃、星波学園の創立の話が持ち上がる。

星波学園の創立に、財源を求めていた星波町は飛び付き、近隣に高校がなかった事もあり星波高校の地元の生徒達の多くはそのまま星波学園に転入する事になった。

星波学園の校舎が完成し、いよいよ星波高校が廃校になる。

そんな時期に、武霊は発生した。

突然現れるはぐれ。

次々と目覚める武霊使い。

助けを求める為に町の外に出ようとしても、何故か町からある程度離れると、助けを求める理由のみならず助けを求めること自体を忘れてしまう。

そんな大混乱の中、当時星波高校の生徒会長を務めていた女子高生がある事に気付いた。

自分達が通っている星波高校校舎に何故か化け物達（当時ははぐれとは呼ばれていなかった）が近付かず、自分達から現れる謎の存在（武霊も同様）も近付く事を忌避する。

その事に疑問に思った生徒会長が校舎の周りをよく調べると、校舎の直ぐ近くに謎の存在が存在出来なくなる、その存在の事を忘れてしまう境界線がある事を発見。

後に武霊活動限界領域と名付けられる星波町を囲む様に存在しているその境界線を利用し、星波町各所に避難シェルターが出来るまでの間、学校施設を利用した避難所として使われる事になった。

これにより直ぐに取り壊されるはずだった校舎は残され、避難シェルターが出来た以降も、避難シェルターが使えなくなる万が一を考えて取り壊さない事になる。

だが、その事により、廃校は『ある二人』の格好の住処になってしまう。

武霊活動限界領域近くにあるが故に、その二人を捕まえようとすれば領域の外に逃れられ、強力な武霊使いであった彼らに対抗する為には、それなりの武霊使いの数が必要であった為、廃校に武霊使いを常駐させるのは難しく、気が付くとまた住み着かれてしまう。

そんな事を何度となく繰り返した結果、廃校は完全に彼らの物になり、校舎内は彼らの私物で埋め尽くされる事になった。

そんな廃校の元教室の一つに、無造作に服が置かれた場所がある。

服は全て女物であり、その持ち主である少女は今、元教室の中央に置かれた姿見を見ながら服を選んでいた。

その姿は下着すら付けていない状態で、少女は全てを晒しながら周囲に無造作に散らばる様々な服を自分に当てている。

背後ではその少女の弟を自称する少年がにこにこしながらその様子を見ており、そこに邪な気持ちはない様に見えなくもない。

「ねえ、どれがいいと思う？」

「お姉ちゃんならどれでも似合うよ」
「もう！　そればっか！　ちゃんと見てよ」
「見てるよ」
傍から見れば確かに姉弟の様な振る舞いではあるが、あまりにも『姉弟過ぎる』様にも見え、人によっては何とも言えない気味悪さを感じさせる光景だった。
「ん～……お姉ちゃん。僕そろそろ行くね」
いつまで経ってもなかなか服を決めない少女に、少年はそう言って立ち上がった。
「え～？」
「え～って……そろそろ迎えに行ってあげないと……」
抗議の声に少年は困惑した様子を見せると、少女はむくれる。
「もう！　勝手にすれば！」
ぷいっとそっぽ向く少女に、困った笑みを浮かべながら、
「じゃあ、先に行ってるよ……」
少年は服が四散する元教室から出て行った。
少年が出て行った後、少女はしばらく怒った振りをしていたが、不意に表情を消し、それまで悩んでいたのが嘘の様に一番近くにあったワンピースと下着を手に取り、素早く着替えた。
それまで見ていた姿見すら目もくれず、少年の後を追って元教室から出る少女。
寂れた廊下には、少年が元教室から出てさほど経っていないはずなのに少年の姿はどこにもなく、普通ならその事を疑問に思う状況のはずだが、それすら少女は無反応。
ただただ少女は、事前に少年から『お願いされた行動』を取る為に歩き出した。

第一章『渇欲の武霊使い』１４

美羽さんが次に案内したい場所に連れて行ってくれている間、聞いた話によると、はぐれは人に襲い掛かってくる為、発生して直ぐに対応出来る様に六つの区分を作り、分かりやすく細かくタイプ分けがされているとの事。

一部通常の武霊にも適応されるその区分は、避難に集中しなくちゃいけない一般の人に余計な不安と憶測を呼ばせない為に、余程の事が無い限り、星電でのみ武霊使いに伝えられるものらしい。

確かに、昨日の放送ではどこから発生したかぐらいしか聞いてないな……

って、その六つの区分は、『発生ポイント』『形態』『移動タイプ』『レベル』『発生パターン』『属性』。

発生ポイントが、『海』と『山』にある発生ポイントのどちらで発生したか。

海は昨日、丁度俺が逃げた先の真下に在ったらしく……ああ、だからいきなり下から骸骨犬達が大量に飛んできたのか……知らなかったとは言え、随分間抜けな事をしたもんだな俺は……何かそれで無用な心配をさせてしまったみたいだし……と言うか、海ははぐれのせいで年がら年中立ち入り禁止になっているみたいだし、山は山でせっかく作った森林公園が近くに発生ポイントが出来たせいで閉鎖されてしまったようだし、武霊のせいで町の収入は激減しただろうな……何とも気の毒な話な様な気がしないでもない。

形態タイプが、そのままその姿がどんな姿かで、今の所大きく分けて五つのタイプ。

動物の姿に近い『動物タイプ』。ロボットの姿に近い『ロボットタイプ』。人の想像の産物に近い『幻想タイプ』。これが一番多く出るらしく、昨日の骸骨犬もこのタイプと認定されると思います。

と言うのが美羽さんの話。人間の姿をした『人間タイプ』。そして、

もう一つが『ダンジョンタイプ』……滅多に出ないタイプで、ずっと住んでいる美羽さんも、十数回ぐらいしか遭遇していないらしいが……話によると、なんでもその『体内に迷宮を持っている』とか……どんな姿なのか他の四つと違って想像しにくいな……

移動タイプが、言葉そのまま、そのはぐれがどんな移動方法を取るか。

陸上移動しか出来ない『陸』。海も移動出来る『海』。空も移動出来る『空』。地中を移動出来る『地』。全く動かない『固』。の五つの移動タイプが確認されているらしいが……固って……動かなくてどうやって人を襲うのだろう？

レベルは、いまいちよく分からないが具現化レベルと言うものらしい、はぐれのその性質から、レベル2までしかないって話だが……ん～……なんでその事に付いて説明してくれないんだろう？

発生パターンが、どれだけの数が発生したかで、『単』が一体だけ。『群』が複数の発生で、群の後に『小』と付くと十体以下、『中』と付くと十体以上百体以下、『大』だと百体以上に付けられるとの事。

属性が、そのはぐれがどんなもので構成されているか、主要攻撃手段などで付けられるらしく、炎を出していた犬の骸骨は炎系って事になるらしいが……何だか……

「……何だかゲームみたいなタイプ分けですね……」

そう感想を言うと、美羽さんは少しだけ笑い。

「ゲームを参考にして作ったタイプ分けみたいですからね。そう思うのは無理もないですよ」

なるほど……とりあえずタイプ分けは分かったが……具現化レベルに付いてはこっちから聞いた方が良さそうだな……

（私が説明しようか？）

……いや、どうもサヤの情報はどういう経緯で知ったか分からない上に、その経緯を教える気はないだろ？

（うん。まあね）

なら、こっちで知る事が出来る事は、こっちで知らないと妙な誤差が生まれ、それが新たな死の運命を呼びかねないんじゃないんだろうか？

（……確かにそれは言えてるかもね。私も、どこからがセーフでセーフじゃないか、ちょっと分からないし）

……そんな不確かな感じで説明キャラをやってたのか……

（えへ♪　ごめんね。夜衣斗と喋れるのが嬉しくって……もしかしたら余計な事を既に言っちゃってるかも）

何だ！　急に！？　いきなり訳が分からないキャラのブレは勘弁してくれ……って言うか、余計な事？　……本当に勘弁してくれよな……

（だって、夜衣斗が美羽ちゃんと二人で楽しそうにしてるんだもん）

だもんって……ずっと一緒にいたんだろ？　少しぐらい我慢しろよ……

（夜衣斗が私の事を自覚してくれたのは昨日からだもん）

だからだもんって……はぁ……まあ、何であれ、

「……聞き忘れたんですが、具現化レベルって言うのは一体何なんですか？」

そう勇気を出して聞くと、美羽さんは一瞬驚いた表情になり、直ぐに、

「そう言えば、夜衣斗さんって全くの素人なんですよね……バンバン美羽が言ってない事を言うものだから、つい忘れてました」

つい忘れてましたって……そんなに言ってない事を言ったか俺？

（少なくとも彼女はそう思ったみたいね）

ん～……あまり人と会話した事が無いから、何とも言えないんだよな……

（うん。私も）

私も？　……まあ、幼い記憶の頃から姿が変わってないから、サヤがどれだけの年月を生きているのかは予測が出来ないが、俺の前

に誰かに憑いてなかったのか？
（ううん。夜衣斗が初めてよ）
俺が？　それってどう言う事だ？
（夜衣斗……女はミステリアスな方が素敵だと思わない？）
はあ？　……つまり教えられない事か……
（もう！　ちょっとは乗ってくれてもいいじゃない！）
そう言うのが苦手なのは、サヤなら知ってるだろ？
（まあね）
……知っててやるか……
そんな事を心の中でやっている間、どう説明するか悩んでいる様子だった美羽さんは、考えがまとまったのか、頷き、
「えっと、具現化レベルなんですけど、コウリュウ」
美自身の背後に半透明のコウリュウを出し、
「この大きさのまま具現化するのが、レベル１『通常具現』です」
なるほど……ん？　そう言えば……
「……なんか昨日見た時より小さいですね。このままでも十分大きいと言えば大きいですけど……それに、赤竜物語で描かれていたコウリュウって、確か全長十メートルだったはずですよね？」
「はい。そうなんです。武霊ってどういう訳か、基がどんなに大きいイメージでも、基本的な姿は、大体二・三メートルの大きさになっちゃうんです。人間タイプとか元から人に近い大きさの場合は、そのままなんですけどね」
……つまり、
「……昨日見た十メートルぐらいのコウリュウが、レベル2なわけですか……」
「はい。『倍加具現』って名付けられています。武霊の大きさを十メートルぐらいにする具現化で、大きくなった分、攻撃力とか防御力とかが跳ね上がるんですけど、その分、意志力の消費も上がっちゃうんで、あまり多用はしない方がいいですよ」
十メートル以上になる具現化……ちょっとオウキで見て見たいな

……と言うか、いいですよって言われても……

「……どうすればいいか、俺には分からないんですが……」

俺の言葉に、美羽さんはキョトンとして、

「あ！　そうでした。夜衣斗さんは昨日初めて具現化したばかりなんでしたね……さっき部分具現を見たせいか、ついレベル2まで達していると思っちゃいました」

ついって……なんだかね……これを可愛いと見るべきか、大丈夫と見るべきか、

（どっちなの？）

そりゃ、かわ……何を思わせんだこの野郎！

（野郎じゃないもん！）

いや、まあ、そうだけど……もんって……

「ちなみにさっきも言いましたが、はぐれはレベル2までが限度なんですが……何故だと思います？」

何だかわくわくした感じで俺にそんな問いをしてくる美羽さん。

……いや、そんなに期待されても……既に答えが用意されている事しか分からないんだが……

（私が教えようか？）

いや、別に教えて貰わなくても、既に答えは用意されてるだろ？

（ん？　そう？）

ああ、同じ武装守護霊なのに、はぐれには出来ない事って事になると、それはきっと、はぐれと通常の武霊の違いに関わる事。つまり、

「……武霊使いがいないからですか？」

「わあ！　流石夜衣斗さん。その通りです！」

（ふふん。夜衣斗を甘く見るんじゃないわよ）

心の中で俺にしか聞こえない俺の自慢をするな……複雑な気分になるだろうが……

「レベル3は、『憑依具現』って言って、武霊使いの身体に自身の武霊を憑依させて具現化させる具現化です」

自身の身体に武霊を憑依させて具現化させる具現化？　……どんな具現化かいまいち想像が付かないな……

俺が見るからに困惑しているのが分かったのか、

「えっとですね……実際に見て貰った方が早いんですけど……生憎、美羽はまだレベル３に達してないんですよね……」

そんな事を言ったが……五年以上武霊使いをしている人が到達出来ないレベルね……つまり、

「……レベル３の武霊使いはそんなにいないって事ですか？」

「はい。レベル３にまで到達出来た人って、数えるほどしかいないんです」

数えるほど？

「町・学園合わせて十数人いるかいないかぐらいじゃないでしょうか？　……一応、今町にいるレベル３の武霊使いの人で、知り合いの人はいる事はいるんですけど」

けど？

「その人、自警団の団長をやってる人で、今怪我してるんですよね……」

え？　団長？　しかも怪我？

「『幸野（こうの）　美春（みはる）』さんって言うんですけど、自警団の団長だからって言って、自分の治療より他の人の治療を優先しちゃって……まったく、美春さんの代わりなんていないって言ってるのに、聞かないんですよね」

後半は愚痴っぽくなったが……どうやら名前からして女性で……かなり頑固な人の様だな……どんな人なんだろうか？

（美人だといいわね）

そうだな……って！　何を思わせんねん！

第一章『渇欲の武霊使い』１５

黒樹春子が借りている一軒家の借家の玄関に、自警団団長幸野美春はいた。
ポニーテールをした可愛いよりカッコいい分類に入るスレンダーでグラマーな美女。
それが美春だった。
そんな美春に玄関に敷いた座布団に座る様に促しながら、腕に付けているギブスを見て痛々しそうな顔になる春子。
「治療系武霊使いの意志力が足りなかったからな」
何故か男言葉で話す美春を、春子は面白そうにしげしげと見て、
「本当に自警団の仕事中は男言葉なのね。美羽ちゃんから聞いてたけど……酒屋に居る時とは全然雰囲気が違うわ」
「……いつもお買い上げありがとうございます」
「い、いえいえ。いつも美味しく飲ませていただいています」
不意にほんわかとした優しい雰囲気になった美春に、そのあまりの変わり様から少し戸惑いながら春子は頭を下げた。
美春の家は星波商店街で酒屋をしており、春子はその常連だった。
その為、武霊使いでもない春子は、自警団として活動していない美春とはよく会っており、
「それで、春子の甥っ子は、本当に普通の少年なんだな？」
こうして何故か自警団の活動中は男言葉を話す美春と直接対面した事がなかった。
「良いキャラよね」
「は？」
唐突な、質問とは関係ない春子の言葉に、美春は困惑する。
「今度私の漫画に使っていい？」
「……遠慮してくれ……」
流石に困るしかない頼みにため息を吐き、

「それで？」
もう一度聞くと、春子は苦笑して、
「夜衣斗ちゃんは普通の少年よ」
そう答えた。
特に問題のない、確かな答えだったが、美春はどこか違和感を覚えた。
その違和感の正体がよく分からないが美春は言葉を続ける。
「では、何故、彼に一ヵ月も経たない内に武霊が憑き、具現化したばかりでありながら、自在に武霊を操れたと思う？」
「さあ？　偶々なんじゃない？」
「偶々であんな事が起こるか？」
美春のその問いに、春子は少し考え、
「ん～個人的な考えだけど……相性が良かったんじゃない？」
「相性？」
「夜衣斗ちゃんは、子供の頃から空想好きだったみたいだし、武霊にとっては憑くには最適な相手なんじゃない？」
「それは春子にだって言える事だろ？　なのに武霊は一向に具現化しない」
「私は一度もピンチになった事は無いからね。もしかしたら、この町に来て直ぐに夜衣斗ちゃん同様にはぐれに襲われれば、夜衣斗ちゃんみたいに武霊が直ぐに具現化したかもよ？」
「一ヵ月の経験則は、個人差で覆せると？」
「一ヵ月と言う基準だって、偶々町に訪れた人や、星波学園に入学して直ぐの子供達を調べた程度の情報量でしょ？　それじゃあ、確かな経験則とは言えないんじゃない？」
「十年の積み重ねだぞ？」
「武霊が何であるか根本的に分かってもいないのに、上澄みだけの情報じゃ、酷く頼りないと思わない？　現に今の所夜衣斗ちゃんだけだけど、例外は出ちゃってるしね」
「……それはそうだが……」

「そう考えると、武霊を自在に操作出来たのだって、個人差って言えなくない？」

「それは……どうだろうな？」

多くの武霊使いは、少なくとも『武霊発生当初から武霊使いをしている』美春は、具現化して直ぐに自身の武霊をあれほど自在に操った者の記憶はない。

もちろん、数少ないレベル3に達している美春でさえ、自身の武霊が具現化した当初は武霊に思う様に自分の意思を伝えられず、上手く操れなかった。

それを何度も何度も具現化を重ねて、武霊をどう扱えばいいか学び、言葉無くとも互いの信頼を得て、ようやく自在に操れる様になったのだが……

当然、それらには個人差、過程の違いや従わせ方の違いなどがある。

だが、それでも、初めて具現化して直ぐに、自在に武霊を操るのは異例であり、昨日見た限りでは、十年以上武霊使いをしている美春と同等に操れている様にも見えた。

更に言えば、そんな人物が現れたタイミングも、あまりにも良過ぎる。

昨日までのはぐれ発生は、一度発生すれば、次に発生するのに少なくとも一週間の間が空いていた。

なのに、昨日に限って、二日連続のはぐれ発生。

当然予期していなかった自警団は苦戦し、ゴールデンウィーク中でも町に残っていた公認武霊使い達を緊急招集して、どうにか町に大量のはぐれが流れ込むのを防ぎ、被害も突然であるにも関わらず、かなり抑えられた。

これは偏にまるでそれに呼応するかの様に現れた、新たなそして例外的な武霊使いの活躍によるものが大きい。

だが、その被害と活躍にも、今までのはぐれにはない例外的な動きが多々あった。

まず、夜衣斗に襲い掛かったはぐれは、浜辺に現れたはぐれと違い、全身から炎を出さずに町に侵入した事。

これは避難していた町民の証言から分かった事だが、その証言者は更に不思議な事を言った。

普通のはぐれなら、人を見付ければ即襲い掛かってくるはずのはぐれが、その証言者を見付けても威嚇はしても、襲い掛かってくることはなかったと話した。

唯一襲われたのが、夜衣斗であり、彼を助けに入った田村遼だけだった。

これではまるで、浜辺に現れたはぐれを囮にして、夜衣斗だけを狙った様にも見える。

また、はぐれの能力自体も、今までにない擬死と言う今までにないものだった。

今まで美春が相対してきたはぐれは、身体がどれだけ傷付こうと、相対した人や武霊に向かって襲い掛かってきた。

そこに演技など挟む事はなく、その先入観が、浜辺ではぐれを迎え撃った武霊使い達に多くの怪我人を出す結果となり、美春もその一人だった。

もちろん、春子の言う様に全てがたまたまだとも言えなくもない。

全ての根本となる武霊について、分かっている事は経験則で得た上澄みだけの情報でしかない事は間違いない。

だが、だからと言って、

「……しばらく、春子の甥っ子に監視を付けさせて貰うが、いいか？」

疑い、疑惑を完全に否定する事も出来ず、美春はそれが、閉塞的な絶望に陥りつつある星波町に現れた僅かな光明に見えて仕方なかった。

美春の言葉に、春子は困った表情になりながら、

「プライバシーは守ってあげてよ？　夜衣斗ちゃんは年頃の男なんだから」

「分かっている」
そう答えた美春は、立ち上がり、不意に雰囲気を変え、
「まさかあなたがあそこまで考えてるとは思わなかったわ」
「あっはは。これでも職業漫画家ですから、この手の話はよく考えてるのよ」
「そう……もっと早く話を聞いておけばよかった」
美春の言葉に、春子は首を傾げる。
「何の進展もしないと思うけど？」
「それでも考え方の裾野は広がるわ」
「そうかしら？」
「そうよ」
微笑んだ美春は、少しだけ顔を真剣な面持ちにし、
「……今日はこれで帰るけど……もし何か分かったら教えてよ？」
そう言って玄関から出て行った。
美春がいなくなった玄関のドアを見ながら、
「そんな事、こっちが教えて欲しいわ……」
春子は深いため息を吐いた。
「お姉ちゃんに……いえ、『夜衣花（よいか）』ちゃんになんて説明すれば……」

トンネルからリサイクルセンターの前を通り、山川と海側の二つの場所になるはぐれ発生ポイントを監視しているはぐれ監視塔（海側）を見て、図書館とそこの向かい側にある第四地下避難シェルターを確認し、福祉会館を通り過ぎて、星降り橋を渡って、そんなに繁盛してなさそうな星波デパートを通り過ぎ……地元だからか、美羽さんは星波デパートが好きじゃないようで、他の場所を通る時は軽い説明があったのに、ここは素通りだったな……って、商店街に辿り着いた。
「ここ星波商店街は、星波自警団の本部がある場所で、酒屋を始

め、八百屋からペットショップや美容院まで、一通りの物はここで揃いますよ……あ！　あそこが自警団の本部です」

そう言って指差したのは商店街の中頃には、確かに星波自警団本部と書かれた看板が掲げられている場所があった。

「美羽達の家から、比較的商店街の方が近いですし、基本的な買い物はここで全部済みますから、美羽はよくこの商店街を利用しています。もちろん、星電マネーにも対応していますから……そうですね……時間もちょうどいい事ですし、夜衣斗さんここでお昼にしませんか？　奢りますよ？」

美羽さんは商店街の中頃過ぎに在った喫茶店の前で立ち止まり、そんな事を言った。

ん～……確かにお腹は減って来たけど……考えて見れば、朝から何も食べないし……だが、

「……お昼には賛成ですけど……」

奢られるのは……

（男のプライドが許さない？）

プライドと言うより、そう言う事に慣れてないって事の方が大きい気がするな……

そんな事を考えていると、

「大丈夫ですって、こう見えて美羽、そこそこ強い武霊使いですから、結構星電マネー持ってるんですよ。だから、男の人の食事を一回奢るぐらいわけないです」

美羽さんはそう言って笑ってくれたが……ん～……あまり断るのも逆に失礼だよな……

（まあ、いいんじゃない？　この町でしか使えない電子マネーなんて、使い道が結構限定されそうだし、奢ってもらいましょうよ）

そうだな……

「……分かりました。御馳走になります」

俺がそう言って頭を下げると、美羽さんは顔を明るくして、

「はい！　ここのナポリタンとっても美味しんですよ」

そう言って喫茶店に入っていたので、俺は少々困惑しながら後に続いて入った。

「……ッチ。いい御身分じゃねぇか」

夜衣斗と美羽がいる場所から遥か上空に『彼』はいた。

『彼』は人が豆粒にしか見えない上空にいると言うのに、正確に二人を視認できている上に、何もない空中に立っている。

そしてその手には不自然に暗く不気味に輝くスマートフォンが握られており、同じ様な光が『彼』の瞳と両脚に僅かに宿っている様で、それが超常の視力と空中に立つ力を『彼』に与えている様だった。

「にしても邪魔だな……」

超常の視線を美羽に向け、

「ッチ……仕方ねぇ、俺が直接相手をするか……」

そうつぶやいた『彼』はスマートフォンを操作し、

瞬間、彼の姿は消え、空には誰もいなくなった。

第一章『渇欲の武霊使い』１６

喫茶店のナポリタンは確かに美羽さんの言う通り美味しく、
「夜衣斗さんは甘い物もいける口ですか？」
って言われ、つい頷いてしまうと、更にお勧めだと言うチョコレートサンデーを断る前に注文されてしまい、それも食べてから、喫茶店を出た。
……デザートまで奢らせてしまった……
（いいじゃない。美味しかったんだから）
そりゃまあ……って！　何でサヤが味の評価をするんだ！？
（え？　だって、私が住んでいるのは夜衣斗の心の中よ？　夜衣斗が食べた物の記憶は、ここでも再現されるんだから）
そっちで食べたわけか……それって、そこで食べられるとその記憶が無くなるって分けじゃないよな？
（あはは。ただの記憶の共有化だから）
……なるほど……まあ、確かに、記憶は失われてないし……やっぱり色々とサヤも謎なんだよな……
（うふふ。謎の女って響きも良いわね）
その謎の女を心の中に住まわせている俺の気持ちを考えろよな……
（ラッキー？）
なわけあるか！
そんなやりとりを心の中でしている俺を、美羽さんは星波学園へと案内していた。
星波町に来る前にネットで調べた事によると、星波学園は教職員を合わせて大体三千人。初等部が約５００人・中等部が約７００人・高等部が約８００人・大学部が約１０００人。
で、美羽さんの話によると、その内の武霊使いの割合は約半分の１５００人で、年齢が上になればなるほど武霊使いは多くなっているとか……人口密度の割に武霊使いが町より多くいるのは、若者の

方が武霊を受け入れる柔軟性が高いのと、多感な思春期である為意志力が大人より高い為ではないかとか言われているらしい……まあ、多分、それに関しちゃ間違っちゃいない気がするな……

そして、その星波学園の半分ぐらいの生徒が、地元の星波町から通っており、そのほとんどが県外からの寮生。

元々、日本全国から生徒を集める仕組みが星波学園にはある為、生徒の半分が寮生になっているとか。それ故に、寮は星波学園内部と星波町内に五つほど分散して作られており、その六つの寮にはそれぞれ名前が付けられているんだが……星波学園にあるのが『専』残りが『花』『月』『雪』『星』『宙』なっている為、別名『ヅカ寮』と呼ばれているらしい……まあ、何と言うか……まあ、俺にはそれほど関係ないからいいんだけど……

苦笑するしかないそんな寮の事を聞いてから少しして、俺と美羽さんは学園大橋前に辿り着いた。

ネットで見た写真で大きい事は分かっていたが……実際に見ると少々面食らう大きさだった。

元々は空港建設の為に造られた人工島の上に星波学園が建てられている為、空港の為に用意された設備がいくつか残されているらしく、その一つがこの学園大橋。

上には何車線もある道路とその両脇には広い歩道。更にその下には、星波駅に繋がる専用の地下鉄が走っており……少々学校には過ぎた設備に見える。

まあ、元々が元々だから仕方がないが……

なお、地下鉄は空港が出来れば、星波駅以外の場所にも路線を伸ばす予定だったらしいが、計画が途中で潰れてしまった為、星波駅止まりになってしまっている。それ故に、滅多に使われず、使ったとしても、大量の備品などを運ぶ以外の使い方をされていないらしく、生徒は基本的に徒歩かバス。

勿体ない様な気がしないでもないが……まあ、維持コストも使用コストも馬鹿に出来ないだろうから、当然と言えば当然か……

そんな事を思いながら、美羽さんと学園大橋を渡っていると、妙な気配を感じ、思わずその気配がした方向・星波海岸に目を向けると……病院前で見掛けた小っちゃい髭のおっさんが……源さんだったか？　がいた。

「あ～ようやくこっちの方にも出てきましたね」

美羽さんがのほほんとそんな事を言った。

まあ、はぐれじゃないからそんな風に呑気に出来るんだろうが……見慣れてない俺としては、ちょっと警戒心が出てくるんだよな……あんなちっちゃなおっさん達……違和感その物でしかないと言うか……

（そう？　見てて可愛らしいと思うんだけど？　何かのマスコットキャラクターみたいで）

日曜大工系の？

（そうそうそんな感じ）

……まあ、見様によっては可愛らしくも見えなくはないな……

そんな事を思いながら、源さん達の方を何となく見ていると、何かによってガラス状になっている砂浜の一部に集まり、腹巻から自分の身体より倍の大きさのあるハンマーを取り出し、一斉に構えた。

……砂浜がガラス状になってるって事は、それだけ高温の攻撃が行われたって事だよな……レーザー光線でも使える武霊が昨日見た中に居たって事か……

そんな事を思いながらちょっとぼ～としていると、俺が立ち止まっていた事に気付かなかった美羽さんが少し先に行っている事に気付き、慌てて後を追おうとした。

だが、ふと何かが気になって浜辺の方を再び見ると、源さん達が砂浜の修復作業を止め、一斉に海に向かって走り、飛び込み出していて……？……何なんだ？　まるで何かに怯えて逃げ出して

「夜衣斗さん！」

不意に美羽さんに突き飛ばされた。

思いっきり突き飛ばされた為、無様に学園大橋上に倒れてしまう。

意味が分からず、突き飛ばした美羽さんの方に慌てて視線を向けるが、そこに美羽さんの姿はなかった。
あまりの事に訳が分からず視線をさまよわせると、視界の上の方に何かが見え、反射的にその何かに視界を合わせると……そこに赤黒い竜がいた。

源さん達が逃げ出し始めた瞬間、コウリュウが美羽に警告の意志を伝えた。
美羽は咄嗟にコウリュウが警告した方向を見ると、赤黒い竜がこっちに向かって急降下してくるところだった。
その落下方向から、その狙いが夜衣斗だと気付いた美羽は、反射的に夜衣斗に駆け寄り、突き飛ばすが、代わりとばかりに赤黒い竜の手が美羽を掴もうと襲い掛かる。
その手が美羽に触れるより早く、コウリュウが防御具現。
だが、その手の勢いは完全に防ぐ事が出来ず、美羽は学園大橋から吹き飛ばされた。
宙に舞った美羽は、そのまま海に落下する事を嫌い、素早くコウリュウを強くイメージ。
「おいで！　コウリュウ！」
美羽の呼び声に応えて、コウリュウが美羽の背後から通常具現。
美羽を抱え、間近に迫っていた海面から一気に上空へと揚がる。
そして、美羽を吹き飛ばした赤黒い竜と空中で対峙。
（この武霊は!?　なんで！　何で単独で動いているの!?）
赤黒い竜とその背に乗る少年に見覚えがあった美羽は、その今までにない行動に驚愕した。

武霊が星波町に発生するようになって十年。
忘却現象と言う武霊と同じく謎の現象のせいで町の外に助けを求める事が出来ない現状の中、幸野美春を始めとする星波町在住の武

霊使いが中心となり、自警団や武装風紀委員会などの対はぐれの仕組みは比較的早い段階で出来ていた。

その為、星波町・星波学園に置いての根本的な混乱は一年未満で終息し、武霊を含んだ日常に戻る事が出来た。

だが、その直後から、町は新たな問題に直面する事になった。

それは武霊を使って犯罪を起こす者達の出現。

人の世の中から犯罪が絶えない事は分かり切っていた事であり、そう言う輩が出現するのはある意味必然だった。

それ故に、ある程度の犯罪は、事前の準備によってあっさり逮捕・解決する事は出来たのだが、殺人を始めとする重犯罪だけは自警団・警察・星波学園の三者の認識の違いから、対応が遅れた。

自警団は、優先すべきははぐれへの対応であり、今まで殺人事件などの重犯罪が起きた事がない星波町で、重犯罪など起こるはずがない。と言う油断。

警察は、武霊を使った犯罪を立件する為、外向けに起きた事件を『調整』しなくてはいけない為、仮に重犯罪が起きた場合、どうやって立件するか？　と言う苦悩。

星波学園は、武霊使いの多くは、星波学園の生徒であり、子供。そんな彼らが重犯罪を犯すはずがない。と言う過信。

警察の苦悩は違えど、町と学園の油断と過信は、ある意味合っていた。

何故なら、武霊を使って重犯罪を起こしたグループと二人組は、その二つとも『町の外から町・学園には関係ない形でやってきた者達』だったからだ。

グループは近隣で暴れ回る『鬼走人骸（きそうじんがい）』と名乗る元暴走族の少年犯罪グループ。

廃工場を根城に、近隣で犯罪行為を犯しては、星波町に逃げ込み、彼らに恨みを持つ者達を武霊を使って撃退しており、今の所星波町への直接的な被害は少ないが、既に何人かの人殺しをしているのではないかと考えられている。

そして、現在最も星波町住民に恐れられているのが、姉弟だと名乗る決して姉弟には見えない二人組の男女。

『高神姉弟』

彼女らが町に現れて数年、彼女達によって殺されたとされる武霊使いは、五十名にも及んでいるが、現在に至るまで彼女らを捕まえる事は出来ていないでいる。

彼女らが住んでいる場所は分かっているし、当然、警察・自警団共に何度も逮捕しようと動いた。

だが、警察・自警団の全武霊使いを投入しても、彼女らを捕まえるどころか、逆に参加した武霊使いや町に被害が出る事になった。

その最大の理由は、彼らが根城にしている廃校の立地と、姉と名乗る少女が使う『特殊な武霊』だと警察・自警団は考えているが、一部の武霊使いは、弟と名乗る少年にも警戒心を持っていた。

弟の名乗る名前は、『高神（たかがみ）　礼治（れいじ）』。

所有武霊は、赤黒いドラゴン『ＢＢ（ブラックブラッド）ドラゴン』。

常に姉と一緒にいる為、姉の特異さに隠れてあまり注目されていないが、その実力は自警団ナンバー2だった田村遼と同等と考えられ、更にその武霊能力は強力な万能性を有していた。

（常に姉と一緒にいるはずの礼治がここにいるって事は！　どこか近くにあの女が！？）

そう思った美羽は、慌てて下を見ようとするが、ＢＢドラゴンが赤黒いファイアブレスを吐いた為、コウリュウが回避行動に移り、見る事が出来ない。

だが、これまでの高神姉弟の行動動機から導き出される事は一つしかなく、それ故に美羽は叫んだ。

「夜衣斗さん！　オウキを具現化して！」

高神姉弟により殺された五十名の武霊使いは全て、『活躍した、もしくは、活躍するキャラクターを基にした武霊』を所有していた。

つまり、それは『昨日活躍したオウキ』にも当てはまるという事

で、
「逃げてぇえええ！」
夜衣斗が『次の殺人のターゲット』にされたと言う事だった。

コウリュウを具現化させた美羽さんの警告が聞こえた時、地面に付いている俺の手に何かの液体が触れた。
反射的に手を引こうとしたが、ねちょっとしてその液体は張り付いて来て……それが何なのか確認すると、それは赤黒い、まるで血の様な粘性のある液体だった。
その液体は、俺の後ろにかなりの量広がっていて……さっきまではなかったよな……
（何を呆けてるの夜衣斗！　お願い！）
不意にサヤが叫び、その声に応えオウキが防御具現しようとしたが、それより早く俺の手にくっ付いていた赤黒い粘液に引っ張られた！？

？

そして気が付いたら、俺は……どこか見知らぬ校舎……外見がぼろぼろな廃校が見える、草が生えまくったグランドらしき場所にいた。
「ようこそ」
不意に背後から声を掛けられ、振り返ると、そこには、
「とぉ～ても強い武霊を持ってる人」
異様なほど色白で、見惚れるほど綺麗な腰まである長い黒髪を持

った……ぞっくと戦慄を感じたほど妖艶な容姿をした少女がいた。

第一章『渇欲の武霊使い』１７

この場の雰囲気と、背後にいる少女の雰囲気があまりにも場違いで、一瞬、俺の思考は停止したが、とりあえず、倒れたままなのは何なので、立ち上がり、身体を少女に向ける。

この少女は何なのだろうか？

美羽さんを吹き飛ばした赤黒い竜の仲間？

俺を引き摺り込んだ血の様な液体には、転送能力があって、俺をここまで攫った？

だとすると……敵？

そこまで考えた時、ふと思い出した。

星波大橋で美羽さんが一辺に話した町の情報の中に、「星降り山の中腹に廃校が見えますけど、ここに危険な人物が二人住み着いてますので、無暗に近付かないでくださいね」って言っていたのを思い出す。

つまり、赤黒い竜の武霊使いとこの少女が、その危険な人物なのか……赤黒い竜の武霊が、この少女の武霊って可能性もなくはないが……何故か違う気がした。

しかし……この子が危険な人物？

改めて少女を見直すと、何故か先程感じた戦慄を感じるほどの妖艶さは一切なく、代わりに非常に幼い感じの雰囲気になっていて、俺は戸惑わせた。

その俺の戸惑いを感じているのか感じてないのか、少女は、

「あのねあのね。とってもかっこよかったの」

喋り方までより幼く、まるで、俺が感じたイメージに合わせる様に、

「ビューンって、ドカーン、ボーって」

そこまでまるで本当の幼子の様に喋った少女は、急にさきほど見せた妖艶な雰囲気になり、

「かっこよくて、とても強かった」
ぞっとした。
その妖艶な雰囲気にではなく、そのあまりにも早い雰囲気の変化に、そのあまりにも違う雰囲気の落差に、年頃さほど変わらなさそうな少女に、さきほどとは質が違う戦慄を感じてしまう。
と、とにかく、何かを喋らないと……
俺は先程から生じ始めているある種の、男としてどうしようもない衝動を、ぐっと堪え、
「……何か勘違いをしてるんじゃないですか？　そんな武霊、俺は持ってませんよ？」
そう誤魔化すが、
「うふふ。嘘」
自然な動きで、こっちに一歩近付く少女に、俺は思わず一歩後ろに下がる。
「嘘でしょ？」
気を抜けば思わず教えてしまいそうになる様な酷く甘えた問い掛けと共に、一歩近付き、再び一歩下がる。
「嘘よね？」
妖艶かと思えば、唐突に子供の様な純真無垢の問い掛けをし、更に一歩俺を下がらせると、急に無表情になり、
「嘘だと言えや！」
まるで粗暴な男の様に激昂して、背後に半透明の赤いアメーバの様な武霊を出現させ、
「現れなさい麗華の武霊！」
具現化トリガーを使わずに通常具現で武霊を具現化させた。

ＢＢドラゴンから吐き出される赤黒いファイアブレスを避けさせながら、美羽は反応が無い夜衣斗の無事を確認する為に何とか学園大橋の方に視線を向ける。

だが、そこには赤黒い液体が溜まっている以外、夜衣斗の姿はどこにも見当たらなかった。
赤黒い液体の正体を何度もＢＢドラゴンと戦った事がある美羽は知っていた。
その正体は、ＢＢドラゴンの血。
ＢＢドラゴンは、その名の通り、血を操る力を持ち、更にその血には、予め別の場所に溜めて置いた別の血へ物体を転送させる能力があった。
そして、周囲には礼治の姉を自称する『高神（たかがみ）　麗華（れいか）』がいる様子はない。
それはつまり、ＢＢドラゴンの血によって、夜衣斗は攫われた。
しかも、連続武霊殺人事件の主犯格である麗華の前へと。
（ここ最近、大人しかったから、安心して油断していた美羽のせいだ！　ちょっと考えれば、あれだけ昨日活躍した夜衣斗さんが狙われるって分かるはずなのに……どうしよう！？　いくら夜衣斗さんの武霊が強力でも、あの高神麗華が相手じゃ……）
そこまで思った美羽は、強く拳を握り、
「コウリュウ！　廃校に急いで！」
そうコウリュウに命令するが、
「悪いけど、お姉ちゃんの邪魔はさせないよ」
そう言って礼治とＢＢドラゴンが美羽達の前に飛び塞がる。
「邪魔を……するな！」
美羽の意志に応えて、コウリュウがファイアブレスを吐く。
ほぼ同時に、ＢＢドラゴンは血を吐き出し、自分の前に血の盾を造ってファイアブレスを防ぐ。
美羽はＢＢドラゴンがファイアブレスを防いでいる間に、コウリュウの手の中から背中に移動。
コウリュウが常に空を飛ぶ為などに使っている念動力で身体を背に固定させ、
「行ってコウリュウ！」

美羽の合図と共に、コウリュウは一気に急降下し、海面ギリギリを飛んで星波川河口に向かう。

（振り切った！？）

そう思って後ろを見ようとするが、すぐ隣にＢＢドラゴンが飛んでいる事に気付き、同時にその手にＢＢドラゴンの血で造られた剣が握られている事を確認した美羽は、咄嗟に、

「コウリュウ！　逆鱗剣！」

美羽の命令に、コウリュウは自分の喉元の逆鱗に手を置くと、鱗が次々と繋がって生え変わり、一振りの剣になった。

出来上がったばかりの逆鱗剣を使い、回転して斬り掛かってくるＢＢドラゴンを、同じく回転して防御。

何回か切り結ぶと、両者は飛ぶ事を止めた為に海に落ちそうになる。

だが、コウリュウとＢＢドラゴンは、ほぼ同時に急上昇してそれを回避。

しかし、それによってＢＢドラゴンに先回りされてしまい、抜き去る事が難しくなる。

（どうしよう……こんな事をやっている内に、夜衣斗さんが……）

夜衣斗は麗華の武霊能力を知らない。

星電で連絡し様にも、星電を取り出している余裕はない。

それが美羽を焦らせるが、ＢＢドラゴンは一対一で戦って簡単に勝てる様な相手でもなく、その事を重々承知している美羽は、

（夜衣斗さん！　絶対に戦っちゃダメだよ！　戦わずに、逃げて！　剛鬼丸を倒したオウキでも、麗華の武霊の『特殊性』には敵わない……だから、どうか、逃げて！）

そう祈る事しか出来なかった。

さっき美羽さんがコウリュウを具現化させた時もそうだったが、具現化トリガーを使っている様子はなかったよな？　まあ、美羽さ

んは時間がなかったってのは分かるが……彼女は余裕があったよな？
（ええ、そうね）
何でだ？
（知らないんじゃない？）
知らない？　じゃあ、何で俺の記憶の中にある老人は、具現化トリガーの事を知ってたんだ？
（さあ？）
って言うか、あの公園は星波町だったのか？
（さあ？）
さあ？　って……言えない事？
（知らない事よ。私が夜衣斗の中には入った時、そこがどこだったか私も聞いてないの）
……どんな状況なんだ、それ。
（夜衣斗がまだ思い出してない事も関わってくるから、説明し辛いわ）
ん～……記憶の中の公園が星波町の公園なのかどうかで状況が大分変るんだがな……あの老人が武霊を具現化したかどうかは思い出せないし……
（そもそも夜衣斗はこの町に来たのは初めてでしょ？）
だと思うんだが……後で確認してみるか……
（まあ、それはいいけど……この子どうするの？）
どうするって言われてもな……
目の前には、具現化された赤いスライムの武霊。
ぷよんぷよんと丸っこくたわわってるが……何でこんなのがこの子の武霊として具現化されてんだ？
（さあ？）
こんなのが彼女の人生の基底となっているイメージ？
（どんな人生を歩んだらそうなるのかしらね？）
分からん……他人の趣向の問題なんだろうが……
などと、武霊が具現化されたと言うのに、相手がスライムと言う

大体のゲームで最弱に設定されている相手だった事もあり、最初は警戒していたサヤも、いまいち状況についてけてない俺も、完全に油断していた。

「……武霊を具現化しないの？」

一向に武霊を具現化しない俺に業を煮やしたのか、幼い子供の様な雰囲気になって首を傾げる……さっき麗華の武霊って言ってたから、名前は麗華なのか？　……まあ、麗華なんだろうな……麗華は……麗華は？　……はて？　なんか引っ掛かるな……なんだったけ？

俺も別の理由で首を傾げると、麗華は

「う～ん。手間が省けていいけど……」

にたりと笑い、

「えへ♪　じゃあ、いただきます」

ん？　……今のセリフどこかで……

何かの取っ掛かりを得て、何かを思い出そうとした瞬間、ぞくっと背筋が寒くなった。

ほぼ同時に、オウキが勝手に具現化し、俺を庇う様に立ち、その背後から寒気を感じた赤いスライムの方を見うると……まるで破裂したかの様に赤いスライムが四散し、俺の周囲に小さなスライムを無数に作り出した。

小さなスライムを無数に作り出したって……

と思う反面、自分が感じた悪寒と、オウキの防御具現が、それが脅威に繋がると予感させた。

そして、その予感は直ぐに形となって現れた。

文字通り、形となってだ。

俺とオウキが警戒する前で、小さな赤いスライム達は、次々と大きくなり、どこかで見た事がある『アニメや漫画・特撮などの主人公』の形になった！？

第一章『渇欲の武霊使い』１８

（武霊って一人につき一体じゃないのか！？）

そう心の中で夜衣斗は驚愕しながら、

「セレクト！　ＰＳサーバント！」

オウキからＰＳサーバントを出し、着用。

ほぼ同時に、麗華の武霊から分裂した『分裂体』と呼べる武霊達が一斉に動き出し、夜衣斗に殺到する。

赤いスライムの一部から出来た為か、基となったキャラ達の元々の配色が一切無視された、全てが赤い分裂体が自分に迫る光景に、夜衣斗は咄嗟に思考制御でクイックアップ機能を起動。

あまりにも唐突過ぎる窮地に、思考が付いて行ってないと自覚しながら、副眼カメラで周囲を確認。

すると、自分の真後ろに頬に十字傷を持った剣客の分裂体が抜刀の体勢でいる事を確認し、焦った夜衣斗は思わずクイックアップ機能を切り、同時に前にいるオウキの背に向け飛ぶ。

直前まで夜衣斗がいた場所に、断続的なクイックアップ機能で何とか見えるほどの速度で逆刃の刀が空を切り、夜衣斗はそれを副眼カメラで確認しながらＰＳサーバントの自動剣撃モードを起動。

ＰＳサーバントは空中で着用者の身体を回転させながら、片手に振動刀を作り出し、追撃を受けようとした。

だが、超神速と呼べるほどの速度で空を切った刀によって弾かれた空気が夜衣斗襲い、次の行動を阻害。

さらに空気が弾かれてできた真空空間により元に戻ろうとする作用が夜衣斗の身体を剣客に引き寄せ様とする。

ＰＳサーバントはその作用に反射的に抵抗し、夜衣斗の意図に反して動きが固まってしまう。

そこに空を切った動きを利用して、身体を回転させていた剣客の二撃目が襲う。

夜衣斗は強制命令を発動し、辛うじて振動刀で二撃目を受けるが、それにより片腕に無理に動かした事による激痛が走り、更に、回転による遠心力も加えた強力な二撃目の威力に、振動刀にひびが入る。

その事を副眼カメラで確認していた夜衣斗が戦慄した瞬間、夜衣斗の背後からオウキが振り向きもせずに腕を出し、腕の簡易格納庫から取り出していた短機関銃を発砲。

高速連射により撃ち出された通常弾が、剣客に避ける暇も与えず撃ち込まれ、霧散化。

知っているキャラクターの武霊だったのか、夜衣斗は思わず眉を顰めるが、とりあえず一体倒す事が出来た。

だが、そうは言っても、殺到する全てが赤い様々な分裂体の内の一体を倒したに過ぎず、窮地の状況は一切変わらず感傷に浸る暇すらない。

この場を乗り切る方法を考えよう夜衣斗が再びクイックアップ機能を使おうとした時、殺到する分裂体達に参加していない分裂体の一体・右腕左足が機械義手義足となっている少年の分裂体が両手を叩く様に合わせ、直ぐに地面に両手を付けた。

その瞬間、青い光が生じ、少年の手が触れている大地が隆起し、他の分裂体達の動きを邪魔しながら、無数の手の様な形になって夜衣斗へと襲い掛かる。

少年の武霊能力を副眼カメラで確認した夜衣斗は、ＰＳサーバントで強化された脚力を使って真上に飛び、

「ＰＳサーバント！　セレクト！　ウィングブースター！」

マントをウィングブースターに変え、更に上空へと逃げようとした。

だが、その動きを予測していたのか、少年の分裂体は自らが隆起させた大地を駆け上がり、同時に再び両手を合わせ、右腕の機械義手に手を触れ、青い光と共に機械義手の手の甲の部分を刃物に変化させ、夜衣斗に斬り掛かる。

避け切れないと判断した夜衣斗は、自動剣撃モードを再び起動し

て少年の分裂体の刃を受け止め、同時に残った手に拳銃を出し、少年の胸に向けて連射。

銃撃をまともに受けた少年は霧散化し、夜衣斗に再び眉を顰めさせる。

それが一瞬の油断を呼んだのか、機械義手の少年が霧散化した影響で崩れる大地の手を足場に、一気に夜衣斗の背後へと飛び掛かる存在に夜衣斗が気付くのが遅れた。

隻眼で身の丈以上の分厚い大剣を持った剣士が、その巨剣を夜衣斗へと振るう。

慌ててウィングブースターを操作し、避けようとするが、避け切れず、ウィングブースターが半ばまで斬り飛ばされる。

夜衣斗は残ったウィングブースターで姿勢を変え、隻眼の剣士に対して拳銃に残った全ての弾丸を叩き込み、吹き飛ばす。

ウィングブースターは翼によって飛んでいるのではなく、その付け根にある重力慣性制御装置によって浮遊している。それ故に、羽毛を模した極小ブースター群で構成されている翼は、あくまで飛行の補助と加速の為でしかない為、飛ぶ事自体は問題ない。

だが、明らかに飛行速度・回避運動能力は低下する為、これでこのまま飛んで逃げる事は不可能になった。

もっとも、ＰＳサーバントを取り換えれば、新たにウィングブースターを構築出来るナノマシンを得る事は出来る。

しかし、夜衣斗が二体の分裂体に襲われている間、オウキも別の分裂体に襲われており、新たなサーバントを出す余力がなかった。

夜衣斗が飛ぶと同時に、後と追って飛ぼうとするオウキに対して、弾丸の様に突撃した分裂体がいた。

腕部からシールドを出し、体当たりを何とか受け止めたオウキ。

二体の力が拮抗していたのか、一瞬動きが止まるが、銃をモチーフにした様なそのロボットの分裂体は、内部で強烈な爆発が起きたかの様に震え、全身の至る所から空薬莢を排出した。

その瞬間、銃ロボットのパワーが上がり、オウキが押され始める。

更に銃ロボットの背後から、銃ロボットを踏み台にしてオウキのシールドに両手を突っ込む分裂体が現れた。
額に角の様な突起と両肩に長方形の収納庫らしき物が付いたロボットと言うより、人に近い外見の分裂体は、不可視のシールドをまるで破く様に引き裂く。
丁度隻眼の剣士を退けた夜衣斗がその場面を目撃し、
「仕組みが違うのに何で破れる!?　武霊だからか!?」
思わずそう叫んだが、シールドを破った分裂体が肩の収納庫からナイフを取り出したのを見て、慌てて急降下。
同時に、
「セレクト！　パイルバンカーランス！　俺に向かって撃ち出せ！」
そう命令し、応えたオウキが腰の簡易格納庫を開き、そこから長大な棒を落下してきている夜衣斗に向かって撃ち出す。
夜衣斗が巨大な棒を両手で受け取ると同時に、オウキは銃ロボットに抱き着かれ、身動きが取れなくなり、ナイフを持った分裂体が迫る。
残ったウィングブースターをフルブーストし、落下速度を上げると共に、棒の先端部分が円錐状に変わり、ナイフを持った分裂体の背中を襲う。
だが、ランスの先端が分裂体の背中に届く直前で八角形の波紋状シールドが発生し防がれる。
もっともそれを見越していた夜衣斗は、
「穿てぇえええ!」
叫ぶ様に命令した瞬間、ランスの後部にブースターが現れ、爆発。
波紋状シールドにランスの先端が喰い込み、それによってナイフを持った分裂体は銃ロボットに押し込まれる様に落ちる。
二体の分裂体がまとまると同時に、ランスの先端が爆発。
ランスの中から杭が飛び出し、二体の分裂体を串刺しにし、大地に打ち止めた。

それを確認した夜衣斗はすぐさまランスから離れ、着地と同時に走る。
上空に上がった際に確認した分裂体の包囲の中で最も薄い方向へと向かい、オウキもそれに続く。
夜衣斗の前に立ち塞がる分裂体は一体。
ティラノサウルスの背中にステゴサウルスの背びれを持った様なワニ肌に近い怪獣。
それを見た夜衣斗は顔が引きつるが、足を止めるわけにはいかず、
（本物じゃないから大丈夫だよな！？）
などと思いながら更に接近。
夜衣斗とオウキが自分の方に突っ込んでくる事を確認した怪獣は、背びれを発行させ口を大きく開く。
「させるか！　ＰＳサーバント！　弾丸セレクト！　電流弾！」
夜衣斗の命令にＰＳサーバントは腰のスーツの一部を交換マガジンに変化させ、自動射撃モードにより瞬時に換装、照準、発砲。
撃ち出された弾丸は怪獣の身体に着弾する同時に、弾頭に入っていた液体が飛び散り、付着すると共に強力な電流を生じさせ、怪獣の身体を硬直させる。
それによって生じた隙を使い、
「オウキ！　弾丸セレクト！　冷凍弾！」
オウキの短機関銃のマガジンを換装。
間髪入れずに怪獣に向かって撃つ。
冷凍弾を大量に浴びた怪獣は瞬時に凍り、夜衣斗は通り抜けざまに振動刀で斬り付け霧散化させた。
同時に追ってくる分裂体達が大地に打ち止められている二体の分裂体に近付いた事を確認した夜衣斗は、
「パイルバンカーランス！　ブレイク！」
そう叫んだ瞬間、パイルバンカーランスが爆発。
串刺しにしていた二体の武霊と一緒に、鉢巻をした武闘家・銃をお手玉の様に使っていたガンマン・迷彩服に身を包んだ軍人・バッ

タを模した怪人・派手な格好をした医者・胸に七つの傷がある男・警察仕様のロボットを爆発に巻き込んで霧散化させた。

第一章『渇欲の武霊使い』１９

殺到した分裂体達の数はクイックアップ機能を使って確認した所、全部で五十体だった。

そんな数が俺に向けて一斉に襲い掛かってきたが、それぞれがそれぞれの意思で動いているのか、一切の連携がとれていなく、それぞれの攻撃が互いの行動の邪魔をしており、同時に襲い掛かってくるのは精々二体が限度。

麗華がちゃんと命令していないのか、多過ぎで命令出来ないのか、そこら辺はよく分からないが、おかげで何とか撃退出来ているが……腕が痛いな……逃げ切れるまで気力が持つか？

ＰＳサーバントの機能で本来の俺ではありえない動きを無理矢理させている為、その度に俺の身体は悲鳴を上げ、直ぐに治ってはいる。だが……

ＰＳサーバントにも治療機能はある。しかし、それは時間を掛けて安静な状態じゃないと出来ないものなので、戦闘中の今は負傷した個所をナノマシンで代用させる準治療機能と言える機能しか使えない。

今はＰＳサーバントの機能が使えているからいいが、もし、仮に不測の事態でＰＳサーバントの機能が停止したら……一気にダメージがぶり返す……果たしてその痛みに俺が耐えられるかどうか……正直自信が無い。

（昨日は腕を少し酷使した程度だったものね）

起きた時に多少腕に筋肉痛を感じた程度だったからな……

そんな事を考えながら、本日何度目かのクイックアップ。

これも後何度使えるか……

脳の機能をナノマシンで強制的に高速化するクイックアップは、限界まで使わなくても、使う度に脳はダメージを受け、その度に準治療機能で治療される。ただ、脳の準治療に使われるナノマシンは、

脳と言う重要器官に使われる為、他の部位に使われているナノマシンに比べ脆い所があり、クイックアップ機能によって生じる負荷に耐えられる仕様になっていない。その為、損傷すれば脳の活動に支障が来す場所が損傷するとそれ以上はクイックアップ機能が使えない様に設定されてるんだが……なんでそんな設定にしちゃったんだろうな？

（リアリティを求めてでしょ？）

それはそうだが……まあ、オウキを現実に使えるなんて思いもしなかったから、仕方がないと言えば仕方がないが……いやいや、今ここで貴重なクイックアップの時間を使って考える事じゃないな……対抗策を考えないと……

（逃げちゃダメなの？）

それは……考えなかったわけじゃないが……逃げ切れると思うか？

（逃げる事だけに専念すれば何とかなるんじゃない？）

どうだろうな……ぱっと見た感じ、基となった作品で飛べる設定な分裂体が半数以上いるみたいだったし……それに、逃げたら、町に被害が出ないか？

（町には自警団がいるじゃない。彼らに任せた方がいいと思うけど？）

いや、それはどうだろうな……

（どうして？）

自警団が駆け付けるまでどれくらい時間が掛かるか分からないからな……美羽さんは多分、あの赤黒いドラゴンと交戦中だろうし、俺が攫われた事を伝えられる余裕はない。だとすると、まず自警団に伝わるのは空中で戦闘している美羽さんの方。なら、こっちよりそっちに自警団が動いているだろうし、一昨日と昨日のはぐれ戦で、ただでさえ連休で少ない戦力が削られているだろうしな……

（それもそうだけど……やっぱり夜衣斗は優しいね……）

あのな……別にそんなつもりで逃げない訳じゃないぞ？

（そうなの？）

空中戦になったら、下からの攻撃も警戒しなくちゃいけなくなる。
昨日の骸骨犬の不意打ちみたいなのは、流石に勘弁だからな。
（うふふ。じゃあ、そう言う事にしておいてあげる）
……まあ、それに、ここなら後少しで森の中に入れる。
スローモーションで流れる俺の視界の先に、鬱蒼とした森林があった。
あそこなら、分裂体の攻撃も更に限定されるはずだ。
（確かにそうかもしれないけど……森ごと焼き払われたりしないかしら？）
……多分だが……それはないな……
（どうして？）
分裂体を出す前に、麗華は、オウキに執着している様だった。
（そうね。確かに妙に拘っている感じだったわね）
そして、いただきますって発言に、大量のそれぞれ違う分裂体。
そいつらがまるでそれぞれ独自の意思を持っている様な動きをして、それでいてまるで連携が取れていない。
それらから連想出来るのは、ただ一つ。
（何？）
麗華の武霊に『武霊使いが喰われると、その武霊が奪われる』。
しかも、多分、『武霊の本体ごと』。
（……じゃあ、あの分裂体達は、強制的にはぐれに近い状態にさせられているって事？）
そう考えるのが自然だろうな……元々がそれぞれ別の武霊使いの武霊だから、連携出来ないのは当然だし、はぐれに近い性質なら、武霊能力だと言う事も合わさって、麗華の意志力消費は多分、通常の具現化より低いんだろう。だから、一辺に五十体プラス本体一の武霊を出し、維持出来る。
（夜衣斗の言う通りの武霊能力なら……とんでもない特殊能力ね……）
ああ、だか、そのおかげで、俺の命を取る様な攻撃は出来ないし、

していない。
（確かにしていなかったわね）
まあ、それもオウキを奪うまではの話だろうが……
（ん～……でも、それでも一人と一体で戦うには多い数よ？）
確かにそうだが……
分裂体達を出した時の麗華の顔を思い出すと、その直前に見た顔より青白い顔をし、少し辛そうだった。
あの様子だと、もう一度同じ数だけ分裂体を出す事が出来ないだろうし、はぐれもどきだからか分裂体の具現化率は、少なくとも昨日のはぐれ剛鬼丸より低いんだろう……じゃなきゃ、あんな強力な基を持ってる武霊達に敵うとは思えないし、防御具現で具現化したオウキが破られないなんて事もないだろうしな……憑いていた武霊使い達のそれぞれのイメージの違いってのもあるだろうが……それに、ほとんどの分裂体の基となっている作品の事を知っているのは結構大きなアドバンテージだ……まあ、十数体ぐらい全く知らないのもいる事はいるが、
（じゃあ、倒すの？　全部？）
……やるしかないだろ……運命を変える選択であるオウキが奪われれば、どう考えたってこれから襲い掛かる死の運命を変える事なんて出来ないだろうからな。それに、オウキに執着していたと言う事は、ここで逃げても、また襲い掛かってくるだろうし……ここで倒せるなら倒すしかないだろ？
（ええ）
……まあ、何であれ、これが、昨日言っていたオウキを手に入れる事によって起きる新たな死の運命なわけだ。
（夜衣斗……）
大丈夫……オウキなら何とか出来る。そうだろ？
俺の心の問いに、オウキから否定の思いが返ってきた。
……えっと……まさか否定されるとは思わなかったな……
（うふふ。違うわ夜衣斗）

違う？
（この子はこう言いたかったの。自分だけじゃなく、『夜衣斗と一緒なら何とか出来る』って）
サヤの言葉に、オウキが同意の気持ちを伝えてくる。
……ふっ
その思いに、俺は思わず心の中で笑みを浮かべてしまった。
ああ！　分かったよ！　一緒に、この運命を変えようオウキ！
オウキから同意の気持ちと共に、
まずは！
クイックアップ機能を切り、森に向かって駆ける。
戦場をこっち有利な場所に！
そう思って、森に入ろうとした瞬間、
（夜衣斗！）
目の前にセーラー服姿の女性分裂体と、推進機関が付いた大剣を持った少女剣士の分裂体が現れた。
二体とも見た事がないキャラだが……オリジナルタイプか？
反射的にそう考えると、少女剣士が柄のトリガーを引くと大剣の推進機関が火を噴き、とんでもない速さで俺に襲い掛かる。
ＰＳサーバントの自動回避モードが起動し、俺の身体を強引にスライディングする様に避けさせ、後ろに続いていたオウキは正面飛びで大剣を避けた。
それを見た少女剣士は、柄の別のトリガーを引き、逆噴射！？
戻る大剣がオウキを襲うが、それより早く俺は自動射撃モードを起動し、少女剣士に対して強引な姿勢で撃つ。
その瞬間、少女剣士の姿と共に、女子高生の姿も掻き消える。
っく！　やっぱり女子高生の分裂体はテレポーターか！？
そんな事を思いながら、クイックアップ機能を起動。
スローモーションの世界の中を俺とオウキの副眼カメラでチェックし、オウキの背後に現れた二人を確認。
クイックアップ機能を切ると同時に、

「セレクト！　ウィングブースター！」
オウキの背中に少しだけウィングブースターを出させ、一気に加速。
空を斬り、地面に突き刺さる少女剣士の大剣。
ほぼ同時に、振動刀を拳銃に変えた俺が二人に向けて撃つ。
今度はテレポーテーションが間に合わず、二人が霧散化するが……さっきも思ったが、あまり気持ちのいいもんじゃないな……知っているキャラクターを倒すのは勿論、人の姿をした相手を、いくら人でないからと言っても……どうしようもない不快感を感じる。
唯一の救いは、全身全てが赤色である事だろうか？
そのおかげでそれほど躊躇わずに撃てている気がするが……じゃなくても撃てていたら、それはそれで問題だな……
そんな事を思いながら、スライディング状態から一気に立ち上がり、ウィングブースターを仕舞って着地したオウキに続いて森に入った。
その瞬間、オウキから警告の思念が届き、ＰＳサーバントが防御モードに入り、全身硬直する同時に、強烈な電撃に襲われた。

第一章『渇欲の武霊使い』２０

夜衣斗が森に入ったのを確認した青い顔の麗華は、おもむろに服のポケットからピルケースを取り出した。
それは弟礼治から、決して人前では出してはいけないと言われている物。
その理由を麗華は知らないし、聞かないし、疑問にも思わない。
ただ言われた通り、誰一人見てない時にしか取り出さない。
だから、星波町の住人は知らない。
そのピルケースに入っている錠剤が、
麗華はピルケースから錠剤をダイレクトに口に入れ、音を発てて噛み砕き、飲み込んだ。
麗華の『特殊性を支えている物』だとは、
錠剤を飲んだ麗華の顔色が見る見る間によくなった。
知らない。
当然、何も知らない夜衣斗は――

木の枝に入ったオウキと夜衣斗に強烈な電撃を放ったのは、ギザギザの尻尾を持った大きなネズミの様な分裂体だった。
ＰＳサーバントの防御を少し超えていたのか、痺れを感じた夜衣斗は、思念で、
（オウキ！　弾丸セレクト！　貫通弾！　セレクト！　散弾銃！）
オウキに散弾銃を取り出させ、逃げるネズミ分裂体に発砲。
それまで銃撃の反動を物ともしていなかったオウキの腕が、貫通弾の反動で上がる。
貫通弾は極限まで強度と加速を求めて作られている為、それによって生じる反動が酷く、かつそれによって生じる超加速により弾丸そのものが空気摩擦で直ぐに消失してしまう射程距離が極端に短い欠点があった。

だが、それによって生じる貫通力は、あっさり木々を貫通させ、ネズミ分裂体を霧散化させる。

「あ、あんなキャラまで……」

痺れが残る口で思わずそう呟いた夜衣斗は、上手く動かない身体を確認し、副眼カメラで背後を確認。

パイルバンカーランスの爆発によって上がる爆煙から、重量系の分裂体達が次々と現れてくる事を確認した夜衣斗は、

「セ、セレクト！　シールドサーバント六機！」

オウキの肩からシールドサーバントを六機出させ、森の前に不可視の壁を作り出す。

それを見た頭部に操縦席を持つ二体のロボットと胴に獅子の顔を持つロボットが両拳を突き出した。

その瞬間、腕がまるでロケットの様に飛び、シールドサーバントの不可視の力場に当り、突き刺さったかの様になる。

直後、不可視の力場にひびが入り始め、それを見た夜衣斗は眉を顰めながら、クイックアップ機能を起動させた。

不可視のシールドのひびが更に大きくなった瞬間、夜衣斗は森に向けて走り出した。

一瞬、森の木々に遮られ、夜衣斗の姿を見失った分裂体達だったが、狸の様なロボットが自らの腹に付けられているポケットからドアを取り出し、開いた瞬間、夜衣斗の前に同様のドアが現れ、二つのドアの空間が繋がる。

夜衣斗の前まで繋がったドアに一斉に人間タイプの分裂体達が流れ込む。

最初に飛び込んだ左目の下に傷がある麦わらを被った少年が、両腕を後ろに振り切ると、その両腕がまるでゴムの様に伸び、一気に伸縮し、とてつもない速さで夜衣斗に掌底を叩き込んだ。

後ろに吹き飛ばされた夜衣斗の背後に、一瞬の内に着物を着た出刃包丁の様な大きな刀を持った少年が現れ、それを確認した夜衣斗

は両手の拳銃を振動刀に変え、すくう様に放たれた斬撃を受け止める。

刀自体は防ぐ事が出来たが、同時に刀から斬撃が飛ばされ、それをまともに受けた夜衣斗は上空に吹き飛ばされてしまう。

更に上空には、まるで空に立つ様に浮いている亀と書かれた武道着を来た青年が待っていた。

飛ばされた斬撃のダメージを防ぐ為に硬直していた夜衣斗に向けて、両手首を合わせた手を腰から溜めて突き出した瞬間、両掌からエネルギー波の様な物が一直線に放出され、夜衣斗をグラウンドに向けて吹き飛ばす。

吹き飛ばされた夜衣斗がグラウンドを飛び越えようとした瞬間、グラウンドから真ん丸い団子っ鼻にタラコクチビルのトサカが付いた様なマスクを被ったレスラーが飛び出し、夜衣斗を捕まえた。

レスラーは、捕まえた夜衣斗の両股を手で掴み、頭上に逆さに持ち上げて、首を自分の肩口で支え、落下体勢に入る。

捕まった夜衣斗を助ける為に、オウキがようやく森からウィングブースターで飛び出すが、その前にサーフボードに乗ったロボットが現れ、ブーメランの様なナイフでオウキに斬り掛かった。

オウキは空中に飛び出した直後だったせいかまともにナイフの斬撃を受け、グラウンドに墜落する。

そこにV字型鋭いアンテナを付けた様々なロボットが殺到し、それぞれが持つ近接戦闘のエネルギー兵器を突き刺そうとした。

ほぼ同時に夜衣斗に技を掛けたレスラーがそのままグラウンドに尻餅をつくように着地し、それによって生じたダメージを防ぐ為にPSサーバントが再び硬化。

身動きが取れなくなった夜衣斗に、レスラー・オールバックの学ランを着た少年・頭部にトサカの様な突起に、胸部にライトの様な物が付いた全体のデザインがそれぞれ違う二体・魔女の様な格好をした美少女・様々な宝石装飾を身に付けた美少年・髭の芸術家が殺到し、完全に拘束。

夜衣斗を捕まる事に成功した麗華は、嬉しそうに笑みを浮かべ、
「ほら、お食べ」
そう言って自身のスライム武霊を夜衣斗へと向かわせた。
スライムは、不定形の体とは思えないほどの速度で麗華の下から夜衣斗の下へ移動し、拘束している分裂体達ごと夜衣斗を包み込んだ。
その瞬間、
「ドッペルゲンガーサーバント！　ブレイク！」
夜衣斗の声が、『森の中』から発せられ、捕まったオウキ・夜衣斗の姿が爆発する。
爆発に巻き込まれた分裂体達が一斉に霧散化すると共に、森の手前に張られていたシールドが消失し、夜衣斗が小さく出したウィングブースターで地面の僅か上をすべる様に飛び出した。
不意打ちを喰らって満足に動けなくなった夜衣斗は、森の中でのゲリラ戦からすぐさま作戦を変更し、、ドッペルゲンガーサーバントを二機出した。
そして、実体を持てるナノマシンで夜衣斗とオウキの姿に化けさせ、更に、ステルスサーバントで姿を隠し、偽物を森の中へと走らせた。
夜衣斗はこれによって電撃による痺れの回復時間を稼ぐと共に、二機が偽物だとばれなければ、
（ドッペルゲンガーサーバントの自爆機能で一気に分裂体の数を減らせればいい、ばれたとしても、その時は予定通りゲリラ戦に移行すればいい）
程度にしか考えていなかったが、予想以上に上手く行ったのを見て、夜衣斗は一気に攻勢に転じる事にした。
自分達に突っ込んでくる夜衣斗の姿に、両手を飛ばした三体のロボット達は、戸惑った様子を見せる。
彼ら分裂体に与えられた命令は一つ。
夜衣斗を『殺さずに捕まえる事』。

その為、威力の高い攻撃方法しか持たない三体のロボット達は、シールドが一気に消失した事によりあさっての方向に飛んで行った両腕がまだ戻らない事も重なって、攻撃を躊躇してしまう。

夜衣斗はその隙に更に接近し、三体が一直線になる様な位置に来ると、両手に持った武器を構える。

超低空飛行をする夜衣斗の両手には、オウキ用の巨大なランスが握られていたが、先程使ったランスとは違い、側面や先端などに推進力機関が付いているランスだった。

「ブーストランス！　点火！」

夜衣斗がそう叫んだ瞬間、ランスに付いた推進力機関が火を噴き、一気に加速。

そのまま三体を纏めて串刺しにした。

ブーストランスと名付けられているそのランスは、完全に突撃用のランスで、突き刺した瞬間に、敵の内部に入り込んだ部分の推進力機関が爆発する様に火を噴いて突き刺した時以上のダメージを相手に与える機能もあり、それによって基となった作品では頑丈なはずの三体の分裂体を霧散化。

更に夜衣斗は自身のウィングブースターを使い、ブーストランスの推進方向を調整。

森から飛び出してきた分裂体や、空にいた分裂体の追撃を軽々と交わし、暫く翻弄した後、ブーストランスの推進力を利用してグラウンドの空へと上がる。

それと同時にブーストランスの燃料が切れたのか、推進力機関が止まり、ウィングブースターの機能で空に止まる夜衣斗。

唐突に動きを止めた夜衣斗に、分裂体達は特に不審に思わず、捕まえる為に殺到する。

その様子に夜衣斗は笑みを浮かべた瞬間、夜衣斗の下に集まろうとしていた分裂体達が一斉に霧散した。

遅れて複数の銃撃音がし、夜衣斗が見える範囲での分裂体達は呆気なく全滅。

残ったのは夜衣斗のドッペルゲンガーサーバントで飛び散ったスライムの武霊だけだが、もう分裂体が出せないと予測している夜衣斗は一息吐いた。

第一章『渇欲の武霊使い』２１

ここまで上手く行くとはな……ずっとオウキの話を考えてきたおかげか？

（きっとそうだよ）

……まあ、だとしても……良い事なのか悪い事なのか……

（とりあえず素直に喜ぶ状況じゃない？）

まあ……そうだよな……

サヤに言われ、素直に喜ぼうと思うが……どうも素直に喜べない。

何故なら、倒した分裂体の中にお気に入りの作品のキャラクター達とかもいて、それを武霊とは言え、襲い掛かられ、倒してしまったからだ。

正直、ファンとしては心中穏やかじゃない。

勿論、喜びの感情はある。

圧倒的な危機的状況を乗り切り、助かった喜びや、咄嗟に考えた作戦が上手く行った事に対する喜びとか……

俺とオウキの偽物を自爆させた後、俺はオウキから事前に出したブーストランスを持ってグラウンドに飛び出した。

正直、オウキを伴わずに単身で突撃する事は、かなり不安と恐怖感が在ったが……ドッペルゲンガーサーバントの単純な人工知能では『受ける囮』は出来ても、避けて『引き付ける囮』は出来ない為、湧き出る感情を押し殺して囮となった。

狙いは分裂体を出来るだけ開けた場所……グラウンドに集め、一気に狙撃して倒す事。

その為、オウキにはステルスサーバントで隠れながら、スナイパーサーバントを残った分裂体の数だけ出させて待機。

勿論、オウキ自身にも狙撃銃を持たせ、狙い通り俺に殺到した分裂体を狙撃させた。

目論見通り、全ての分裂体を倒す事が出来て、ほっとしている事

はほっとしているが……さて、
ちらっと地面で呆然と俺を見ている麗華を確認。
どうする？
（どうするもこうするも……もう彼女は無力化出来た様なものでしょ？　彼女の事は自警団に任せて、美羽ちゃんを助けに行った方がいいんじゃない？）
確かにそうだが……美羽さんが危険人物って言ってたのが気になるな……ん～武霊を奪うって、罪になるんだろうか？
（え？　……まあ、他人の物を奪っているから……一応泥棒よね？）
そう言う事なんだろうか？　……まあ、なんであれ……念には念を入れた方がいいか……
そんな事を思っていると、ウィングサーバントを出したオウキが森の中から上がってきた。
こっちに合流しようとした様だった。
その姿を見た俺は、危険人物を拘束する為のサーバントを出させようとした瞬間、オウキの足元の森から何かが飛び出した。

その隻眼の剣士の分裂体は、受けた銃傷を、腰に付けたポーチから出した鱗粉の様な粉で直し、銃撃によって吹き飛ばされた森の中から機会を窺っていた。
そして、夜衣斗が隻眼の剣士以外の分裂体を倒し、完全に油断したのを確認すると同時に、彼の甲冑に変化が起きる。
それまで無かったはずの兜と籠手がマントの内側から現れ、瞬時に身に付けると、まるで鎧の獣の様な姿になった。
そして、夜衣斗の下へ向かっているオウキの姿を確認すると、普通の人間ではありえない速度で地面と木を蹴り、瞬く間にオウキの眼前に現れた。
現れた分裂体にオウキが反応するより早く、義手だったらしい左

腕から大砲が現れ、撃つと共にその反動を利用して身の丈以上の分厚い大剣を振るった。
オウキは咄嗟に振動刀を出して受け止めるが、その振動刀ごと隻眼の剣士の大剣はオウキの胴体を切り裂き、真っ二つにしてしまう。
更に真っ二つにしたオウキを足場にし、唖然としている夜衣斗へ一気に飛び、大剣の柄で殴り付け、地面へと叩き落とした。

不意打ちで地面に叩き落とされ、俺はＰＳサーバントの防御機能で固まった。
防御機能のおかげで俺自身にダメージは全くないが、それにより周囲で起きた更なる脅威への対応に遅れてしまう。
副眼カメラに映る周囲の光景には、もう作り出す事は出来ないと思っていた分裂体達が、ドッペルゲンガーサーバントの自爆により飛び散ったスライム武霊の破片から次々と現れた。
読み違えた！
そう思うと共に、俺は自分の迂闊さと間抜けさを呪った。
いくらオウキを手に入れ、昔からオウキの戦う姿を思い描いてきたとは言っても、結局は戦いの素人。
そんな素人が憶測だけで無力化したと思い、それを基に行動していた。
いや、それ自体は間違っていない、間違っているのは、いや、もし戦いの玄人なら、いくら無力化したからと言っても、敵を目の前にした状態で油断なんかしないし、不測の事態に備えて、常に緊張感を持っているはずだ。
そう言う知識は在ったはずだろ！？　何で実践しないよ俺！
そんな今更な後悔をしながら、俺は防御機能から自由になった身体を一気に動かし、ウィングブースターで逃げようとした。
だが、時間を惜しんでＰＳサーバントの交換をしていなかった為、ウィングブースターをフルに広げる事が出来ず、それによって推進

力が不足したか、飛び上がった直前で足の速い分裂体に足を掴まれ、僅かに飛んだだけで止まってしまう。
そこに再び現れた分裂体達が俺に迫る。
咄嗟にクイックアップ機能を起動させるが、明らかに対抗策を練るのに遅過ぎる距離であり、副眼カメラで確認した空にいるオウキも、胴から真っ二つにされ、斬られた所から霧散化していた。
例え再具現化しても、防ぎ切れる分裂体の密度ではなく、逃れられる術は無い。
そう思ってしまった。
だが、直ぐに、考えを改める。
これが新たな死の運命であるのなら、オウキを使う事によって乗り越える事が出来るはずだ。
この状況になったのは、俺の油断が大きい。
最初に攫われた時に、直ぐに逃げていれば、分裂体を倒し切った直後に逃げていれば、こんな状況にならなかた。
スライムと言うゲームではよく最弱に設定されているキャラの武霊だったから、
圧倒的な数と、次々と襲い掛かる分裂体を倒し切った安心感が、俺を油断させた。
つまり、オウキによって引き起こされた状況ではなく、俺によって引き寄越された状況。
油断を含めての死の運命だとするなら、まだこの状況でも、切り抜ける手段はあるはずだ！
考えろ！
考えろ黒樹夜衣斗！
切り抜ける手段を手繰り寄せるヒントを得る為に、ゆっくり迫る分裂体達をよく見て、改めて考える。
その多くがアニメや漫画・特撮などの主人公達。
その姿は赤いスライムから分裂した為か、全てが赤い。
赤いからと言っても、多少の誤差や融通が利いても、その能力は

基となった作品とほぼ変わらない。
むしろ、武霊になったからか、攻撃力が上がっている様にも見えた。
そんな武霊達を分裂体達として同時に出せるという事は、麗華のセリフも考えて、やっぱり武霊使いから武霊を奪ったと考えるのが自然。
そして、ただ奪っただけなら、美羽さんが危険な人物と言うだろうか？
奪った後に何かをする？
……いや、これは今考える事じゃないな……そもそも、どうやって武霊を奪う？
さっきから分裂体達や本体スライムは、俺をスライムに取り込ませよう・取り込もうとしていた。
それはつまり、さっきの連想通り、赤いスライム喰われれば、武霊が……奪われる？　……喰われる。いや、取り込まれれば！？
サヤ！
（え？　っな！　何！？）
俺が見ている物をサヤも大体見て、覚えているよな！？
（ええ、勿論）
何年か前に、ネット上の動画サイトで、ネタとして使われた十年以上前に放送された深夜アニメが在ったよな？
（え？　深夜アニメ？　……十年前の夜衣斗は深夜アニメとか見てなかったでしょ？）
だから、動画サイトに投稿されていた断片的な、加工された動画を見ていたはずだ。
（動画サイト？　……あ！　もしかして！）
ああ！　そのアニメの名前は、確か、た
不意にクイックアップ機能が切れる。
連続で使い過ぎて、脳のダメージが使える限界を越えたのか、さっき使ってたより機能が切れるのが早い。

くそ！　まだ確証が得られていないって言うのに！
瞬く間に飛び立とうとしていた身体を地面に叩き付けられ、更に抑え込まれ、俺は一切身動きが取れなくなった。
抑え込められながら、副眼カメラで赤いスライムがこっちに迫ってくるのと、オウキの霧散化が胸の所まで起きている事を確認すると共に、思考する時間すらない状況だと悟り、俺は咄嗟に叫んだ。
「セレクト！　スピーカーサーバント！」
俺の命令に応え、完全に霧散化しようとしていたオウキの肩からギリギリスピーカーの様な円盤が飛び出し、俺の前に素早く移動。
俺を抑え込んでいる分裂体達がスピーカーサーバントに反応するより早く、
「音声調整！　対象高神麗華！」
俺の言葉をスピーカーサーバントが拾い、
「コード！」
俺の声を『高神麗華を演じている少女の声に変換』させ、
「な！　止めろ！」
麗華が原作通りの驚きを見せた事に確信を持って続く言葉を口にした。
「『高神麗華は嗤う』！」

第一章『渇欲の武霊使い』２２

ＢＢドラゴンの全身から血が吹き出し、それが鋭い針となる。
それを見た美羽が慌てて、
「防御鱗壁！」
指示すると同時に、血の針がコウリュウに向かって射出された。
武霊の多くは、初めて具現化した際は基となったイメージ通りの武装をしている。
だが、時より武霊の中には武霊使いと共に戦う内に、その武霊使いの望みや新たに生じたイメージを糧にし、基になったイメージにはない能力などを変化・追加する事があった。
そして、コウリュウもその姿の基となった赤竜物語において、ファイアブレスと念動力しか使えなかったが、今では星波町全体を見回してもこれほど追加・変化した武霊能力を持つ武霊はいないと言われるほど多くの武霊能力を持つ。
その一つが、『防御鱗』。
コウリュウの全身に生える鱗を一瞬の内に生え変わらせ、落ちた鱗を念動力で操り防御手段として使う武霊能力。
美羽の指示に応えたコウリュウは、背中の鱗が一気に生え変わらせ、落ちた鱗達を自身の前に念動力で移動させ、固定。
出来た鱗の壁に、ＢＢドラゴンから射出された血の針は防がれるが、幾つかの針が鱗を貫通して、半ばで止まる。
血の針が防御鱗を貫通してしまった事に気付いた美羽は、慌てて、
「コウリュウ！　急上昇！」
指示を出すと同時に、防御鱗を貫通した血の針が形を失い、急激に膨れ上がる。
貫通しなかった周りの血の針を吸収し、貫通した部分を通り、コウリュウ側に血が集まっている様だった。
そうなる事を何度も高神礼治と戦った事がある美羽は分かってお

り、そして、その次の行動も予想出来た。
だが、コウリュウが翼を更に羽ばたかせ、上空に上がろうとするより早く、膨張した血が薄く広がり、そこからＢＢドラゴンが現れ、血の剣を出てきた勢いのままに突き刺そうとする。
夜衣斗をどこかへ送ったのと同じ、血の転送ゲートを使ったこの攻撃手段は、礼治が良く使う手だったが、そうだと分かっていても絶妙なタイミングで使われる為、避け難い。
その事を何度も体験していた美羽は、咄嗟にコウリュウは上昇を止めさせ、回転させ剣突を避け、ＢＢドラゴンの首を逆鱗剣で斬り付ける。
しかし、ＢＢドラゴンは急降下して逆鱗剣を避け、身体を反転させ口をコウリュウに向ける。
「コウリュウ！」
美羽の呼び掛けに応え、コウリュウが口を開き、
「アイスブレス！」
冷気のブレスを吐く。
同時にＢＢドラゴンが黒い炎のブレスを吐き、二つのブレスがぶつかり合い、爆発。
強烈な爆風で吹き飛ばされるコウリュウと美羽。
コウリュウが何とか体勢を立て直すが、翼と足に黒い炎が纏わり付いていた。
ＢＢドラゴンのブレスは、その血を燃やした粘着性のある炎のブレス。
水に付けても燃え続けるブレスなので、美羽はアイスブレスで鎮火させようとしたようだが、急激な温度差で激しい爆発を生じさせてしまう結果になった様だった。
コウリュウが現在吐けるブレスは全部で『七種類』あり、吐かせるブレスの種類を間違えたと美羽は後悔しつつ、
「コウリュウ。一瞬だけ具現化を解くよ」
美羽がそう言って、コウリュウの具現化を一瞬だけ解き、直ぐに

再具現化。
それによってコウリュウの身体に付いた黒い炎が身体から離れる。
こうでもしないとＢＢドラゴンの帆脳から逃れる事が出来なかったのだが、美羽は一昨日も、昨日もはぐれ戦に参加しており、その時の具現化で多くの意志力を使っていた。
（このままこいつと戦って意志力が最後まで持つ？）
そんな心配を美羽がしていると、不意に何かの影の中に入った。
反射的に美羽が見上げると、そこにはコウリュウより人型に近いドラゴンの姿。
逆光でその色は分からなかったが、美羽はその形に見覚えがあり、
「『ブルースター』！？」
思わず驚愕の声を上げた。
そのブルースターと呼んだ人型のドラゴンが、美羽に対して拳を振り下ろす。
一瞬の動揺。
それにより指示する事が遅れてしまい、コウリュウは肩を殴られ、美羽はその衝撃で背中から吹き飛ばされてしまう。
吹き飛ばされながらも、美羽は思わず人形のドラゴンを再度確認すると、
（……違うブルースターじゃない……）
美羽達を上空から不意打ちしたのは、ブルースターと言う武霊に似せて作られたＢＢドラゴンの血だった。
その事に美羽は一瞬安堵するが、直ぐに怒りを覚える。
何故なら、ブルースターは『美羽と因縁がある武霊使いの武霊』であり、その事を卑劣にも利用されたからだ。

赤井美羽には兄の様に慕っていた幼馴染がいた。
二個上の、母親同士が幼馴染であり親友。加えて、住んでいる場所も近所だった関係で、ずっと一緒にいた男性。
そんな関係上、自然と美羽は彼の事を本当の兄の様に慕い、中学

に入る頃には、その慕う気持ちは恋心へと変わっていた。
その思いに気付いた時、美羽躊躇なく、告白したが、直ぐに断られてしまう。
他に好きない人がいる、と。
その事にショックを受けはしたが、彼が好きになった人なのだから、きっと自分より素敵な人なのだろうと思い、美羽は自分の心を押し殺し、彼の恋を応援した。
そんな事があっても、彼は変わらず、それまで通り美羽に接してくれて、その事に強い切なさを感じ始めた今年の春休み。
突然、彼は、自分の武霊ブルースターを使い、『自分と美羽が所属している部活の仲間を襲った』。
ブルースターは、高神麗華の武霊と同じ『武霊使いから武霊を奪う事が出来る武霊能力』を持っていた。
少し違うのは、麗華の武霊が、奪った武霊を分裂体として出すのに対して、ブルースターは『奪った武霊の武霊能力』を使う事が出来た。
そしてもう一つ、大きな違いがある。
それは麗華の武霊は、『武霊使いを殺して奪い』、ブルースターは『ただ奪うだけ』。
もっとも、だからと言って、人の、例えそれが武霊であっても、奪うのは犯罪行為。
そう判断した武装風紀委員会と星波自警団は彼を捕まえようとした。
美羽は、突然犯罪行為に走った彼を止める為に、奔走し、誰よりも早く彼の下に辿り着き、訳を問い質し、止める様に説得。
だが、訳も話さず、止めるどころか、説得する美羽の武霊を奪う為に襲い掛かってきた。
美羽は仕方なく応戦し、互いの武霊が強力だった事もあり、町に甚大な被害を出してしまう。
町を勝手に修復するはぐれもどきの源さんでも、修復し終えるま

で一週間近く掛かるほど被害を出した戦いだったが、それでも相打ちだった。

上空で互いの武霊が霧散して、意識を失って地面に叩き付けられ、美羽が次に気が付いたのは、病院のベッドの上。

そして、それ以降、彼に襲われた者も、彼を目撃した人もいない。

行方不明となってはいたが、美羽はこれで彼が諦めるとは思わなかった。

理由も、目的も、何も分からないが、激突したその時、美羽は彼の瞳に、強い決意を宿している様に見えていた。

だから、春休み以降、美羽は常に気に掛けていた。

彼が、いつ現れても良い様に、今度こそ美羽が彼を止める為に、決意を胸に秘め。

その胸に抱いていた決意を利用された事に、激怒した美羽は、

「コウリュウ！」

美羽の怒りに応えて、殴られた事により急速に落下していたコウリュウが翼を無理矢理動かし、反転。

「レーザーブレス」

血で出来たブルースターの偽物に、コウリュウが使える七つのブレスの中で最強の破壊力を持つ光線のブレスを吐く。

一瞬で真っ二つになる偽物のブルースター。

レーザーブレスは威力が高いが、貫通性が高く、それ故に、偽物を作る為に作られた血のほとんどは蒸発しなかった。

美羽は自分の失敗に直ぐに気付いたが、その時には残った血が広がり、そこからＢＢドラゴンが飛び出してきた。

現れたＢＢドラゴンのその手には、血の槍が握られ、レーザーブレスを吐いた直後の為に硬直していたコウリュウに突き刺そうとする。

「その程度で！　コウリュウ！　レベル２！」

美羽の倍加具現の命令に応え、コウリュウが一気に巨大化し、今

まで全長三メートルだった姿が全長十メートル以上の姿になった。
それによって起きた倍加の膨張により、迫っていたＢＢドラゴンは弾かれ、無防備になったが、コウリュウは追撃をせずに、落下している美羽を追い、キャッチ。
その間にＢＢドラゴンもレベル２になり、コウリュウに向かってブレスを吐く。
コウリュウも迎え撃ち、アイスブレスを吐き、両者のブレスが激突する。
互いのレベルがレベル２だった為、先程より大きな爆発になったが、今度は同時に防御鱗を展開させていたのでコウリュウに黒い炎が付く事はなかった。
だが、レベル２・立て続けに吐かせたブレス・防御鱗を連続して使ったせいで、美羽の意識が一瞬遠退いてしまう。
普段の美羽なら問題ない一瞬だったが、連日の意志力消費と怒りに身を任せてしまったせいで、それが大きな隙を作ってしまった。
爆炎の中からＢＢドラゴンが現れる。
その両手には、血で作った巨大な爪が形成されており、コウリュウに向かって振りかざす。
コウリュウは美羽の意識の薄れに伴って一瞬具現化が解け掛けていた為、動きが遅れ、防御出来ずに爪を受けてしまう。
まともに爪で引き裂かれ、咆哮を上げるコウリュウ。
胸に多重の×傷が出来、血が噴き出すが、具現化が解けるほどのダメージではなかった。
更に言えば、コウリュウの手を狙えば美羽を安易に殺せる距離にいたはずで、礼治が殺す事に躊躇う理由はない。
その事に美羽が疑問に思うと同時に、ＢＢドラゴンが不意に間合いを開けた。
コウリュウに抱えられている美羽の位置からでは、ＢＢドラゴンの背中に乗っている礼治の様子は見る事は出来ない。
だが、ＢＢドラゴンが再び襲ってくる気配はなく、ただコウリュ

ウの動きを注視している様だった。
これではＢＢドラゴンを抜き去って夜衣斗の下へ駆け付ける事は出来ないが、星電で無事を確認する事は出来る。
そう判断した美羽は、すぐさま先程登録したばかりの夜衣斗の星電へ、
（無事でいて、夜衣斗さん！）
祈る思いで掛け、
「「……はい」」
あっさり出た事に拍子抜けをしたが、直ぐにはっとなり、
「無事ですか夜衣斗さん！　麗華は！？」
そう言うと、夜衣斗は美羽の思考を停止させる様な事を言った。
「「……えっと……倒しました」」
「はい？」

第一章『渇欲の武霊使い』２３

「一体なんです？　こっちはお楽しみの最中だったんですが」
「「まずい事になった」」
「……なんです？」
「「今回のターゲットが高神麗華を『知っていた』」」
「まさか……」
「「弱点を突かれ、今、『最後の場面』だ」」
「……ッチ。人形は所詮壊れていようと人形か……」
「「どうする？」」
「どうするもこうするもないでしょう……そろそろ『アレ』にも飽きてきた頃ですし……『餓鬼共』から『預かった奴』があったでしょう？　『あれ』を使いましょう」
「「……いいのか？　『あれ』は試作品で、どんな副作用があるか分からないって話だったろ？」」
「っは！　言ったでしょ。飽きたと……あなただって、『アレ』が無事に捕まると迷惑でしょ？」
「「まあ、多少はな」」
「だったら、都合が良いじゃないですか？」
「「……それもそうか……では、使うぞ？」」
「どうぞ」

「うふふ……結局……何も、何も手に入らなかった……」
そう言いながらへたり込む高神麗華……の振りをしている少女。
あまりにも完璧な演技に、俺は思わず頬を掻いていると、不意にＰＳサーバントの脳内ディスプレイにモザイクで何か分からないマークが現れ、それ共に携帯の着信音らしき音が聞こえてきた。
……星電？

？いつも自分が使っている携帯電話と違う着信音だったので、直ぐに今日渡された星電が鳴っていると分かったが……

ＰＳサーバントは、着る際にナノマシンで着用者が着ていた服を分解して取り込んでいる。その際に機械類を身に付けていれば、その機能を取り込んで、脳内ディスプレイで使える様にする……設定だったが……ん～……これ、星電で合ってるよな？

（ええ、星電よ）

……だとすると、美羽さんか？

（ええ、そうみたい）

だよな……こうして掛けて来たって事は無事って事か……

そんな事をほっとしながら、脳内ディスプレイ内にいるアバターを操作して、星電らしいマークに触れ、

「……はい」

と恐る恐る声を出してみる。一瞬の間の後、

「「無事ですか夜衣斗さん！　麗華は！？」」

すると、正しく星電は機能している様で、緊迫した美羽さんの声が聞こえてきた。

俺も彼女が無事だった事にほっとして、

「……えっと……倒しました」

とりあえず簡潔に問われた事に答えた。

「「はい？」」

言った意味が分からなかったのか、若干間抜けな声を上げる美羽さん。

（分かったからじゃない？）

なるほど……まあ、そりゃそうだよな……

十数年ほど前に、高神麗華は嗤うと言うアニメが一部の地方局深夜帯に放送されていた。

俺がアニメを熱心に見出したのは、中学に入ってからなので、当然俺は直接見た事はないが、間接的に知っていると言うか……

内容は、どこぞの大富豪の令嬢・高神麗華が、自身が持つ財力と技術力を使って、他のアニメ世界に乗り込み、そのアニメの主人公に成り代わり暴れ回ると言うとんでもない問題作。

舞台となる他のアニメと言うのが、ほぼ有名どころのパロディばかりで、そのアニメの関係者・ファンからクレームが殺到し、結局放送予定を大幅に削って打ち切りの様に終わったらしい。しかも、その最終回が、そのほとんどが謎の独白で終わると言う、訳が分からないものだったらしく……作品の内容も内容だが、かなりとんでもない最終回のおかげで、ネット上でネタとして使われた時期があり、その断片と言うか、残滓を俺は見て、高神麗華は嗤うを知ったんだが……まあ、普通は知らないかなりマイナーなアニメである事は間違いない。

で、そのアニメの主人公高神麗華が主人公に成り代わる為に使ったのが、ただ単にペットと呼んでいた赤いスライムで、まさしく彼女の武霊そのものだった。

その能力も、主人公を取り込んで、その服装を溶かして奪うと共に、その主人公の能力などを奪い、スライムが自身の身体を使って奪った服装や能力などを再現し、高神麗華に使わせると言うのだった。

作中に置いても、その能力は絶大で、ほとんどの主人公達は何の抵抗も出来ずに主人公を奪われた。

反撃をした主人公もいる事はいた様だが、反撃によって分裂したペットスライムからそれまで奪ってきた主人公達の力が分裂体として現れ、結局は捕まり奪われる。

そんな強力無敵なペットスライムだったが、唯一の弱点があった。

それがペットスライムが万が一暴走した場合を想定して設定されていたと言う『自爆コード』

つまり、麗華の声で「高神麗華は嗤う」と言うだけで、ペットスライムは爆発四散し……最終回はその後、最後まで謎の独白……今、目の前で高神麗華を名乗り、そのペットスライムの武霊を持ってい

た少女が、まさにその謎の独白をしていた。
あくまで俺は断片しか知らないアニメだが、ネタとして動画サイトに上がっていた最終回の一シーン通りの、一字一句間違いなく喋る少女。
本人がこれだけ真似ているから、ペットスライムも基となったアニメ通りの設定が付属してしまったのだろう。
俺が最終回通りに、ペットスライムの自爆コードを口にした瞬間、俺を抑え込んでいる分裂体は勿論、本体でもある赤いスライムも爆発四散した。
ここまで忠実という事は、ペットスライムの武霊は、やはり原作通り取り込んだ相手の服と力を奪う武霊能力を持っているんだろう。
それはつまり俺が相手をした分裂体達は、予想通り元は他の武霊使いの武霊だったって事なんだろうが……ん～……やっぱり武霊でも窃盗罪になるって事なんだろうか？　高神麗華をここまで真似ているのだから、武霊を奪った後の武霊使いは『その場に素っ裸で放置されている』はずだろうし……そこら辺も罪として数えられているとか？
そんな疑問を改めて思った時、美羽さんから電話があった。
とりあえずどう倒したか簡潔な説明をすると、
「「ちょっと待ってください、だとすると、高神麗華の武霊はオリジナルではないんですか！？」」
……案の定知らないみたいだな……
（でも、そうだとすると、町単位で知らないって事になるわね？）
放送地域じゃなかったんじゃないか？　……まあ、だとしても違和感を感じる話ではあるが……今はその事を考えている時じゃないな……
視線の隅に高神麗華の謎の独白を真似し続けている少女を入れつつ、
「……ええ、違うでしょうね……彼女の武霊は、どう見ても高神

麗華は嗤うの主人公高神麗華が使っていたペットでしょうし」

「「高神麗華は嗤う!?　ペット!?　ど、どう言う事ですか?」」

「……放送されたのが二十年以上前で深夜の物凄くマイナーなアニメですから、知らないのは無理はありませんが……さっきから彼女、そのアニメの最後の場面をずっとやってますから……まあ、間違いないんじゃないんでしょうか?」

「「アニメ……あれが?　……えっと……その、どんな内容なんです?」」

「……大金持ちの令嬢・高神麗華が、その財力を使って話数ごとに色々な架空の作品の主人公からその服装と力とかを奪って、その主人公の代わりに大暴れする話で、あのスライムは、まさしくその主人公達から服と力などを奪う高神麗華の名前のないペットでしたね」

「「高神麗華の名前のないペット?　……ちょっと待て下さい!　今、服と能力を奪うって言いましたよね!?　どういう事です!?」」

どういう事です?

「「だって、彼女によって武霊使いが『殺され』、武霊を奪われている姿を美羽は何度も見ているんですよ!」」

は?　殺され?　……なるほど、だから危険な人物って言ったわけか……ん~……しかも、何度も目撃しているね……何で目撃される必要があるんだ?

(何それ?　どういう意味?)

高神麗華のペットなら、目撃させずに対象の武霊使いを攫う事は可能だろ?

(確かにあれだけの便利な武霊達を持っていれば……確かに不自然ね)

だろ?　つまり、『わざと目撃させた』って事だ……だが、だとすると……

「……どんな風に武霊を奪われてました？」
「「どんな風に？」」
俺の問いに、電話越しでも分かる困惑した雰囲気を美羽さんは見せたが、
「「……スライムの様な武霊に武霊使いが取り込まれ……服が溶かされて、跡形もなく武霊ごと……爆発してです」」
多分、被害者の中に知り合いがいたのだろう……美羽さんは辛そうに語ったが……少し軽率だったな……ちょっと考えれば分かる事なのに……だが、ん～やっぱり……
「……変ですね」
「「変？」」
「……武霊は武霊使いの人生の根幹となるイメージを自身の姿にするんですよね？」
「「ええ……あれ？　美羽、その説明をしましたっけ？」」
「……昨日浜辺で見た武霊達の姿形から何となくそうだと思ったので」
「「な、なんとなく？」」
何故か困惑している美羽さんに、俺も若干困惑しながら、
「……だとすると、やっぱり変じゃないですか？　麗華のペットが出来るのは、主人公の服と力を奪って、それを再現して麗華に身に付けさせるだけですし……それがアニメのメインと言えます。当然、殺すようなシーンはありませんし、跡形もなく溶かすようなシーンもありません……そもそも、自ら自爆する様な行為は、いくら他人の武霊を奪う行為とはいえ、不自然過ぎると思うんですが……」
「だけど、実際に武霊を奪われた武霊使いは……」
重く押し黙る美羽さん。
美羽さんが嘘を言っている様には全く思えない。と言うか、嘘を吐く理由がない。
だが、だとすると、少なくとも分裂体の数から……五十人ぐらいの被害者がいるって事になるが……

へたり込んでいる少女を真っ直ぐ見るが……とても、そんな連続殺人を犯した様な人物には見えない……まあ、明らかに狂人だとは思うが……そもそもここまで完璧に高神麗華を模倣しているのに、高神麗華は嗤うで重要な部分のイメージをを変化させるか？

そう思っていると、

「「美羽のコウリュウもそうなんですけど、武霊って初めて具現化してからある程度時間が経過すると、武霊使いが望む様に武霊能力とかを変化・追加させる事があるんです」」

武霊能力の変化・追加？

（武霊は武霊使いのイメージで武装しているだけだからね。そう言う事もある程度は可能なんじゃない？）

なるほど……

「「コウリュウの基になった赤竜物語のコウリュウって、ファイアブレスと念動力しか使えないじゃないですか？」」

「……ええ、確かそう言う設定でしたね」

「「でも、今の美羽のコウリュウは、ファイアブレス以外に六つのブレスを吐けますし、鱗を念動力で操る事も出来ますし……だから、麗華の武霊も変化したんじゃないでしょうか……」」

ん～……確かに、武霊にそう言う特性があるのなら、取り込んだ武霊使いごと爆発する様に変化する事は頷ける……か？　……果たしてそこまで不自然な形で能力が変化するんだろうか？　……ん～……なんであれ……彼女が連続殺人犯とされていると言う事は、スライム武霊が爆発後、武霊を奪われた武霊使いは一切見付かっていないって事だよな……なるほど……やっぱり、わざと目撃させてたんだろうな……つまり、

「……スケープゴートか」

第一章『渇欲の武霊使い』２４

色々と考えた結果導き出された結論を、俺は思わずつぶやいてしまうと、

「「スケープゴート!?」」

携帯越しでもつぶやきが聞こえたのか、美羽さんが驚きの声を上げる。

ん～……

「……個人的な私見ですが……」

そう断ってから、

「……俺は、犯人は別にいると思います」

「「別に!?」」

「……例えば……『周囲の時間を指定した対象ごとに任意に操れる武霊能力』を持った武霊使いとか？」

「「じ、時間を!?　……なんでそんな具体的に？」」

「……ただ武霊使いだけが消えたのなら転移系の武霊能力が考えられますが……麗華の武霊がその武霊能力を発動した直後に爆発し、それ以外を目撃していないとなると、時間を操る能力が一番可能性が高いと思いまして……」

「「えっと……よく分からないんですけど……なんでそうなるんです？」」

「……時間の流れに落差があると言う事は、それだけ速度に違いがあると言う事です……周囲の時を止め、麗華の武霊が対応出来ない程度に時間の流れを戻し、掻き分けて武霊使いだけを攫えば……時間の落差によって生じた速度の差による衝撃で、麗華の武霊が爆発したように吹き飛ぶんじゃないんでしょうか？」

「「じゃあ……今まで殺されてきたと思っていた人達は……」」

「……少なくとも、高神麗華になり切っている彼女によって殺されてはないでしょうね……」

「「ですけど……そんなとんでもない武霊がいるなんて、聞いた事が無いですよ？」」

……聞いた事が無い？　……ん～……俺としてはむしろ、

「……今までそんな能力を持った武霊がいない方が、不自然な気がするんですけどね……時に関係する能力を持ったキャラクターは結構いますし……〇ョジョの宿敵とか、〇をかける少女の主人公とか……少なくとも、そんな武霊がいないと言い切れないと思いますけど？」

「「それは……そうですけど……」」

俺の話に動揺する美羽さん。

……まあ、今の今まで高神麗華と名乗っている女の子が犯人だと断定していたのだから……そうじゃない可能性の話に動揺するのは無理もないが……

「……事の真相がどうであれ、警察か自警団を呼んでくれませんか？」

「「え？」」

「……一応こっちでも拘束するサーバントを使うつもりですが、武霊使いにどこまで通用するか分かりませんので……警察や自警団が正常に機能しているって事は、『武霊の具現化を無効化にする方法』があるって事ですよね？」

「あ！　はい、確かに武霊封じの文字が書かれている手錠があります」

武霊封じの文字？　……ん～武霊能力で書かれた文字か？　文字に力を宿すってキャラクターは比較的ポピュラーだしな……多分。

そんな事を考えていると、

「「美羽の方で派手にバトりましたから、もう既に動いているとは思いますけど……星電には星波警察の武霊課と自警団の電話番号が既に登録されていますから、夜衣斗さんから連絡してくれませんか？　美羽はその間、弟の方を抑えていますから」」

弟の方？　……さっきの赤黒いドラゴンの武霊使いか……つまり、

今、にらみ合いでもしてるって事なのか？　よくそんな状況でこっちに電話出来るな……まあ、それだけ余裕のある状況なんだろうが……ん～彼女が麗華を名乗っているなら、弟の方は礼治か？　基となったアニメにも弟キャラはいたが……赤黒ドラゴンなんか使役していなかったよな……

（弟の方は高神麗華は嗤うを模倣していないって事なんじゃない？）

だろうな……少なくとも、内面までは……何であれ、

「……分かりました。こっちから」

連絡します、と言おうとして、気付いた。

高神麗華を演じている彼女の後ろに、いつの間にか『全身に時計を付けた怪人』がいる事に。

「「夜衣斗さん？」」

不意に言葉を途切れさせた俺に、美羽さんが名を呼ぶが、俺はそれに応える余裕はなかった。

何故なら、目の前に現れた怪人が、いつ現れたのか分からなかったからだ。

視線から時折外していたとは言え、さっきの失敗もあって、警戒の為に常に視界の隅に彼女を入れていた。

なのに、いつの間にかその時計の怪人はいた。

それが意味するのは……本当に時を操る武霊がいたって事か！？

自分で話してはいても、あくまでそれは予想であって……まずい！　このタイミングで現れたって事は！

「オウキ！」

俺の呼び掛けにオウキがすぐさま具現化し、両手に拳銃を出し、時計怪人の武霊を倒そうとした。

だが次の瞬間……目の前から時計怪人の武霊はいなくなっていた。

空を切るオウキの銃撃。

「「どうしたんですか！？　夜衣斗さん！」」

銃撃音が向こうにも伝わったのか、驚きの声を上げる美羽さんに、

俺は、

「……さっき話した時を操る……かもしれない武霊が現れました」

そう言いながら、眉を顰めた。

何故なら、彼女を攫いに来たのかと思ったのに、その彼女は時計怪人の武霊が現れた時と同じ場所に、同じ姿勢でいるからだ。

意味が分からず、彼女を注視しながら、

「「え！　え!?　や、夜衣斗さん!?　ぶ、無事なんですよね？」」

「……ええ、俺も……彼女も何ともありません」

「「何ともない!?　その武霊は!?」」

「……現れた時同様にいつの間にか目の前からいなくなっていました」

周囲を警戒するオウキのセンサーにも俺と彼女以外の存在は感じられていない様で、オウキから困惑の感情が送られてくる。

「「何しに現れてたんです!?」」

……それは俺も知りたい……まあ、

「……少なくとも、彼女を救う為じゃなさそうですが……ん？」

「「今度はどうしたんです!?」」

「……いえ……彼女が再現を止めてるようなので……」

俺はそう応えながら、彼女の唐突な変化に眉を顰めた。

彼女は黙ったまま、ぼーとしている。

最終回にこんな場面はない……まあ、全部を見れたわけじゃないから確証はないが……少なくとも、俺の知っている情報では黙るシーンはなかったはず。

（……不気味な反応ね）

ああ……しかし、この唐突な変化は……念には念を入れておくか……

そう思った俺は、オウキに『ＳＪ（ストレートジャケット）サーバント』を出させた。

見た目上はＰＳサーバントと同じ小型の着るサーバントだが、ＰＳサーバントとは逆に、着用者の力を抑える拘束着となるサーバン

トで、着用者に打ち込まれるナノマシンも、着用者の思考力などのあらゆる力や感情を抑制させる働きをする、見た目はマントの無い白いＰＳサーバント。

それを彼女の下に移動させつつ、

「……少なくとも、さっきの武霊に何かをされたのは間違いないでしょう」

「「えっと……それって、証拠封じ？」」

その美羽さんの言葉に、俺は再び眉を顰めた。

確かに今の彼女の状態は、そんな風に見え……とても嫌な感じがしたからだが……

「……それはどうでしょう？　仮にさっきの武霊が真犯人だとするなら、彼女は利用されただけで、真犯人の事を何か知っているとは思えません」

「「真犯人は知っていなくても、自分が犯人ではないって証言出来るんじゃ？　そうなれば、スケープゴートが難しくなりません？」」

確かにそうだが……

「……それはまともな人間がすればでしょう？　美羽さんは、彼女の発言に信憑性があると思いますか？」

「それは確かにそうですけど……」

俺自身が言った事なのに、俺が否定する様な事を言った為か、美羽さんが何だか困った感じになっていると、ＳＪサーバントが取り付こうとしている彼女の身に不意に変化が起きた。

ぼーとしている彼女の背後に赤いスライムの武霊が出て来たかと思えば、彼女に……？

（第三段階！？）

サヤさんの驚きの言葉と共に、彼女は自身の武霊を身に纏い、中途半端に具現化……半具現化？　し、ＳＪサーバントを弾いた。

……第三段階って事は、美羽さんが言っていたレベル３の憑依具現？

「……美羽さん。彼女の段階って、レベル３でした？」
「「え？　いえ、レベル１だったはずですけど……え！？　もしかして！　レベル３になったんですか！？」」
「ええ、美羽さんから聞いた通りの姿になりました」
彼女の意識レベルが低いのか、彼女の身体は、されるがままの感じで、身に纏った武霊分地面から浮く。
……これじゃあ、武霊に取り込まれた様にしか見えないな……
「「どういう事です！？　いきなりレベルが一つ飛ばして上がるなんて、本当に憑依具現をしてるんですか！？」」
そう信じられないって感じで驚きの言葉を口にする美羽さんだが、
「「と、とにかく直ぐに逃げてください！　いくら夜衣斗さんの武霊が強くても、レベル１とレベル３では具現化率が違い過ぎて、一対一じゃ絶対に勝てません！」」
具現化率が違い過ぎる？　……武霊を直接武霊使いが身に纏っているせいか？
（ちょ、ちょっと何呑気に考えているの夜衣斗。美羽ちゃんの言う通りに、ここは逃げましょう）
そうだな……レベル３になってからも一切動かないし……意図が分からな過ぎる……ＳＪサーバントも取り付ける事が完全に出来ず困った様に彼女の周りをふよふよしているし……こういう場合は、逃げるが勝ちか。
そう思った俺は、とりあえずこの場から離れる為に、
「ＰＳサーバント！　セレクト！　ウィ」
ングブースターと言おうとして、俺は言い切れなかった
何故なら、唐突に彼女の身に纏っている武霊から、分裂体が『溢れ出した』からだ。

第一章『渇欲の武霊使い』２５

時が止まった廃校グラウンドの中で、唯一動けるその武霊は、主人から預かった小さな筒を取り出した。
それを、唯一時を止めていなかった高神麗華の首元に押し当てる。
すると筒の内部に仕掛けられていた針が飛び出し、麗華の首の血管に突き刺さった。
ほぼ同時に、ガスが発生し、内部の薬品を押し出し、麗華の体内に薬品を注入する。
一瞬で内部の薬品を打ち終わった時を操る武霊は、機械式注射器をしまい、もう用済みとばかりに麗華の時を止め、その場から離れ、来た時と同様にどこかへと駆け出し、いなくなった。
そして、時が正常に戻ると同時に、動き出した麗華は、自身の中に溢れ返る『何か』を感じた。
だが、それを止める術も、止める意志も彼女にはない。
彼女は求め、求められ、ただ答えていただけ。
そこに彼女の意志はない。
ただ、まるで渇いた砂に水が吸い込まれる様に、欲している。
それ故に、彼女は相手の求める者に直ぐになって見せ……今も、見せようとしていた。
彼女に溢れ返る『何か』は、彼女の身に宿る武霊に吸収される。
そうしなければ、自身の宿り主が危険だと判断したのと、その『何か』が武霊にとって酷く欲する『何か』だったからだ。
だが、吸収しても吸収しても溢れ返る『何か』に、彼女の武霊はその捌け口を求め、具現化した。
彼女から溢れ返る『何か』をより効率よく消費する為に、それまでした事がない憑依具現を自然に行い、武霊能力を行使。
した瞬間、限度を超えた。
それまで武霊にあった武霊の意識が、取り憑いている主人たる武

霊使いを守る本能が、自身に体現された能力を制御する理性が、吸収され続ける『何か』によって壊れる。
それは彼女の中に存在しながら、はぐれ化を起こしたかの様に、仮に彼女がまともな人間だったのなら、それをある程度抑えられたかもしれないが、生憎、彼女は全てを欲し、応えるだけの人形。
故に、武霊の欲さえ受け入れ、応える。
それ故に、武霊は暴走。
武霊の中にある今まで奪ってきた武霊を次々に複製。
普通なら、そんな事をすれば直ぐに麗華の意志力は尽き、意識を失ってしまうはずだが、武霊は麗華の意志力を一切喰らってなかった。
代わりに溢れ返る『何か』を激しく消費し、
瞬く間に廃校グラウンドを埋め尽くすほどの分裂体を作り出した。

離れたＢＢドラゴンを警戒しながら、美羽はコウリュウに受けた傷を覆う様に防御鱗を展開させるように思念で指示。
その間に、ＢＢドラゴンは何もしてこない。
それは星電で夜衣斗との会話中も同様で、唐突な無関心ぶりに、流石の美羽も不気味さを感じ始めてきた時、夜衣斗との通話が唐突に切れた。
直前の会話から、夜衣斗が麗華を名乗っていた少女に何かをされたのは間違いなく、強い焦りを感じた瞬間、不意にＢＢドラゴンが血を吐く。
構えるコウリュウを余所に、自身の前に広げた血の円に飛び込むＢＢドラゴン。
また転送攻撃をしてくるのかと思った美羽だが、いくら待っても現れる気配はない。
（まさか！　姉の所に行ったの！？）
そう思った美羽は、慌ててコウリュウの身体の向きを廃校の方へと向けた。

遠くからでは特に何も見えない。
だが、美羽はっきりと感じていた。
今まで感じた事が無い、不快な気配を、コウリュウも不快そうなその気配が、一体何なのか美羽が考えるより早く、異変が起きる。
美羽の見ている前で、グラウンドから赤い何か吹き出し、一気に空へと上がり、見る見る間に巨大な柱を作り出した。
一瞬、その柱が何なのか理解出来なかった美羽に、コウリュウが自らの目の映像を美羽に送ってきた為、驚愕で目を見開いてしまう。
赤い巨大な柱の正体は、高神麗華の武霊の分裂体だった。
「うそ……何であんなに……」
そう呆然とつぶやく美羽。
美羽が今まで見た来た高神麗華を名乗る少女は、奪った武霊を一体に付き一体しか出す事が出来なかった。
だが、今、目の前で柱を作っている武霊はどう見ても同時に複数出していた。
それどころか、ありえない、どれだけの数出ているのか分からないほどの分裂体。
あまりの事に呆然と見ている美羽の前で、分裂体の柱は頂点で拡散し始め、星波町の空を覆い始めた。
その事にはっとした美羽は、慌ててコウリュウを分裂体の柱へと飛ばさせる。
状況から考えて、夜衣斗が分裂体の柱に巻き込まれたのは間違いなく、咄嗟に助けに行こうとした。
だが、向かってくるレベル2のコウリュウに反応したのか、空へと広がる分裂体の群れの一部がコウリュウに向かって降下し始める。
それを確認した美羽は、
「コウリュウ！　サンダーブレス！」
分裂体にある程度近付くと同時に、コウリュウに電撃のブレスを吐かせた。
コウリュウから吐かれた電撃のブレスは、一番近くのロボットの

武霊に当り、その近くの分裂体達から更に別の分裂体達へ一気に伝わり、向かってきた分裂体の群れを一掃。

だが、次々と降下してくる分裂体により、瞬く間にサンダーブレスを吐いた時より多い分裂体の群れが迫る。

「こ、こんなの……嘘でしょ……どうすればいいのよ！」

次々と美羽はコウリュウにサンダーブレスを吐かせ続けるが、一向に分裂体が減る様子がない。

窮地に陥る美羽だったが、星波町から次々と武霊が現れ、コウリュウに向かってくる分裂体の群れを攻撃し始めた為、群れに飲まれる事はなかった。

だが、代わりに助けに入った武霊に対して分裂体の群れが新たに降下し始める。

（今の所、空中にいる武霊に気を取られてるみたいだけど……このままじゃ……いずれ町に……）

そう美羽が思った時、

「「緊急放送！　現在、高神麗華の武霊が暴れています！　赤い武霊ははぐれではありませんので！　町内の皆様は、緊急マニュアルに従って、至急近くの武霊使いのもとに避難してください。また、武霊使いの皆様は、町民の安全を確保しつつシェルターへ！　繰り返します！　現在――」」

そう放送が入るが、

（……そんなので守れるの！？　と言うか、下手に刺激しない方が良いんじゃ……）

そんな美羽の不安は直ぐに的中した。

不意に、一部の分裂体が町に向けて下降し始めて、美羽が慌てて下降先に視線を向けると、誰かがサムライの様な武霊を具現化しているのが見え、

（やっぱりそうなる！？）

美羽は慌てて、

「コウリュウ！　鱗射剣（りんしゃけん）！」

防御鱗を手裏剣状にして撃ち出す技を大量に出して、下降した分裂体達を霧散させる。
同時にコウリュウを下降させ、撃ち漏らした分裂体と戦う武霊使いの上に移動して、分裂体をコウリュウに握りつぶさせ、
「早くシェルターへ！」
武霊使いにそう叫んで、美羽はコウリュウに釣られて下降してきた分裂体達を迎え撃つ。
星波町の各所に設置されたシェルターの外装には、犯罪武霊使いを逮捕する際に使われる手錠にも使われている武霊封じの文字と同じ文字が書かれている為、ある程度の武霊攻撃は効かない。
それ故に、シェルターへの避難誘導は間違ってない。
（でも……これだけの数の分裂体に一斉にシェルターが攻撃されたら……）
見上げた美羽の視線の先では、大量の分裂体がどんどん現れ、星波町の空を埋め尽くそうとしていた。

星波町を埋め尽くさんばかりに現れた分裂体達により大混乱に陥っている星波町を、町で一番高い施設であるデパートの屋上で見詰める者がいた。
電動車椅子に乗ったその中年男性は、奮闘している武霊を一通り見た後、視線を分裂体達の柱へと向ける。
そこから現れる分裂体は、今なお途切れることなく根元から現れ続けている様で、更に空を覆う分裂体達の天井は少しずつ少しずつ下降し始めている様だった。
その下降を電動車椅子の男性が確認した時、屋上の出入口から教師風の格好をした女性が現れ、その背後に立つ。
電動車椅子の男性は、背後を特に見もせず、電動車椅子に備え付けられているノートパソコンを自分の手前に移動し、キーボードを叩く。すると、
「「どうだった？」」

打った文字が音声としてノートパソコンから出る。
「マスターの言う様に、気付いている者はいませんでした」
「「『あいつ』もか？」」
「はい。まだ戻ってきてはいません」
「「なら、もう暫く自由に動けるな」」
その言葉に、女性は分裂体の柱へと視線を向ける。
「助けに行くのですか？」
彼女の問いに、電動車椅子の男性は、首を横に振る。
「「いいや」」
「ですが……」
視線を分裂体の柱から、分裂体の天井へと移し、
「よろしいので？　このままでは、この町は『あの子によって滅ぼされます』。そうなれば、マスターにとっても色々と不都合なのでは？」
彼女の問いに、電動車椅子の男性は苦笑し、
「「まあ、その時はその時さ」」
そう言わせ、夜衣斗がいるであろう分裂体の柱の方に視線を向ける。
「「……さあ、昨日に引き続き、これが『今回の死の運命』……これくらい乗り越えて見せてくれ、君の『可能性』を、君の『選択』を見せてくれ」」
そうノートパソコンに言わせ、暫くの沈黙の後、後ろを振り返り、
「「……ところで今日はなんで教師風の格好をしているんだ？」」
「星波学園が近くにありますから。教師のコスプレをしてみました。どうです？　似合いますか？」
「「お前な……なんか、色々と台無しだな……」」
「えー？　そうですか？」

第一章『渇欲の武霊使い』２６

気が付いたら真っ白な空間にいた。
何もない。
見渡す限り、下も、上も、横も、前も、後ろも、何もない空間。
何なんだここは！？
パニックになり掛ける自分を無理矢理押さえ付ける為に、腕を組み、片手で口を多い、鼻だけで呼吸する。
落ち着け、まずは落ち着け俺。
考えろ、考えろ、俺、今のはなんだ、どうして俺はここにいる？
そう考えて、ぱっと思い出したのはレベル３になった麗華を名乗る少女から一気に湧き出した大量の分裂体。
それまで一体一体出ていたはずの分裂体が、同じ武霊を同時に分裂体として出していたのを思い出し、それが元々の武霊能力なのか、それとも何からの理由で変化した武霊能力なのかは分からないが……何であれ、あの大量の分裂体に巻き込まれ……俺は彼女の武霊に取り込まれたのか……だとすると、魂で直接繋がっていると言う武霊に取り込まれる事により……何となく俺の心の中の公園と近い感じがする事から……彼女の精神と俺の精神が繋がってしまったのか？　……彼女の武霊能力が明らかに変化した事もそれの要因になってるんだろうか？　……何であれ、何もない空間に普通の人間が長時間いると発狂するとかって話を聞いた事があるような……ヤバくないか？
などと思った時、
「夜衣斗」
不意に俺の横にサヤが現れ、
「夜衣斗の考えている通り、ここは高神麗華と名乗っていた少女の心の中よ」
やっぱりそうか……だとすると？

「ええ、彼女の武霊に取り込まれたことによって、ここにきてしまったみたい」
そんな事を言った。
と言う事は、オウキが奪われる？　……と言うか……心の中！？
いや、ちょっと待って！？　改めて思ったが、普通、心の中ってこんなに何もないもんなのか！？
俺の問いにサヤが首を横に振る。
「普通は自分を構成しているあらゆる思い出が溢れているはずよ」
はずよ？
苦笑するサヤは、
「だって、夜衣斗の心の中以外人聞きだもの」
人聞き？　……ああ、俺以外に憑いたが無いんだったな……
「そ、夜衣斗が初めて♪」
……言い方違くないか？　……と言うか誰に聞いたんだ？
「それは……」
サヤが何かを言い掛けた時、何もない空間に変化が起きた。
下の方から、人形の様な物がぽこぽこと現れ、上がってきて……
何故か俺の周りで止まる。
「夜衣斗に反応した？」
そう呟くサヤに少し意識を取られた為、足元から上がってきた人形に俺は気付かなかった。
「夜衣斗！　それに触れちゃダメ！」
いち早く気付いたサヤのその言葉に、反射的にサヤの視線の先を見る動作を取ってしまい、人形が手に纏わりつくのを止める事が出来なかった。
人形が俺の手に触れ、纏わりついた瞬間、
その少女は、食卓の上に乗せられていた。
身体の上、その表面全部に、色々な料理が乗せられていて……胸の上には痛いぐらいの熱さが、お腹の上には熱いぐらいの冷たさが、

口の中には暴れ回る小さな何かが――
俺は、食器として使われている少女になっていた。
乗せられている食材が、それを食べようと囲んでいる人達が、
気持ち悪い！
嫌だ！
気持ち悪い！
嫌だ！
気持ち悪い！
嫌だ！
気持ち悪い！
止めろ！
気持ち悪い！
止めろ！
誰かの箸が、誰かのフォークが、誰かのスプーンが、何かを摘み、
何かを刺し、何かを救う度に、俺は狂う様な思いだった。
なのに！　何で彼女は！　……何も感じない！？
俺がなっている少女は、食器になる前、僅かな何かを感じていた。
俺には分からない。
俺には理解できない。
何か。
そんな僅かな何かも、彼女の前に現れた着物を着てキセルを吸っ
ている女性に、
「いい？　今日のあなたは食器よ」
そう言われた瞬間、
彼女は何も思わなくなった。
まるで、本当に食器になったみたいに……
ぞっとする様な、彼女の何も感じない感覚。
外から与えられる食べられる感覚。
内と外の狂気に、俺は、俺の心は……これ以上……
「ふむ。確かにこの料理は美味だが、物足りないな」

少女に乗せられている料理を食べている客の一人らしき声と共に、目の上に乗っていた食材が退けられ、目の前にフォークが!?

「これはいいのか？」

え？

「お気に召すかわかりませんが……どうぞ？」

キセルの女性の了承と同時に、フォークが、

「ふむ。私はこれに目がなくてね。いや、冗談ではなくてな」

目に突き――

「や、やめろぉーーーーー！」

俺は俺の声ではっと気付いた。

何もない空間に戻ってきたが、その事に疑問を思うより早く、俺は思わず自分の目を確認する。

無事な事にほっとして……何だ!?　今のは!?　何なんだ!?

今思い出しただけでもぞっとするビジョンに……吐き気がしてきたが……ぐっと堪える。

……ここが彼女の心の中だとするなら、今のは……彼女の過去？

そう気付いた時、俺は愕然とした。

何故なら、あんな事が許される場所など、少なくとも日本ではフィクションの中だけだと思っていたからだ。

だが、今のが彼女の過去なら、明らかに日本語を喋っていた客達は――

ぞっとして、自分の手に纏わりついている料理を身に纏った人形と、周りの人形を見回した。

一瞬で、俺は理解してしまった。

この周りに浮かび、今なお下から上がってくる人形は、高神麗華を名乗っていた彼女の過去一シーンであり……あの環境下と周りに浮かぶ人形一つ一つの『異様な格好』からして……彼女がロクな人生を、『人として扱われていなかった人生』を歩んでいた事を――

「夜衣斗！　大丈夫!?」

サヤの声に、俺は反応出来ないほど……怒りに震えていた。
俺に自身の過去を体感させた人形は、小さな声で、多分、サヤには聞こえない、触れている俺にしか聞こえない声で、
「私は食器、食器、食器、食器、食器になる事を欲している」
そうずっと言っているのが聞こえたからだ。
『欲している』だって!?
「違うだろ!」
思わず否定の言葉を俺は口にし、サヤを驚かせる。
自分の顔の近くまで食器人形を持っていき、
「違うだろ! そんなのが! 君が『本当に』欲している事じゃないだろ!」
心の底から湧き出した言葉を叫んでしまう。
それが何の意味がない事だと分かっていても!
俺の叫びに反応する様に、周囲に浮いていた人形達が一斉に俺に殺到する。
「夜衣斗!」
サヤが俺を庇う様に動くが、人形達はサヤを避け、俺に取り付く。
取り付かれた瞬間!
兎の様に狩られる!
吊るされる!
母親の代わりにされる!?
的にされる!
拘束される!

花瓶の代わりにされる!?

椅子にされる!?

キャンパスにされる!?

全ての他人からの欲を、まるで自らの欲の様に受け入れる過去の彼女。

その様子は渇ききった砂に水を垂らした様に……そこに一切の抵抗もない。

しかも、残虐の記憶以外に僅かに見える生活の様子は……何もなかった。

無機質な部屋に、最低限生きられる程度しかない家具。

そこに誰かが訪れるのは、彼女に客が訪れた時。

食事の時ですら、機械仕掛けの壁から食事が出てくるのみで、一切の触れ合いはない。

それが、物覚えが付いた時からずっと続き……彼女は欲していた。

『それ』が何なのか分からないまま、欲して、欲して、欲して、それが何なのかを欲する為に、自分に向けられる欲を欲してしまった。

……そう、俺には見えた、

彼女に何かを教える存在は誰もいなかった。

彼女の母親らしき人物は所々に現れるが、彼女が彼女に教える事は一切なく、彼女が唯一する事は客の欲を彼女に『ダイレクトに伝える』事。

それは一種のテレパシーの様な物なのか、彼女の母親らしき人物が、彼女に命令すると共に、彼女の中に客の欲する欲が流れ込んできた。

それが彼女の母親の能力なのか、彼女が何もないが故に欲し続けてきた故に生じた能力なのか、そう言う架空の知識はあっても、現

実の知識はない俺には判断が付かない。
だが、何も教えられていないが故に、彼女がその流れ込む欲を自分が欲しているものだと勘違いしたのは分かった。
勘違いであるが故に、その欲に、その行動に、心が宿る事はない。
所詮、他人の欲。
心の奥底から、本能から彼女が『真に欲している何か』ではない。
だから……何も感じない！
一切の知識、基底となるべき経験を与えられていないから、どんな事をしても！
どんな事をされても！
心が動かない！
嫌がる事も！
悲しむ事も！
怒る事も！
絶望する事さえ！
彼女は知らない！
彼女は何もない……まるで、中身が空洞の、本物の人形の様に、彼女は人形だった。
そんな彼女に、僅かな、僅かな変化が起きたシーンがあった。
それは、彼女が置かれている環境からしたら、必ず起きていたであろうと思っていた……人と言う生物の基礎と呼べる単純な欲。
その欲求に晒される時……男が彼女に覆い被さった時……本当に、本当に僅かに……『喜んだ』……気がした。
その瞬間、俺は、
そんな最低な事に！
喜んだ気がしただぁ！？
個人として、初めて触れ合って貰えた事だからか！？
何だそりゃ！
何だそりゃ！？
怒りが、これが既に起こってしまっている出来事である事は分か

っていても！
怒りが爆発するのを俺は止められず、
「ふざけんなぁぁあああぁあああああ！」
叫んでいた！
心の底から！
感情が、理性が、自分の全てが、彼女が体験した出来事を、
彼女が、今の彼女が存在したらしめている全てを否定した。
その瞬間、世界が崩れた！？

第一章『渇欲の武霊使い』２７

まるで俺の叫びによって周りの光景が壊れた様にひび割れ、ぼろぼろと崩れ出す。

急速に崩れた光景の先には……見渡す限りの人形の大地。

いつの間にか足元も人形になっており……その全てが、彼女が体験してきたさっき見た過去の続きだと……俺に否応なしに理解させた。

何故なら、足元に敷き詰められている人形は、俺に纏わりついてきた人形より大きく、先を見れば見るほど、現在の彼女に対比して近付いている様で……そのどれもが、過去に見た事がある……成人指定の作品群の様な……そんな格好をされていた。しかも、先へ行けば行くほど……何であるか理解するのを拒否したくなる様な……『現実では在ってはならない過去』が混ざっていた。

くそ！　こんなの！　あんなの！　フィクションの世界の中だけでの話だろ！　フィクションの！　フィクションの中だけでなくちゃいけない話だろが！

なのに！　なのに！

「何で彼女がこんな目に遭ってるんだ！」

再びの俺の叫びに、今度は目の前の人形の一つが立った。

立つと同時に、その人形は俺と同じ大きさになり、俺に笑い掛ける。

その姿は、過去のビジョンに幾度となく登場してきた彼女の母親らしき人物と同じ格好をした彼女。

「何でって、私が欲しかったからに決まってるでしょ？」

「違う！」

俺の否定の叫びに、別の場所から人形が立ち、大きくなる。

絵に描いた娼婦の様な格好をした彼女。

「どうして違うの？　私が欲しかったからよ？」

「それも違う！」
更に別の場所から人形が立ち、大きくなる。
幼稚園児の格好をした彼女。
「なにがちがうのぉ～？」
「何で分からない！」
更に別の場所から人形が立ち、大きくなる。
今度は男の格好をした彼女。
「あ？　何が分からないって言うんだ！」
「君が本当に望んでいる事だ！」
更に別の場所から人形が立ち、大きくなる。
今度は……高神麗華が作中でよく着ていた赤いドレスを着た彼女。
「私が本当に望んでいる事？」
不意に、周囲の光景が再び変化した。

今とほとんど変わらないぐらいに成長した彼女。
その彼女がいるのは、幼少期から彼女が仕事以外の時にいる無機質な部屋
最低限生きられる程度しかない家具が無いのはほとんど変わらないが、一つだけ増えている物があった。
それはテレビ。
流れているのは、高神麗華は嗤うを始めとするアニメや特撮……
……その多くが彼女が奪った武霊の元ネタだった。
目の前の光景と他に、断片的な光景が見える。
断片的に見えた光景を纏めると、偶々アニメのコスプレプレイを要求した客が、彼女にアニメなどを見せ真似させた所、彼女が完璧にコスプレのキャラクターになった為、それを面白がった客達が、テレビを彼女の部屋に用意させた様だった。
その特に法則性が無く流されるアニメなどの中で、客達が特に面白がったのが、高神麗華は嗤うだった。

何をどう面白がったのかは分からないが……面白がった客はアニメの設定通りの物を彼女に与え始める。
服、食事、家具……そして、
無機質な部屋に初めて母親らしき人物以外が現れる。
線が細いが健康的な肌の色をした美少年。
とても彼女に似ても似つかないが、
「あなただぁ～れ？」
彼女の問いに、
「初めまして……お姉ちゃん」
そう答えた。
まるでアニメの一シーンを再現したかのような答えに、
「ああ、あなたが礼治？　うふふ。礼治」
……高神麗華の弟も、アニメの途中から登場し、それまで互いに会った事が無かったと言う設定だった。
その設定通りに用意された弟。
それによって常に高神麗華になった彼女は、高神麗華の思考で行動し出す。
自由奔放に、傍若無人に、それでいて弟思いに、弟の願いも応えた。
弟が彼女を求める様に客に命令されれば、それに応え、弟が嗜虐の対象にされれば、庇う。
それらの行動を日々彼女が続ける内に、彼女の中に高神麗華が定着する。
そして、高神麗華は思う。
何故ここにいるのだろう？
高神麗華は、こんな所にいる生き物じゃない。
アニメにもあった何者かに捕まり、脱出するシーンの通り行動しようとした。
敵の女性士官……女性客を籠絡し、彼女の手引きで脱出しようとする。

当然、彼女のその行動は予測されており、女性客もそう言うプレイを楽しんでいたに過ぎない。
彼女はあっさり捕まり、それで彼女の高神麗華は終わるはずだった。
だが……？
不意に光景が飛ぶ。
どこかのビルの入り口らしき場所で、彼女は目を覚まし、目の前には、高神礼治にさせられている少年。
その少年の手には拳銃が握られており、彼女の母親らしき女性に銃口を向けていた。
彼女から僅かに見える少年の口元は、それまで彼女に向けてきた純朴無垢な微笑みとは違う、残忍の笑みを浮かべ、命乞いをする女性に向けて、躊躇なく撃った！？
倒れ、血を流す女性に見向きもせず、彼女に近付き、返り血を少し浴びた顔を、いつも彼女に向ける弟としての純朴無垢な微笑みにし、
「さあ、行こうよお姉ちゃん」
そう言って、彼女を再び高神麗華にした！？　……ちょっと待て！　じゃあ、今も彼女が高神麗華として行動しているのは……
『あの少年の欲』なのか！？

「ッチ！　何粘ってやがるんだあのエサは！」
荒々しく悪態を吐いたのは、高神礼治を自称する少年だった。
場所は分裂体の雲の上。
自身の武霊ＢＢドラゴンの背に乗って、直前まで下の混乱を楽しんでいた。
だが、今は不機嫌そうに、姉と呼んでいる少女の前では見せた事が無い粗暴な態度で、イラつきをＢＢドラゴンの背中を蹴る事で晴らす。

背中を蹴られたＢＢドラゴンは、慣れているのか特に不満らしい様子を見せないが、不満の代わりに自身の視界を見せる。
ＢＢドラゴンの片目には、己の血が付き、塞いでいた。
ＢＢドラゴンの血の転送能力を使って、事前に町中に撒いていた血から町の様子を見ていたのだが、その一つが自身に迫る分裂体の群れを倒しながら、何とか分裂体達の柱へと向かうコウリュウを捉える。
「っは！　いいね！　どうせあの女は直に『あの連中に殺されんだ』！　ここで『代わり』の『もう一つスペア』を作っておくのも悪かねぇや！」
そう言って残忍な笑みを浮かべた高神礼治を自称する少年は、ＢＢドラゴンに命令を出し、応えたＢＢドラゴンは全身から血を吹き出した。

迫ってくる分裂体の群れを倒しながら、美羽は夜衣斗を助ける為に分裂体達の柱と向かっていた。
空を埋め尽くす分裂体達の中にオウキの姿はまだない。
それはつまり、また夜衣斗が無事と言う証拠であり、今ならまだ夜衣斗を助けられるかもしれないと思ったからだ。
そして、同時にもし、仮にオウキが奪われてしまったら、ただでさえ窮地な状況が更に窮地に成りかねず、もし助ける事に成功すれば、昨日のはぐれの様に何とかしてくれるのではないかと言う淡い希望も抱いていた。
そんな淡い希望に頼らなくてはならないほど、状況は悪い。
明後日でゴールデンウィークが終わるとは言え、まだまだ町の外から武霊使いは戻ってきていない上に、連日の二日連続のはぐれ戦でほとんどの武霊使いは意志力が回復仕切っていない。
今は何とか町に被害が出ないぐらい拮抗していたが、徐々に町側が徐々に押され始めているのは誰の目にも明らかであり、それはつまり町に打つ手がない事を意味していた。

大量に現れた分裂体は、個体個体は大したことが無い。
武霊使いである麗華を名乗る少女の意識が向いていないのか、それぞれの武霊能力を使わない上に、ほとんどがまとまって行動し、ただ突っ込んでくるだけ。
広範囲攻撃が可能な武霊には良い的なのだが、いくら倒しても倒して減る事のない物量の前には、簡単に倒す事が出来る事すら意味がなくなる。
しかし、美羽はそこに希望を見出していた。
何故なら、昨日見た夜衣斗の武霊・オウキは、子機の様な様々な円盤・サーバントを出す事が出来る武霊能力を持っている。
ほとんどの武霊の広範囲攻撃は、一度撃てば当然意志力がその分消費されるが、オウキのサーバントなら一度出せば、その維持分だけの、ただ攻撃するより遥かに少ない意志力で次々と攻撃する事が可能なはず。
そうなれば、もしかしたら、麗華と名乗っていた少女の意志力が切れるまで町に被害を出さずに済むかもしれない。
そんな希望を頼りに、美羽はコウリュウを分裂体の柱へと突入させようとした。
瞬間、いきなりコウリュウが急旋回。
理由を美羽が問うより早く、上から赤黒い針が降り、もし、あのまま柱に突っ込んでいたら美羽達は串刺しになっていた。
コウリュウの咄嗟の動きに感謝の念を送りつつ、美羽は針が降ってきた上空を見る。
分裂体により形成された赤い天井に、一点だけ、赤黒い血の円が出来ている事を確認すると共に、そこからＢＢドラゴンが飛び出してきた。
「また邪魔をする！　いい加減しつこい！」
その背中に礼治を見付け、思わず美羽がそう絶叫すると、
「っは！　いいね！　その感情を直ぐに表す未完成具合！　はっは！　そそる！」

返ってきた言葉と態度に、美羽は攻撃されたと言うのに、思わず硬直した。

何故なら、さっき相手した時も含め、これまでの礼治は、純朴無垢な素直に姉の麗華に従う、まさに弟と言う感じだった。

だが、今、目の前にいるのは、その容姿とは全く似合わない、粗暴な男を連想させるまるで別人の様な雰囲気と言動だったからだ。

「あ？　何だ？　お前もあの性格の方が好みなのか？」

「好みって……」

予想もしない問いに困惑するしかない美羽だったが、続く礼治の言葉に度肝を抜かれる事になる。

「残念だったな。あれはあの女用で、もうやる気はねぇのさ。どうせ直ぐに『殺されっからな』」

「こ！　殺される！？」

あまりにも予想外な言葉に、美羽は思わず声を上げてしまった。

美羽のコウリュウがはぐれに襲われた際に初めて具現化した様に、武霊は何より宿り主である武霊使いを優先的に守る。

つまり、麗華を名乗る少女に危機が訪れれば、町を埋め尽くさんばかりに溢れ出し続けている分裂体全てが彼女を守る為に動き出すと言う事。

そんな彼女を殺せる武霊使いなど美羽には心当たりがなく、思わず、

「誰に！」

と聞いてしまう美羽だが、礼治は応える気が無いのか、不気味に笑い。

「あ？　そんなの後で教えてやんよ」

「後で？」

「俺のペットになった時にな！」

「ペ、ペット！？」

あまりの訳が分からなさに、美羽がぽかーんとしていると、

「待ってな！　今！　良い具合に壊してやんからよ！」

そう言って、礼治の身体がＢＢドラゴンの背に沈んだ。
「え！？　嘘！　何で！」
驚愕する美羽の前で、礼治を自身の中に入れたＢＢドラゴンの姿が半透明になり、
「礼治もレベル３になるの！？」
これまでレベル２の武霊使いと思われていた礼治がレベル３となった。

第一章『渇欲の武霊使い』２８

高神礼治を演じている少年に連れられ、彼女は逃げ続けた。
追手は、彼女達がいた地下売春組織なのか、それとも警察なのか、そのどちらとも取れたが……とにかく逃げ続け、逃げた先で犯罪行為を繰り返す。
あるいは窃盗。
あるいは売春。
あるいは詐欺。
あるいは――
……よくもこれだけの犯罪行為をしたと思わせる事を彼女はしていた。
彼女はそれを自分の欲だと思っていた様だが……いや、思う事すら、少年の欲だったのだろう。
彼女は少年が望む通りに、犯罪行為を繰り返し、逃亡し続けた。
途中、何度か捕まりそうになる度に、弟を演じている少年がその本性を現し、捕縛者を殺していた様だが……彼女はその意味を理解している様ではなかった。
そもそも、彼女の人格は上辺だけ、しかも、誰かの欲を自分の欲だと勘違いして再現される作られた人格。
だから、表面上は人として行動していても、それはあくまで上辺だけであり、そこに彼女自身の根拠はない。
つまり、常識がない。
だからこそ、高神麗華と言うキャラクターになる以外の事は理解出来ない。
……あの作品は、中身は滅茶苦茶だが、殺人の描写が一切なかったらしいし……
そもそもそれに対する知識が無いのだからしょうがないが……
…何なのだろうか？　この少年は……便宜上少年と言ってはいるが、

明らかに俺と大して変わらない年齢なのに……手慣れた手付きで完璧に人を殺す。

あまりにあっさり人を殺すので、正直現実感が湧かない。

ただ、この少年は人間だった。

彼女の様に何も知らず分からずただ周囲の欲に反応して動く人形の様な人間ではなく、知識もあり常識もあり人として完璧に行動している。

買い物をする時も、無関係な人間に接する時も、そのどれをとっても人間だと思わせた。

なのに、あっさり人を殺す。

まるで『人と人外の境がない』様に見えた。

それが彼女と同じ様に創られた物なのかは分からないが……少なくとも、彼女が連続武霊使い殺人犯に仕立て上げられている原因の一つは、間違いなくこの少年だと確信出来た……が、同時に、彼の存在のおかげで、本当に、本当に僅かだが、彼女の本当の欲が現れ始め、人形の殻の中で人が育って行っている様に感じられ……何とも言えない気分になる。

明らかに彼を彼女の傍に置くべきでない。

だが、彼女が彼に人形としてではなく、人として執着し始めているのなら……

今は必要ない逡巡を俺がした時、彼と彼女は星波町に辿り着いた。

そして、星波町で彼女は出会ってしまった。

武装守護霊に――

大量の買い物袋を足元に置き、空中にいる武霊が撃ち漏らし、町に降りた分裂体を仕込み杖の神速抜刀で霧散させた高木弥恵は、不意に眉を顰めた。

「……まさか……あの子は……」

分裂体を斬った際に何を感じたのか、思わずそう呟く弥恵は、大

きく困惑しながら、避難する一般人を守る為に仕込み杖を抜刀した。

そこには、彼女が見させられ続けてきたアニメや特撮のヒーロー達が現実に具現化している姿が在った。

それが彼女に『被せられている』高神麗華と言う存在をより定着化させ、ついには高神麗華のペットスライムを自身の武霊として具現化出来る様にまでなってしまう。

……推察にしか過ぎないが、彼女がアニメや特撮のヒーロー達を基にした武霊達に奪う事に執着しているのは、守りたい者がいたからではないのだろうか？

もちろん、そこには高神麗華としての設定もあるだろうが……その設定によって僅かに出来た人間としての部分が、弟を守りたいと思い……彼女の過去も高神礼治が出来てからは、ヒーローが登場するアニメや特撮に注視していた様にも見えなくもない。

武霊を発現させた彼女は、高神麗華としての設定通り、武霊を奪い続ける。

もっとも、最初は弟を自称する少年の手引きで、奇襲する様に武霊使いから武霊を奪っており……その際に、俺が予想した通り、武霊使いは服しか溶かされず、彼女が殺している様子は一切ない。

だが、彼女の存在が町にバレ、堂々と武霊を奪う様になってから、武霊を奪い切ると同時にスライム状の武霊が爆発する様になった。

これによって飛び散った武霊の破片から、分裂体が発生し、彼女が逃げる切っ掛けを作っている様にも見える。

……自称弟の行動といい、武霊を奪われた武霊使いを攫っている謎の武霊使いといい……何だか、まるで彼女に『こういう武霊が具現化するのを知っていた』かの様な動きをしているな……

更に言えば、バレて直ぐに武霊使いを奪う動きをしたという事は、自称弟と謎の武霊使いは繋がっていると考えるのが自然……だよな……自称弟の武霊はＢＢドラゴンと言う血を操るドラゴンみたいだ

し、同一人物と言う線は低い……だとすると、地下売春組織を脱出した時点で既にその謎の武霊使いと自称弟は繋がっていたのではないだろうか？

地下売春組織を脱出してから、自称弟と彼女は常に一緒にいた。星波町に来てからも、僅かに離れた事はあったが、その短時間では、誰か、彼女に見付からない様に何からの繋がりを持った者を作るのは難しい。

少なくとも、彼女の記憶にはそれらしき者の姿はなかった。だとすると、そう言う関係を自称弟が作れるのは、地下売春組織時代のみと言う事になる。

……考えてみれば、途中までは彼女によって行われた脱出だが、途中からは彼女は意識を失い、気付いた時には脱出していた。

彼女の視点からでは、その地下売春組織がどれほどの規模なのかは分からないが……少なくとも、たった一人で脱出出来るほどの小規模な組織には見えない。

なんせ、建物の中に人工の森を作ったり、彼女を一切外に出すことなく育てていたのだから……だとすると、籠絡された客役の客以外に、客の中に自称弟の協力者がいたと考えるのが自然か？　例えば自称弟の客とか……

何であれ、自称弟と謎の武霊使いは、彼女に気付かれずに常に行動を共にし、彼女をずっと利用し続けていたのだろう。

弟は彼女そのものに執着しているようだが、謎の武霊使いの目的は何なのだろうか？

武霊を奪った武霊使いを誰にも気付かれずに攫い、それ以降、その武霊を奪われた武霊使いは目撃されていない……つまり、星波町の中でそれなりの場所を確保出来る人物？　……武霊を奪われた武霊使い達に、男性も半分以上いた事を考えると、性的な目的ではないのか？　……いや、そうとも言い切れないが……だったらだったでそんな面倒な事をする必要がない……要するに、攫った元武霊使いは……少なくとも、人間として扱われていないのだろう

し……それが数年続いている事を考えれば……武霊を使って攫っているのなら、忘却現象の影響で外に協力者などを作るのは難しだろうし、町の外に連れ出す事自体難しいはず。なんせ、攫った事がばっさり抜けるわけだから……それによって起きるリスクを考えない奴がこんな手の込んだ攫い方をしないだろうし……だがそうなると、町内で五十人近く監禁し続ける場所はあるのか？　その人数を生かし続ける為には、それなりの食料や生活雑貨が必要になり……謎の武霊使いが他に仲間を持っていれば別だが……人員だってそれなりに必要になる。そうなれば必ず何らかの疑念や痕跡が生じるだろうし、コストも馬鹿にならない……一番しっくりくるのは……謎の武霊使いは、ネク……うっ！　流石にこの想像は気持ち悪すぎる……だが、地下売春組織でネ……を楽しんでいた客が、タダでそれを行う為に自称弟に協力し、自称弟は彼女を独占する為にその客に協力を求め、地下売春組織を脱出。その後、彼女を隠れ蓑にしながら、客はネ……を楽しみ、行き着いた星波町と言う異常を利用して、より確実に、より安定的に互いが互いの目的の為に、星波町に居ついた……そんな所だろうか？

……まあ、この考えが、情報源が人として壊れてしまっている彼女視点からしか得られない事を考えると……全て合っているかどうかは分からないが……大体合っている。

そんな気がした。

まあ……何であれ……とてつもなく……胸糞悪いな……

第一章『渇欲の武霊使い』２９

俺が思考している間も彼女の過去の映像は続いていた。
星波町に彼女達が居ついてから、幾度となく自警団と戦い、徐々に徐々に彼女との戦い方を研究していった自警団は、終には後一歩の所まで彼女達を追い詰めるまでになる。
これに危機感を覚えた高神麗華は、アニメでも危機に陥った高神麗華がした様に、より強力なヒーローを求め……そんな所に、俺……いや、オウキが現れてしまう。
そして、力を求めた彼女は、俺から武霊を奪おうと動き出した。
アニメと同じ様に弟に作戦を考えさせ、それを忠実に実行して、俺を一人にさせる事に成功したが、俺が高神麗華は嗤うを知っていた事により、自称弟の作戦は瓦解。
ざまあみろ！　って感じもしなくはないが……自称弟がどう思ってるかは知らないが、謎の武霊使いの行動からして……彼女は少なくとも謎の武霊使いから切り捨てられたんだろう。
彼女に何かをし……武霊を暴走させた。
何をしたのかは……時を止められていた為？　……分からなかったが、その何かによって、彼女の武霊の性質は激変し、大量に分裂体が出て……取り込んだ俺を何故か自分の心の中に引き込んだ。
いや、何故か……じゃないな……俺をここに引き込んだのは、『彼女の本当の欲によるもの』だ。
そう俺が思った瞬間、過去の記憶の情景から、無数の人形が広がる情景に戻り、俺の目の前には！？　……何だ？
流石に面食らった。
何故なら、目の前にいた彼女のその恰好は俺が現実世界で見たワンピース姿だったが、その姿は激変していた。
身体の至る所に、角と言える物を生やした……鬼とも悪魔とも言えるその姿。

俺が見れた過去のどの彼女でもないその姿に、俺は強烈な悪寒と共に嫌悪感とも拒絶感とも感じられる嫌な感じを受けた。

（もう始まってる……）

何か知っている風のサヤに俺が問いを考えるより前に、

「私の……本当の欲って？」

彼女が何も込められていない問いを口にした。

……どう答えてあげるべきなのだろうか？　俺の中での答えは決まっている。だが、それが正しいかどうか……

「私は欲しい。欲しいの」

俺が彼女の問いの答えを口にする前に、彼女に更なる変化が起きた。

「欲しいの！　欲しいの？　欲しいの！　欲しいのぉおおおおおぉぉお！」

狂った様に同じ言葉を繰り返す彼女。

それと共に、彼女の身体から生える角が伸び、彼女の後ろから風が発生する。

風が発生した事で、俺はようやく気付いた。

彼女の背後に、何か、巨大な穴が開いている事を……その巨大さで気付かなかったのか……気付けなかったのか……何であれ、その穴から、俺は彼女から感じる同種で、それでいて彼女より圧倒的に強烈な嫌な感じを受ける。

だが、嫌な感じを受けながら、そこから生じている風に吹き飛ばされそうになっていながら、俺は何故かその穴に吸い込まれる様な感覚に陥った。

「夜衣斗！」

不意にサヤが俺の背後に現れ、俺の目をその手で塞いだ。

それによって吸い込まれる感覚はなくなったが……不意に気付く。

彼女の後ろにある大穴は、俺は自分の心の中で見た円状に集まった宙に浮く黒い枝の塊『の水が出てきた後ろの方』に似ている事に

「そう、あれは夜衣斗の『心の中で封じられている物と同じもの』

よ」
俺の気付きを肯定すサヤだが、
「でも、あれは今、『違うもの』になろうとしている」
違うもの？　なんだそりゃ？
「それは……」
口籠るサヤ……また言えない事か！？　ええい！　言える範囲でいいから、あれがその違うものになったらどうなる！？
「……多分、彼女は化け物になるわ」
化け物！？
「うん。『魔人』と呼ばれる化け物に」
魔人！？　魔人ってあの魔人か！？　って、それでも色々あるか！？
魔人と言う言葉に、俺は漫画やアニメなどそう呼ばれるキャラクターをいくつか思い出したが……それはあくまでフィクションだしな……第一、既に彼女の容姿は化け物になってると言えばなってる。
「具体的にどんな魔人になるのかは分からないけど……」
サヤが何かに言い淀むと同時に、
「「「「「欲しいの！　欲しいの！　欲しいの！　欲しいのぉおおおおおおぉお！」」」」」
先程までとは全く違う彼女の様子に加え、彼女の声が多重に聞こえ出した事に、彼女の身に更なる変化が起きた事が分かり、戦慄すると共に、サヤは残りの言葉を口にした。
「……少なくとも、『世界の敵』になる」

「コウリュウ避けて！」
いきなりレベル３になった礼治に驚きながら、美羽は咄嗟にコウリュウに避ける様に指示。
直ぐに応えたコウリュウだが、ＢＢドラゴンを身に纏い、血の足場を作って行った礼治の突撃を避け切れず、足場と同時に作り出し

ていた血の剣で片足を斬り飛ばされてしまう。
しかし、その直後にコウリュウは礼治を逆鱗剣で思いっきり斬り付け、地面に叩き付けた。
レベル2の巨体による剣撃だったが、道路に激突した礼治は平然と起き上がり、美羽を見上げ、笑った。
美羽がその笑みにぞっとすると同時に、礼治の姿が地中に沈むその瞬間、美羽は頭上に嫌な予感を感じ、
「防御鱗！」
反射的に防御鱗を展開するが、その展開した防御鱗に当ったのは、血だった。
礼治が上から襲ってくると思っていた美羽だったが、血だった事に更に危機感を感じる。
ＢＢドラゴンの血が、防御鱗に当たった事で美羽達の周りにその血が散ってしまう。
散った血に囲まれた事により、どこからでも礼治が襲い掛かって来れる状況になってしまった。
対抗策を美羽が考える間もなく、取り囲む様に落ちる血の滴が、大きく広がる。
「来る！　コウリュウ注意して！」
コウリュウと美羽は、どこから礼治が飛び出してきてもいい様に集中。
武霊の攻撃力・防御力は、その武霊の具現化率に大きく左右される。
当然、レベル2とレベル3の具現化率には差があり、まともに攻防すれば先程のコウリュウの足を斬り飛ばされた様にあっさりレベル3の攻撃は通ってしまう。
だが、だからと言って、全く抵抗できないかと言うとそうでもない。
（レベル3だって、コウリュウの最強の攻撃が当たれば！）
美羽がそう思った瞬間、背後から何かが飛び出す気配を感じ、振

り向き様に逆鱗剣を振るうコウリュウ。
現れたのは間違いなく礼治だった。
だが、礼治は自分に振るわれた逆鱗剣をあっさり片手で受け止められてしまう。
（そんな！　美春さんだってこんな事は出来ない。武霊が違うだけどこんなに違うの！？）
美羽のそんな驚愕と共に、コウリュウは逆鱗剣を引くが、びくともしない。
その動作に礼治がにやりと笑う。
同時に、コウリュウの背に何かが刺さり、胸を突き抜け、手に持たれていた美羽の頭の上でギリギリ止まる。
現れたのは、血の針。
それが、周囲に展開されていた血の滴か次々と鋭く変化し、コウリュウに次々と突き刺さる。
全身を血の針で串刺しにされたコウリュウだったが、それでも具現化が解けない。
それはそんな状態にさせられてもまだ致命傷に至ってない事であり、わざと礼治にそうさせられたと言う事。
「一体どういうつもり！？」
美羽の叫びに、礼治は首を傾げる。
「どういうつもりだって？　俺がお前を襲う事に付いてか？　それとも今の今までレベル３を隠してた事に付いてか？」
「両方よ！」
礼治は、めんどくさそうにＢＢドラゴンの頬を掻き、
「なんでお前にそんな事を教えなくちゃいけねぇんだ？」
そんな事を言ってくる礼治に、
「別に教えて貰わなくてもいいわ」
「は？」
聞いて置いてのその返しに、流石に間抜けな顔をする礼治に美羽はにやりと笑い、

「だって、ただの時間稼ぎだもの」
美羽のその言葉と同時に、コウリュウがレーザーブレスを吐く。
だが、血の針で動きを固定されている為、レーザーブレスは当然如く礼治には当たらない。
「何の」
つもりだ？　と言おうと礼治が言おうとした瞬間、その背後にレーザーブレスが襲い掛かり、礼治は驚愕に顔を歪めて上空に吹き飛んだ。
「やった！　大成功！」
目論通り行った攻撃に思わずガッツポーズする美羽。
防御鱗に使われるコウリュウの鱗には、自身が吐く事が出来る属性の攻撃をある程度反射・無効化出来る能力がある。
これを利用してコウリュウは自身のブレスを反射させる事が出来、上に展開した防御鱗の一部を礼治に美羽が話し掛けている間に移動させ、レーザーブレスを反射させた。
レベル2の攻撃だからと言っても、レーザーブレスはコウリュウ最大の攻撃力を持つブレス。
反射によって威力が軽減されたと言っても、これを受ければいくらレベル3でも無事であるはずがない。
そう確信していた美羽だったが、
「っは！　やってくれんじゃねぇか！」
不意に、頭上から礼治の声が聞こえ、驚愕に目を見開く美羽。
慌てて上を見ると、少しだけ焦げたＢＢドラゴンを身に纏った礼治が視野に入り、固まる。
驚く美羽に、礼治は焦げているＢＢドラゴンの腕を摩り、
「っへ、確かにＢＢドラゴンだけじゃ今のは防ぎ切れなかっただろうよ」
（だけじゃ？）
意味が分からない礼治の言葉に、美羽は不意にある事に気付いた。
礼治の摩っている本体の方の腕が何かを持っている事を。

それは美羽の目にはスマートフォンの様に見え、
（……あれって……もしかして!?）
思い付いた可能性に、驚愕し、
「嘘でしょ!?　装備型武霊!?　何で『二体目の武霊』を持ってるの!?」
そう驚きを口にしてしまうが、美羽のその言葉に礼治は意味深な笑みを浮かべ、
「っは!　まあ、『そう』思うよな!　だがこいつは」
何かを言い掛けた時、
「ッチ!　ようやくかよ!　随分おせぇじゃねぇか」
礼治がそうつぶやくのを美羽は聞いたが、その言葉に疑問に思うより早く、上空の分裂体達に更に変化が起きた事に気付き、愕然とした。
一部の分裂体達の形が崩れ、元のスライムの形に戻ったかと思えば、
「そ、そんな夜衣斗さん……」
その姿をオウキの姿に変えからだ。
しかも、上空に無数の赤いオウキが現れると同時に、不意に近くにあった分裂体の柱が途切れ、それまで一部しか降下してこなかった分裂体達が一斉に降下し始める。
まるで赤い天井が落下してくるかのごとく迫る分裂体。
「コ!　コウリュウ!」
大慌てで迎え撃とうとする美羽だが、血の針のせいでコウリュウは動けない。
事態が事態なので、美羽は血の針を消すよう説得しようと礼治を見るが、礼治はそんな美羽を笑い、それどころか、美羽に向かって落下しようと身構えていた。
「何なの!?　今そんな事態じゃないでしょ!?　このままだったらあなたも!」
美羽の叫びに、礼治は小ばかにする様に笑って急降下しようとし

た。
その瞬間、
「何だと！？」
急降下してきた何かにＢＢドラゴンの翼を切り裂かれ、新たに別の何かに蹴り飛ばされ、地面に叩き落とされる礼治。
あまりにも唐突な事態に、絶体絶命な状況を忘れ、美羽は唖然とした。
何故なら、美羽を守る様に礼治に攻撃したのは、『分裂体となったオウキ達』だったからだ。

第一章『渇欲の武霊使い』３０

世界の敵になるだぁ！？

俺の唐突な怒りに、目を塞いでいるサヤがビックとなる。

あんな目に！　あんな目にあってなお、誰かの人形として使われ！　他人の欲を自分の欲だと誤認して！　その上、世界の敵になるだぁあ！？　誰だ！　誰の欲なんだ！

心の奥底から沸き上がる怒りの歯止めが効かない。

元から世界の理不尽・不公平に怒りを覚えていた。

自身の身にも僅かばかりか降り懸かってきていた上に、世の中には調べなくても、調べてもそればかりあり、自然と知り、怒りのぶつけ所がない憤怒を常に抱いてきた。

当然、その時の俺にはその理不尽・不公平に対応出来る力などなく、ただただ怒りの炎が燃え尽きるのを待つことしかできなかった。

だが！　今の俺にはオウキがいる！　そうだろサヤ！

「や、夜衣斗」

何かに耐える様につらそうに俺に呼び掛けるサヤ。

「オウキはあくまで夜衣斗の運命を変える選択。あの娘の運命を変える選択じゃないわ」

っは！　違うね！　俺に降り掛かった死の運命なら、これはもう俺の運命だ！　そうだろオウキ！

俺の呼び声に応える様に、俺の内からオウキが応える。

それと共に、

「きゃ！」

サヤが俺から弾かれ、俺は真っ正面から穴を直視してしまう。いや！　直視した！

再び見た事で分かった。

あの穴の向こうから、欲が、願いが、望みが、懇願が、脅迫が、ありとあらゆる表現が出来る『何か』が、こちらに向かってやって

きている。
それは意志の様な物であり、そうじゃない様にも感じられ、ただただ根源的な恐怖感を感じてしまう。
それを直で受け止めている彼女が、それによって変化し、いや、それに応えようと、それも自分の欲だと誤認して……世界の敵になるってか!?　意味わかんねぇ！　なんだそりゃ！　そんなのが彼女の運命だって言うのなら!
感情に身を任せたまま駆け出し、
「夜衣斗！　駄目！」
サヤの制止の声を振り切って、俺は、
穴に近付いたせいか、俺の中に『それ』が入ってくる。
俺の中に入ってきた『それ』は、俺の中で『俺に対応した何かに変化』しようとするのが分かり、それが俺の感情を更に逆撫でし、聞こえてくる『言葉にすらなっていない心に直接届く囁き』に俺は思わず
「うるせぇえええぇぇえええ!」
叫び、感情に身を任せて穴を思いっきり殴った!

麗華を名乗る少女の精神世界で夜衣斗がオウキを呼んだ時、オウキを武装している夜衣斗の武霊は、麗華の武霊に半ば奪われ掛けていた。
それによって一部の分裂体達がオウキの姿となったが、そのタイミングで夜衣斗は『穴』を殴った。
夜衣斗の拳が『穴』に当った瞬間、夜衣斗から放出される『何か』が『穴』に大量に流れ込み、まるで爆発するかの様に『穴』が消滅。
それ共に『穴』から最後に放出されていた『何か』に、夜衣斗から発せられる『何か』が混ざり、麗華の武霊に一緒に吸収される。
吸収された夜衣斗の『何か』は、麗華の武霊の壊れた部分をまるで補う様に変化し、『元に戻してしまう』。

これにより暴走状態から戻った麗華の武霊は、これまで供給されていた『何か』が断たれた事もあり、分裂体を新たに作り出せなくなり、柱が途切れる。

だがそれでも、今まで以上に欲する主人の願いに応えて、町の全ての武霊使いの武霊を奪おうと、既に出ていた全ての分裂体達に麗華の武霊は命令を出した。

命令によって一斉に動き出し、まるで天井が落下する様に町に迫る分裂体達の群れ。

それが通過した後に、残されている分裂体達がいた。

半ばまで奪われ分裂体として形を成した赤いオウキ達。

完全に奪われている訳では無かった為、そこにオウキを武装している武霊の意識は無い。

それ故に麗華の武霊の命令に反応しなかったのだが、そのオウキの分裂体達に、麗華の武霊と同様に夜衣斗の『何か』が吸収された瞬間、赤いオウキ達の目に光が宿った。

夜衣斗の『何か』が、麗華の武霊の壊れ部分に反応して変化した様に、分裂体として欠如していた意識をまるで補う様に仮初の意識を赤いオウキ達に生じさせた。

麗華の武霊の意識から切り離されて生じた意識は、オウキの意識をオウキとして再現し、夜衣斗の『何か』と共に流れ込んできた夜衣斗の意識に応える。

麗華を名乗る少女を彼女したらしめている数多の欲に対する怒り。

それを体現している奪ってきた武霊達の分裂体と弟・礼治を自称する少年。

その二つが重なった事により、赤いオウキ達は誰に命令される事も無く、一斉に分裂体の群れへと突撃し始めた。

第一章『渇欲の武霊使い』３１

麗華の分裂体が大量に現れた事を知った美春は、直ぐに自警団本部に連絡し、全町民のシェルターへの避難誘導を指示。

そして自分は、避難にどうしても時間が掛かる病院へと駈け付け、自身の武霊をレベル３で具現化させた。

美春の武霊『コロ丸』は、彼女が子供の頃に飼っていた真っ白な秋田犬が基になった武霊で、美春の望みに応え、全身の体毛を自在に伸縮・硬化して操る武霊能力を持つ様変化している。

その武霊能力を使い、額に毛の刃を作り出し、伸ばした体毛を病院の周囲に植えられている木々に巻き付け、パチンコの様に空へと飛ぶ。

撃ち出された様に飛んだ先の分裂体に刃を突き刺し、一刀両断。

霧散しきる前の分裂体を足場に、隣の分裂体に襲い掛かり切り裂き、同じ様に足場とするを繰り返し、次々と病院へ降下してきた分裂体を倒していたが、

（嘘でしょ！？　いきなりどうして！？）

唐突に全ての分裂体達が一斉に落下してきた事に、慌てて病院の屋上に降りる美春。

それまでの群れと違い、まるで天井の様に落下してくる分裂体達の密度は、とても足場に使えるものではなく、飛ぶ事もの、射撃系の攻撃手段を持たないコロ丸には、いくらレベル３の状態でもどうする事も出来ない状態だった。

迫りくる分裂体の天井に、このままでは星波町が押し潰される。

シェルターに入れば、周りに施されている武霊封じの文字により助かる可能性もなくはないが、所詮武霊封じの文字も武霊能力。それにも当然限度があり、これほどの密度と量に襲われればシェルターであろうと耐えられるとは思えなかった。

あまりにも唐突過ぎる全滅の危機。

だからと言ってすぐさま絶望して諦めるほど、美春は弱い人間ではない。

まだ避難が終わっていない者達を可能な限り早く多くシェルターに避難させる為、レベル３のまま病院に入ろうとした。

だが、そんな美春に向け、分裂体達の一部が一気に落下し始める。

まるで逃がすかと言わんばかりのタイミングで、スコールの様に降ってくる分裂体達。

（狙いは武霊使いなの！？）

分裂体達の反応に、そう気付いた美春は降って来た分裂体達を病院から遠ざける為、駆け出し、屋上から一気に飛び出し、戦い易い星波川へと向かう。

だが、その片手は未だにギブスをしたままであり、武霊使いが武霊を纏い自ら操るレベル３の状態では、普段以上に走る事は出来ない。

これが四肢を持たない人形以外の武霊だったら状況は変わるのだが、生憎、仕組み上どうしても自らの身体機能の障害の影響が出るタイプのレベル３な為、どうしようもない。

（このままでは追い付かれる）

背後から迫る気配にそう悟った美春は、まるで蝶が脱皮をするかの様にレベル３からレベル１に具現化レベルを落とし、そのまま疾走を続けるコロ丸の背にしがみ付いた。

コロ丸は自らの武霊使いを落とさず更に速度を上げる為に背中の体毛を伸ばし、美春の身体に巻き付け固定。

それと同時に、今まで以上の速度で町中を疾走し、瞬く間に星波川の土手に辿り着き、土手を一気に飛び越えた。

その際に美春は星降り山近くの上空で戦っているコウリュウとＢＢドラゴンの姿を目撃し、驚愕する。

美羽と礼治が戦闘に入っている事は、事前に連絡を受けて知っていた。

美羽は町に在住する武霊使いの中でも実力を持った武霊使いであ

り、その武霊コウリュウは、空を飛べる武霊の中でもトップクラスの能力を持つ武霊だったので、美春は特に心配らしい心配はしていなかった。

更に現在星波町には、ゴールデンウィーク中という事もあり、飛行型の武霊を持つ武霊使いの数が少なく、実力の伴った武霊使いとなるとほとんどいないと言っていい状況だった。

その為、応援はかえって邪魔になると考え、今の今まで任せっ放しにしていたのだが、

（礼治がレベル３に達している！？）

さきほどの自分と同じ様に武霊を身に纏った礼治に、驚愕と共に激しい危機感を覚えたが、美春も直ぐに美羽の事を心配する余裕が無くなった。

何故なら、戦い易い場所へと思っていた星波川の川辺には、まるで待ち構えたいたかの様に非飛行型分裂体達が待ち構えていたからだ。

更にこれまで大量に現れた分裂体達は、一切自らの武霊能力を使う様子を見せなかったのだが、川辺にいた分裂体達は美春に向け、射撃系の武霊能力を撃ち始めた。

美春は咄嗟にコロ丸の両肩の体毛を伸ばし、翼の様に変え、グライダーの様に滑空し、地上からの攻撃を回避。

だが、下にも背後にも、更に上からも分裂体達が迫っているこの状況を、完全に接近戦型であるコロ丸にはどうしようもない状況だった。

そんな状況でもあきらめない美春は、コロ丸の中に沈み、レベル３となって全身の毛を一気に伸ばし、最大限の硬化を行おうとした瞬間、何かが分裂体以上のスピードで降下してくる気配を感じた。

自然落下のスピードではなく、明らかに飛行能力を利用した降下速度に、美春は一瞬躊躇った。

美春はレベル３の具現化率の高さを利用して、非飛行型の分裂体達が地上に降り切るまで防御しようとしていた。

分裂体はあくまでレベル1の武霊能力である為、動物系武霊である為、防御力の低いコロ丸でもレベル3になれば十分攻撃を耐える事が出来る。

そして、地上戦となれば、攻撃方向が限定される事もあり、どんなに数があろうと、いくらでも戦いようがあるのだが、ここに飛行系の分裂体が加わるとなれば防戦一方になるのは明らか。

そうなれば、今の対応は明らかに間違い。

だが、今全方位防御を解けば、果たして分裂体達の攻撃を避け切れるかどうか。

そんな一瞬の躊躇いが、美春が次の対応をする時間を奪ってしまい、気が付いたら急速に降下してきた飛行系の分裂体達が周りを取り囲む気配を感じた。

咄嗟に伸ばした体毛の硬化を行い、それに伴って空気抵抗が無くなり、一気に川辺へと落下。

かなりの衝撃と共に、何体かの分裂体を霧散化させて落ちたが、続けて起きると思っていた攻撃の嵐が、一切来なかった。

しかも、コロ丸の優れた感覚から感じられる周囲から状況は、美春に軽い混乱を与えるには十分な物だった。

何故なら、美春の周囲を取り囲んでいる飛行系の分裂体達が、まるで美春を守る様に分裂体達を戦っていると感じられたからだ。

分裂体は、いくら他の武霊使いから奪われた武霊だからと言って、根本的に高神麗華の武霊の武霊能力。

麗華の命令なしに動く為、それぞれ独自の意思を保有している様だが、だからと言って逆らい同士討ちをする様な事は一切する様子を見せなかった。

これまではだ。

なのに、美春の周囲にいる分裂体達は、気配からして同じ武霊の分裂達は麗華の命令に逆らって、襲おうとしている武霊使いを守っている。

あまりの事態に、美春は恐る恐る硬化した体毛の一部を元に戻し、

周囲を確認する。
　すると、美春の視界に入った分裂体達の姿に、昨日目撃した夜衣斗の武霊・オウキの姿が入った。
　しかも、全てが赤い姿で、複数も。
　麗華の事を何度も戦って、対応策に頭を悩めていた美春には、とても信じられない光景であり、絶句するしかない赤いオウキ達とその他の分裂体達が戦い合っている光景。
「とことん例外的な子ね……」
　呆然とそう呟きながら、美春は全身の体毛を元に戻し、周囲の空を見回す。
　迫る分裂体達の天井を不可視の盾で防ぐ赤いオウキ達。
　盾で防いでいる分裂体達を、別の赤いオウキ達が巨大な様々な重火器で撃ち抜き、霧散させる。
　地上に降りてきている分裂体達を複数の赤いオウキで取り囲み、拳銃と刀で次々と霧散させる。
　襲われている武霊と武霊使い達を守る様に取り囲み、襲い掛かる分裂体達を防ぐ赤いオウキ達と返り討ちにするオウキ達。
　突然現れ、自分達に味方する分裂体達に戸惑う武霊使い達とその武霊達の様子は、遠目からでもありありと分かり、美春は思わず状況を忘れて苦笑した。
　そしてすぐさま、行動の指針を示す為に、駆け出す。
　美春を守る様に動いていた赤いオウキ達は慌てて追走。
　その様子を確認しながら、美春は次々と赤いオウキ以外の分裂体達を倒すと、美春の意図をすぐさま理解したのか、赤いオウキ達は美春を守るのではなく、援護する様に動き出す。
　これにより、美春の強さも相まって、川辺に集まった分裂体達は瞬く間に駆逐され、その様子は町の上空で奮闘していた武霊使いからもはっきりと見えた。
　自警団団長美春に続けとばかりに、空から地上へと伝播して反撃を開始する星波町の武霊使い達。

武霊は、その行動一つに武霊使いの意思が無ければ、その分だけその行動はあらゆる面で弱くなる。
明らかに麗華の意思が行き届いていないそんな分裂体達に美春達が苦戦する理由はただ一つ。
圧倒的な数の多さ。
その理由が、赤いオウキ達の登場により解消されれば、勝てない通りがない訳がなく。
実際、分裂体達は急速にその数を減らし、空を隠していた分裂体の天井に次々と大穴が空き、現れた大量の分裂体達が全滅するのは時間の問題となった。
そんな劇的な逆転劇の中、美春はふと疑問に思う。
分裂体達が弱くなっているのに、分裂体となったオウキは、明らかに分裂体達より一体一体が強かった。
元がそれだけ強いのか、それとも全く別の理由により強くなっているのか、今の美春には判断が付かず、また余裕もない。
（問い質さなくちゃいけない事がまた増えたわね……当人が分かる理由ならいいんだけど……）
そんな事を思いながら、美春は地上に降りた分裂体達を一掃する為に星波町を駆け回った。

第一章『渇欲の武霊使い』３２

突然現れた分裂体のオウキ達に攻撃され、礼治は美羽の前から姿を消した。

だが、コウリュウに刺さっている血の針は消えない。

身動きが取れないコウリュウは、必死に血の針を取ろうとするが、腕すら動けない状態になっている為、それすらなかなか出来ない。

再具現化をすれば簡単に抜け出せるが、再具現化出来るほど自身の意志力が残っているか美羽は不安を抱き、逡巡するが、辛そうなコウリュウの姿に再具現化を決意する。

コウリュウをイメージする事を意図的に止めると、コウリュウの姿が霧散化。

当然、コウリュウに抱えられていた美羽は、それにより落下。

落下する事に慣れているのか、美羽は特に慌てる事も無く、直ぐにコウリュウを強くイメージ。

「おいで！　コウリュウ！」

美羽の呼び掛けに応え、背後から再び現れた半透明のコウリュウはすぐさま美羽の下に移動し、レベル１で具現化。

コウリュウの念動力でふわりとその背中に着地する美羽だったが、同時に意識の薄れを感じ、倒れ掛ける。

心配する気持ちを送ってくるコウリュウに、

「大丈夫……今の内に夜衣斗さんの所に行こう」

そう言って美羽は気丈にそう言って廃校の方角を見る。

自分の武霊使いの気持ちに応え、コウリュウは直ぐに廃校へと飛ぶ。

周囲では分裂体達と赤いオウキ達との戦いが繰り広げられている中、廃校上空へと辿り着いた美羽は、激しい戦闘跡があるグラウンドで、夜衣斗と麗華と名乗っている少女が浮かぶ赤いスライムを目撃し、短い悲鳴を上げてしまう。

分裂体のオウキが現れたと言う事は、夜衣斗が麗華の武霊に取り込まれてしまったという事であり、そうなれば、どうなるか、直ぐに美羽は自分が今まで見てきた光景を思い出し、戦慄した。

だが、直ぐに疑問に思う。

何故なら、夜衣斗の姿は昨日目撃した全てが黒いマントとタイツとスーツが一体になった様な姿になっており、服が溶けている様子は一切なかった。

その様子に、美羽は思い出した。

夜衣斗が星電越しに語った予想。

麗華の武霊に取り込んだ武霊使いを跡形もなく爆発して殺す武霊能力はない。

本当にその予想通りの光景が目の前にある。

服が溶かさていないのに、オウキが分裂体として現れていると言う今までにない事も同時に起こっているが、それすら気付かないほど美羽は目の前の光景が伝える真実に衝撃を受けていた。

あまりの衝撃に呆然自失となっている美羽の前で、更に驚愕する変化が起きる。

赤いスライムが美羽の見ている前で急激に膨張し、まるで爆発するかの様に弾け飛んだ。

反射的に過去の記憶と重なり、悲鳴を上げそうになった美羽だが、爆発して飛び散る赤いスライムの破片の中に、夜衣斗の姿を発見し、大慌てでコウリュウを向かわせようとするが、それより早く夜衣斗の背後からオウキが現れ、具現化。

夜衣斗を受け止めたオウキは、吹き飛んだ威力を相殺する様に着地。

その反対側で、同じ様に麗華を名乗っている少女の背後から赤いスライムが現れ、その弾力で少女を優しく受け止め着地。

互いの武霊に抱えられ、対峙する様な格好になる二人だが、その二人ともまるでそこに意識が無いかの様に呆然としていた。

武霊が具現化している為、意識を失っている訳ではない様だった

が、一体二人の身に何が起きているのか分からない美羽は、どうすればいいのか分からず、困惑していると、不意にコウリュウが自分の視界を送ってきた。
送られてきた光景には、次々と霧散化する星波町上空の分裂体達が映っていた。
唐突な解決に、唖然とする美羽の耳に、誰かの叫び声が聞こえた。
慌てて声がした方を見ると、いつの間にか意識が戻ってきた麗華が夜衣斗に向かって何かを叫んでおり、その聞こえてくる内容に美羽はそれまでの危機を忘れて、目を瞬かせる事になった。

彼女の背後に在った穴を思いっきり殴った瞬間、まるで断末魔の様に何かが爆発した。
とんでもない爆風に俺が吹き飛ばされそうになった瞬間、
「馬鹿！」
サヤが俺を受け止めると同時に、何故か爆風の影響が消えた。
「なんて危ない事をするの！　もし『夜衣斗のが』彼女より小さかったら、夜衣斗は『向こう側』に『落ちてた』んだからね！」
はぁ？　……俺の中にある穴の事か？　と言うか落ちる？
「う～……もう！」
また話せない情報か……まあ、今はそんな事より
「そんな事！？」
いや、だから、色々と制限がある事をあれこれするのは今じゃ無理だろ？　反省や説教は後でも出来る。
「それはそうだけど……」
とにかく、
俺がサヤに対して何かを思おうとした時、視界を消すほどの爆風が唐突に収まった。
爆風が収まった後には、真っ白な何もない世界となっていて、その中にただ一人、現実世界と同じ姿の彼女だけがぼーと立っていた。

彼女には何もない。
だから、何も無くなれば、自分から何かをする事はない。
穴から生じた爆風が何だったのかは分からないが、彼女に対して向けられた欲を全て『一時的に』一掃してくれた。
そんな気がして、同時に今がチャンスだと思った。
彼女が彼女としての本当の欲を知るチャンスだと……
抱き着いているサヤを手で離れる様に指示し、俺はゆっくり彼女へと近付いた。
俺が近付いた事で、彼女は俺を見る。
そして、
「私の本当の欲って？」
俺の欲求に反応してそんな事を弱弱しい笑顔で言ってくる。
この反応は、彼女の反応じゃないのはありありと分かり、俺はぎゅっと拳を握った。
これから俺がする事は、間違っている事かもしれない。
精神科医でも、そっち方面の知識に詳しいわけでもない俺が、何かをするべきではないかもしれない。
だが、それでも、何かをしなくちゃいられない！　しなくちゃいけない！
「……本当に分からないのか？」
「分からない。分からないの」
「なんで分からない？」
「なんで？　なんで？」
「知ってるはずだ。自分がなんで他人の欲を自分の欲として認識したのか、何で赤の他人を自分の弟として受け入れたのか、何でだ？」
「なん……で？」
俺から何も欲しない。
ただ問う。
それだけで何もない彼女はきっと……

「私の……私が……本当に欲してたのは……」
何もない、真っ白な周囲の空間に断片的な様々な映像が現れては消え始める。
それらは母親らしき人物の記憶であり、親の振りをさせられた時の記憶であり、自らに向けられた間違った幸福感であり……望み望まれ、欲し欲しられ、僅かに、塵芥としか言いようがないほどの、彼女が真に欲する事に繋がっている出来事。
「……そう、それが、君が本当に欲している事」
「欲している事？」
首を傾げる彼女。
「欲しているのなら、それを形にすればいい」
「形に？」
「それを口にすればいい」
「口に？」
「それを誰も咎める者も、止める者も、否定する者も、ここにはいないよ」
「あ……ああ……」
戸惑った様な、困惑した様な、どうしたらいいのか、どうしてもいいのか分からない、どうしてそうなるのか分からない彼女は、すがる様に唯一この場にいる俺に視線を向ける。
「わ、私は……私は……あ」
何もない様に見える『実』から必死に絞り出すように、

「『愛』が……『愛が欲しい』」

辿り着いた。
ようやく気付いた彼女に、俺は少しほっとした。
それは、彼女が、いや、人が生まれた時、いや、生じた時から向けられるはずのもの。
彼女は、それを生れてからこれまで、一度も向けられたことが無

いもの。
だが、人としての本能からそれの存在を知っていた。
だから、求め求め、それが僅かにでも感じられる事を受け入れ、受け入れてしまい、受け入れ続け、人として壊れてしまった。
だったら、彼女が彼女として本当に至らしめているそれに彼女自ら気付かせ、『本当に欲しさせなくてはいけない』……だから――

不意に、周囲の世界が現実世界に戻った。
背後にいるオウキが俺を支えて立たせている様で、対面には、まるで対峙する様に彼女が麗華のスライムに取り込まれる様な形で支えられて立っている。
その彼女が叫ぶ。
「欲しい。欲しいの！　愛が、愛が！　愛が！！」
俺を見る。
真っ直ぐに、
「愛が……」
救いを求める様に、
「愛して」
縋り付く様に、
「私を愛して」
俺に対して手を伸ばす。
「私を愛して下さい」
それは彼女が人生で初めて形にした。口にした彼女の欲。
その欲求に、俺は激しく答えたくなる欲求に襲われた。
知ってしまった彼女の過去に対する怒り。
知ってしまった彼女の現在に対する同情。
知ってしまった彼女の未来に対する不安。
様々な感情が俺に、彼女の欲に応えろと、応えてしまえと、言ってくる。

応えてしまいたい。
応えてしまいたいが……だが！

第一章『渇欲の武霊使い』３３

美羽は酷く困惑していた。
何故なら、夜衣斗と対峙する麗華を名乗っていた少女が、あまりにも場違いな事を叫んだからだ。
愛が欲しい。
少女は確かにそう叫んだ。
何度も、何度も叫び、夜衣斗を求めた。
それまで美羽が見た事があるどの麗華とも違う。
妖艶でもなく、幼くもなく、ぞっとするほどの何かを感じる事も無い。
ただただ純粋な求め。
そのあまりにも純粋な告白に、求められてないはずの美羽でさえ、その求めに応えてしまいたいと思うほど、凄まじい求め。
その事実に、美羽は夜衣斗がその求めを応えてしまうのでは？と思ってしまった。
だが、夜衣斗が叫びに対して口にした言葉は、
「嫌だ」
拒絶の言葉だった。

求められ続け、応え続けた彼女にとって、その拒絶は初めての事だった。
だから、理解出来ない。
元々それを理解させる基準がない。
だから、
「愛して！」
「嫌だ」
「愛してよ！」
「嫌だね！」

「愛して下さい！」
「絶対に嫌だね！」
繰り返す。
「愛して！　愛して！　愛して！　愛してよ！！」
何度も何度も繰り返す。
まるでだだをこねる様に、
「愛してよ……」
繰り返す。
だが、返ってくる答えは、
「嫌だ。お前なんか欲しくない」
拒絶。
拒絶拒絶拒絶

と

彼女の叫びと共に、彼女に纏わりついていた彼女の武霊が変化する。

赤い、高神麗華は嗤うで主人公の高神麗華がよく来ていた赤いドレスとなり、彼女に着られた。

彼女は、例え自分の欲求を自覚しても、きっとその欲求を得る方法を、『今までのやり方』で得ようとする。

間違った。人として間違ったやり方でだ。

それしか知らない彼女なのから、当然の行動だが……

それでは何も変わらない。

それでは彼女は人になれない。

ならどうするべきか？

答えは簡単だ。

彼女のそれまでやり方を否定すればいい。

彼女のそれまで生き方を否定すればいい。

求められ、応える事しか知らないのなら、拒絶すればいい。

欲し、欲せられる事しかしらないのなら、拒絶すればいい。

そうする事で、彼女は知る。

自分の感情を。

拒絶から生じる感情を。

初めて知る。

例えその感情が人として負の感情だったとしても、それらが呼び水となり、きっと彼女を人として歩ませる切っ掛けとなる。

いや！　切っ掛けにさせる！

その為には、今の彼女を形作っているものの象徴たる『奪った武霊達』を完膚なきまでに叩きのめさなくちゃいけない。

涙を流しながら、彼女が両手を俺に向かって広げる。

来るか！　やるぞオウキ！

俺の心の呼び掛けに、オウキが俺の前に出ようとした瞬間、赤いドレスの裾から赤い粘液が地面に広がり、そこから次々とさっき見た分裂体達が一体一体次々と現れる。
俺は直ぐにクイックアップ機能を起動。
ゆっくり動く世界の中で思考に入る。
……そう言えば、さっき出てきた大量の分裂体はどうなったんだろうか？
副眼カメラで空を、周囲を確認すると、空にコウリュウに乗った美羽さんがいる事に気付いただけで、あの大量の分裂体はどこにもいなかった。
美羽さん。あの赤黒いドラゴンの武霊を退ける事が出来たのか……俺が助けに行こうなんて考える必要なんてなかった……まあ、当然と言えば当然か、武霊使いとしてのキャリアは美羽さんの方が圧倒的に上なんだから……だが、あの大量の分裂体はどこにいったんだろう？　美羽さんが倒した？　……まあ、今は深く考えるのはよすか……そんな事より、今はこれから現れる分裂体をどう倒すかだな……
（直接彼女を倒す訳にはいかないの？）
サヤの問いに、俺は小さく首を横に振る。
駄目だな。それでは彼女を救えない。
（でも、今のままじゃさっきの繰り返しになるわよ？）
……『あのモード』を使う。
（あの？　あのって……あの！？　……だ、大丈夫なの？）
分からない……分からないが……それしか方法は無いだろ？
（……そうね……昨日ならいざ知らず……今のオウキの具現化率と、今の夜衣斗なら何とか持つかも）
昨日なら？　……具現化率で意志力の消費率が変わるのは分かるが……どう考えても意志力の消費が激しそうだものな、あれは……と言うか今の俺？　……昨日は武霊を具現化したばかりだからか？
（ええ、そうよ）

素直に肯定するサヤだが……どうもまだ何かある様な……そんな気がするな……まあ、なんであれ、いいかオウキ？

俺の問いに、オウキが了承と覚悟の気持ちを伝えてくる。

上等！　行くぞオウキ！

クイックアップ機能を解除。

同時に俺は、

持てよ俺の意志力！

自分に気合いを入れ、王継戦機の物語の一シーンを思い浮かべる。

「今こそ！　そのもう一つの名の意味を知らしめる時！」

その言葉と共に、オウキが俺の前に飛び出る。

「シールアーマー解放！」

オウキの外装が全て開き、そこから黒い光の靄がチラチラと出てくる。

「ライオンハート機関フルドライブ！」

俺の言葉と共に、オウキの動力源ライオンハート機関が限界近くまで稼働。

更に装甲の下にあった黒い光の靄・ライオンハート機関から漏れる余剰エネルギーが溢れ出し、

「オウキは、王の機械！　オウキは、王の騎士！　そして、オウキは、」

一気にオウキの姿を覆い隠し、

「王の鬼！」

更なる言葉と共に余剰エネルギー徐々に形を変え、

「オーバードライブ解禁！」

と言い切る共に余剰エネルギーが完全に固着化し、機体の姿が白銀の騎士甲冑から、『黒い大鬼』の様な姿になりオーバードライブシステムが完全起動した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8364s/

武装守護霊

2011年11月22日04時04分発行